の交を許すとは其仲間に入るを許さゞる也

◆暫くも是れなき時は暫くでも日陰を惜む心が無い時はの意也

わからぬためなのであらうか理屈がわかつて惜まない人に對しては何も云ふことがないがその馬鹿にて理屈がわかんで怠たれる人のために云へば只一錢のぜにと云ふと何んでもないやうだがそれでもこれを集めたるをりには遂に貧乏人が金持になるぢや故に商賣人はたとひ一錢の金でも非常にこれを惜かるのであるこれと同じやうに只の一瞬時の間はあるもなきも同じやうなる時間であるがこの瞬間と雖も積みに積みて參れば忽ちにして一生を終つて仕舞ふものぢやだから眞の道に志す所の人は只ぼんやりと長い間のことを考えて時間を惜しむやうなことはない只この瞬間の空しく過ぎ去ることを惜しむがよいのである。若し誰かゞ來たつて自分に『お前の命は今日限りである明日は屹度死ぬる』と云つたならこの今日と云ふ日の暮れる間そこに何んの希望があらうか賴む所もなく何をする心もすまい併しこれは只かういふ一條のたとへなるのみではない吾々人間がこの世の中に生れて居れる間と云つても何時死ぬるやも知れないのであるから畢竟このたとへには違はないのであるところが一日の

中飲食するとか他所へ行くとか眠るとか話をするとか或はあるくとかこれ等のことには已むを得ずして多くの時間を捨てればならぬがうして見ると餘り時間は極めて僅少なるものとなるのであるがその僅少の時間の間につまらぬ事をなしたりつまらぬ事を云つたりつまらぬ事を考えたりして貴重なる時間を費すのみならずかうして日を暮し月を送り遂に一生涯を送つて仕舞ふ何んと馬鹿なることではあるまいか昔し謝靈運と云ふ人は法華の筆受けであつたのであるが心中常に自然を愛しこれに執着して居たために惠遠は遂に彼の白蓮社に入ることを許さなかつたそれでは何にもなさずに居るのがよいかと云ふとたとひ暫らくでも何にもせずに居つてはこれは死したる人同樣なるものである然らば何のために光陰を惜むやと問ふものあらば自分は答える無念無想で何の俗事にもかゝはらずに居る只それだけでよいのであるしかしもし其の間に道を修めるがよい強いて他の事はするには及ばないのである

【第百九段】　高名の木のぼりといひし男、人を掟て、高き木に登せて、梢を切らせしにいと危く見えし程は云ふ事もなくて、下るゝ時に軒だけばかりになりて、過ちすな、心して下りよ、と詞をかけ侍りしを、斯ばかりになりては、飛び下るゝとも下りなん、如何に斯く云ふぞと申し侍りしかば、その事に候ふ、目眩き枝危き程は、己れが恐れ侍れば申さず、過ちは安き所になりて、必ず仕る事に候ふといふ。あやしき下臈なれども、聖人の誡めに叶へり。鞠も難き所を蹴出して後易く思へば、必ず落つと侍るやらん。

【第百九段】
◆高名の木のぼり　木登で有名なる男也◆掟て丶　命じての意也◆軒だけばかりに　軒の高さばかりになつての意◆過ちは安き所に　易繫辭に「君子安而不レ忘レ危、存而不レ忘レ亡云々」とあり◆下臈　賤しい低級者の意、委しくは前に述べたり

（講譯）　木のぼりの名人として世にその名を知られたる男があつたが或時人を指圖して高い木に登らせてその木の梢を切らせたる事があつたズッと高い所であぶなげに見えるときには何んとも云はず既に用がすんで下りる時に軒位の高さになつたとき『やり損ふといけないから注意しろ』と云ひ居つたあまりに妙なることを云ふので後で聞いて居つたる者が『その位まで下りて來たらば飛び下りたるところで知れたものだどうしてまたそんな事を云はるゝのですか』と問ひ聞いて見たる所がその男のこれに答えて云へることはかうであつた『そこなんです私の注意するのは一体高い所へ登つて目まひがしたり細い枝が折れさうに思はれまするがやり損ひは屹度何んク〳〵もので居ますから大丈夫でありまするがやり損ひは屹度何んでもない所になつてやるのであります』と云つたこんな木のぼりなどは勿論賤しい身分のものがするのであるがその云ふ所は立派な聖人の戒めにかなつて居るそれがかの蹴鞠の場合に於けるも同じでむづかしい所はうまく行くものであるがすんで大丈夫と思ふやうなる

【第百十段一】

◆双六　支那傳來の遊戯法、二人にて行ふ、對局者双方十二格あり黒方白方、各馬十二を並べ竹筒に二個の骰子を入れて振出し、其數だけ馬を進めて、早く敵中に入りたるを勝となす◆道を知れる教へ　物の道理をよく知れる教訓の意也

所になると屹度落すと云ふことである

【第百十段】　双六の上手といひし人に、その術を問ひ侍りしかば、勝たんと打つべからず、負けじと打つべきなり。いづれの手か疾く負けぬべきと案じて、その手を使はずして、一目なりとも、遅く負くべき手につくべしといふ。道を知れる教へ、身を修め國を保たん道も亦然かなり。

（講譯）　双六の上手ぢやすと云はれる人にどうしたらば勝てるものであるにやと尋ねたるところがそれの答えて云ふには『初めから勝たうと云ふ氣にて打つてはならぬ負けまいと云ふ考えで打つべきものである、で先づどの手が一番早く負けるかを考えてその手は使はず一目でも遅く負けると云ふ手を使ふがよい』とであ

【第百十一段】

◆四重　殺生、偷盗、邪婬、妄語を四重の禁戒と云ふ、唐にては之を斷頭罪と云ひ、懺悔しても滅せざる大罪惡となせり◆五逆　父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、和合僧を破り佛身より血を出すの五罪を五逆と云ふ

【第百十二段】

◆聞かん人に　遠方に赴く！云ふ人に◆いひつたとのことであるが之はまことに尤もなる話であるので身を修め天下を治める道もつまりこれと同じことぢや

【第百十一段】　圍碁双六好みて明し暮す人は、四重五逆にも勝れる惡事とぞ思ふと、或聖の申し、事、耳に留まりていみじく覺え侍る。

（講譯）　圍碁や双六をするのを好んで日を送るところの人は四重五逆の大惡に過ぎたる所のわるい事であると思ふと或高僧の申される事を今も尚ほ耳に聞き留め覺えて居るが實際御尤のことである

【第百十二段】　明日は遠國へ赴くべしと聞かん人に、心靜に爲すべからん業をば、人いひかけてんや。俄

かけてんや　他人が餓の大事を言ひかけようや言ひかけはしない◆世を遁れたらん人　出家して佛門に歸した人◆是を必ずとせば　之か皆必ず仕遂げようとしたらの意◆日暮れ途遠し　白居易の傳に「日暮レテ途遠シ、吾ガ生既ニ蹉跎タリ」とあるより來る、蹉跎は「其意を遂げず」或は「時を失ふ」或は「跌也」とあり、佛道に未だ入らざるを譬へて云へる也◆放下　抛棄に同じ◆

の大事をも營み、切に歎く事もある人は、他の事を聞き入れず、人の愁喜をも問はず、問はずとてなどやと恨むる人もなし。されば年もやう〳〵長け病にもまつはれ、況んや世をも遁れたらん人、又是に同じかるべし。人間の儀式、いづれの事か、去り難からぬ、世俗の默し難きに從ひて、是を必ずとせば、願も多く、身も苦しく、心の暇もなく、一世は雜事の小節に障へられて空しく暮れなん。日暮れ途遠し、吾生既に蹉跎たり、諸緣を放下すべき時なり信をも守らじ、禮義をも思はじ、この心を得ざらん人は、物狂ひともいへ、現

この心を得ざらん人　遁世の覺悟をして居ない人◆現なし　本心なしの意也

なし、情なしとも思へ、譏るとも苦しまじ、譽むるとも聞き入れじ。

（講譯）　明日は遠隔の國へ參らうと云ふ人に對してジッと落着いてゐせればならぬやうな用事を云ひかけるものはあるまい又何か突然起つたる大切なる事をなすとか若しくは何かいたくなげくやうなる事のあつたるところの人は外の事には耳も貸さず他人の愁ひや喜びなどもそしらぬ顏で過ごして仕舞ふものであるけれどもこれに對して何故に見舞はないかと恨むやうなる人はなからうこれと同じ事であるから年老ひ身も弱くまして世を遁れたるやうなる人が世間なみの儀式を一々心にかけて居りたるならば一として已むを得ぬものはないのであるされば世の中の事が只だまつて居られないからと云つて一々それにかゝつて居つたならば自から願ひも多く身も苦しく心のうちはいつもなにやかやに追ひまくられジッと落着

【第百十三段】
◆色めきたる方　色慾に關した事◆如何はせん　致方ないの意◆言にうち出でゝ　言語に現はして◆男女の事　性慾の事也◆興あらんと　興あらしめんとの意、即ち人を面白がらいて居るべき暇もないことである一生は遂につまらぬ世間の雜事に妨げられて空しく暮れて仕舞ふのであらう古語に所謂る日暮れ道遠し我が生既に蹉跎たりであるもうこんなになつては萬事をうちやつて仕舞はねばならぬ世俗の信とか禮儀とかそんな者はどうでもよいこの心がわからぬ人は狂人とも云へ本心喪失の人とも云へ無情とも云へ謗りやうが譽めやうがそんなことはどうでもよいよ

【第百十三段】　四十にも餘りぬる人の色めきたる方、自から忍びてあらんは如何はせん。言にうち出でゝ、男女の事、人の上をも云ひ戯るゝこそ、似げなく見苦しけれ。大方聞きにくゝ見苦しき事、老人の若き人に交はりて、興あらんと物いひ居たる。數ならぬ身にて世の覺えある人を、隔てなき樣にいひたる。貧しき所に

そうと◆數ならぬ身　つまらぬ賤しい身分◆まらめきたる　はでやかに振舞たるの意也

【第百十四段】
◆今出川のおほい殿　西園寺實兼公の三男菊

酒宴好み、客人に饗應せんときらめきたる。

（講譯）　四十も越したるやうなるものが若いところのものと同じやうに人前をも憚らず男女の情事やこれに關係する人の噂を云つて居るのはまことに見苦しいものである勿論それとて人間のことであるから木石のやうになつて仕舞へと云ふのではない只自分の心のうちだけでこらへて居るのはこの限りではない「一体聞きにくゝまた見苦しいのは年をとつたところのものが若いものゝ中にまじはつて面白さうに巫山戯て居ること卑しいところのものが己れの身分の程を忘れて高位高官の人をいかにも親しいやうに云ふこと、それから貧乏人の家で客を好んでいかにも華美なるもてなし振りすることなどである

【第百十四段】　今出川のおほい殿、嵯峨へおはしけるに、有栖川のわたりに水の流れたる所にて、齋王丸御

亭衆季公◆嵯峨　京都西郊の地名◆有栖川　山城國葛野郡にあり、太秦より法輪に行く道にある小川◆齋王丸　牛の御者の名、丸の字を附くるは牛飼の慣例也◆足掻の水　牛の水中に入りたる時、足にて水を前へかくを云ふ◆爲則　隨身の名也◆童　牛飼は年とるも丸額にて髪を長くして童の如く結べり、故老若を問はず牛童と云ふ◆太秦殿　坊門内大臣藤原信清公◆男　召使

牛を追ひたりければ、足掻の水前板までさゝとかゝりけるを、爲則御車の後に候ひけるが、希有の童かな、かゝる所にて御牛をば追ふものかといひたりければ、おほい殿御氣色悪しくなりて、己れ車やらんこと、齋王丸に勝りて得知らじ、希有の男なりとて、御車に頭を打ちあてられにけり。この高名の齋王丸は、太秦殿の男、料の御牛飼ぞかし。この太秦殿に侍りける女房の名ども、一人は膝幸、一人は胞腹、一人は乙牛と付けられけり。

（講譯）　今出川の大殿が嵯峨にお出になつたことがあつたが有栖川在邊の水の流れたる所で牛飼の齋王丸が御牛を追ふた

の男也◆女房の名ども　信清公牛を切愛せらるゝが故に、女房の名を悉く牛に因みて附けられたる也

【第百十五段】◆宿河原　攝津國にある地名◆梵論々々　虚無僧の事◆九品の念佛　九品淨土に生れん爲の念佛といふ意◆恨み申さはや　仇討をした

から牛が足で前へかいたる水が御車の前板までザッとかゝつたのを御家來の爲則が御車の後に乘つて居て『けゝからん牛飼ひだこんな所で御牛を追ふ奴があるものか』と言ふと大殿は御機嫌悪くなつて『お前は車をやる術を齋王丸よりも餘計に知るまいけゝからん男だ』と云つて御車に爲則の頭をうちつけて叱られた此の牛飼上手だと名をとつた齋王丸は太秦殿の召使の男であつてその御乘用の御牛飼であるのである、この太秦殿に居つた女中の名を一人は膝幸、一人は狩槌、一人は胞腹、一人は乙牛と命ぜられた

【第百十五段】　宿河原といふ所にて、梵論々々多く集りて、九品の念佛を申しけるに、外より入り來るぼろ〳〵の、若し此の御中にいろをし坊と申す梵論やおはしますと尋ねければ、其の中より、いろをし此所に候

いの意◆ゆゝしくもよくも仏の意◆道場佛道修行の場所を云ふ◆脇座氏達　側に居る人々だちの意◆數多の煩ひ數多の人々の迷惑◆我執深く　我相執着深くの意、師匠の仇敵を何時迄も執念深く忘れざるを云ふ◆放逸無慙　氣儘勝手な恥ち知らずの意◆少しも泥まざる方の　生に戀々たることなく死を見る歸するが如き點が潔く見ゆる也◆潔く「サッパリ」の意

ふ、かく宣ふは誰ぞと答ふれば、しら梵字と申す者なり、己れが師何がしと申し、人、東國にていろをしと申す梵論に殺されけりと承りしかば、その人に逢ひ奉りて、恨み申さばやと思ひて尋ね申すなりといふ。いろをし、ゆゝしくも尋ねおはしたり、さる事侍りき、此所にて對面し奉らば、道場を汚し侍るべし。前の河原へ參りあはん、あなかしこ、脇座氏達何方をも助太刀給ふな、數多の煩ひにならば、佛事の妨に侍るべしといひ定めて、二人河原へ出でゐて、心行くばかりに貫きあひて、共に死にけり。ぼろ〳〵といふもの昔

は無りけるにや、近き世に、梵論字、梵字、漢字などいひける者、其の始めなりけるとかや。世を捨てたるに似て、我執深く、佛道を願ふに似て、鬪諍を事とす放逸無慙の有樣なれども、死を輕くして、少しも泥まざる方の潔く覺えて、人の語りし儘に書きつけ侍るなり。

（講譯）　宿河原と云ふ所で乞食の坊主が澤山集まつて九品の念佛を申して居る所へ丁度外から又一人の乞食坊主が入つて來て『ちよつとお尋をいたしまするがこの中にイロヂシ坊と云ふ方は居られませんか』と云ふ、するとその中より『イロヂシならばここに居るがさう仰つしやるはどなたであるか』と云ふ『私はシラボウシと云ふものですが自分の師匠の何々と申すものが東國でイロヂシ

と云ふ人に殺されたと云ふことですからそのイロチシと云ふ人に逢ふて一つ恨みが晴らしたいと思つてお尋れをいたしたる次第です』『よくまあお出でなすつたなるほどそんなことも御座いましたがこゝでお逢ひ申しては道場を汚しますから前の河原でお逢ひ申しませう、ちやが皆様決してどちらへも御加勢のなきやう大勢の邪魔になつては佛事の妨げにもなりませうから』かう云つて二人は河原へ出で思ふ存分に刺し合つて死んでしまつた、このぼう〳〵と云ふものは昔はなかつたのであらう、近世「梵論子」「梵字」「漢字」など、云つたものがそのはじめであると云ふことである世を捨てたるやうで而も執念深く佛道を願ふやうで而も好んで喧嘩又傷をするかういふ仕方のない連中だが死と云ふことを何とも思はず少しも未練がましくないのがいかにも潔く思はれるから人から聞いたまゝを書いたのである

〔第百十六段〕 寺院の號、さらぬ萬の物にも名を付くる事、昔の人は少しも求めず、只ありの儘に安く付けるなり。此頃は深く案じ、才覺を顯さんとしたるやうに聞ゆる、いとむづかし。人の名も、目馴れぬ文字をつかはんとする、益なき事なり。何事も珍しき事を求め、異說を好むは、淺才の人の必ずある事なりとぞ

（講譯）寺の名前その外すべてのものに名をつけることも昔しの人は少しもむづかしい理屈を穿鑿せず唯有りの儘に安々とつけたるものである此の頃は深く考え過ぎてどうかして才覺を見せやうとするやうに聞こえるのは誠にうるさくていやである人の名も見馴れぬ文字をつけやうとするのは無益なることである兎角何事でも珍らしいことを捜し求め變つた說を好むのは智惠の淺い人に必ずある事であるさうだ

◆さらぬ萬の物　さらぬは然らざる也、寺號の號以外の物を云ふ◆

才覺　智慧のこと

【第百十七段】

◆高くやんごとなき人　高位高官の人、之と交れば必ず謡ふ心を生ずれば也◆若き人　老人の若き人に交るは見苦しければ也◆病なく身つよき人　過食行歩其人々はつきあひ難ければ也◆物くるゝ友　困窮の場合に扶助してくれる友也

【第百十八段】

◆鬢そゝけず　此事本草に見えず、諺に云ひ傳へしなる可し、そゝげずは俗にソゝゲルと云ふに同じくバラツクこと也◆膠　魚を膠にれるを鰾と云ふ◆御前にても切らるゝ物　天子の御前にて鯉を切る時ば音樂に合はせて切る由◆御湯殿　こゝは浴室にあらず、料理室を云ふ◆中宮　天皇の嫡妻を云ふ、こゝでは後深草天皇の中宮、東

【第百十七段】　友とするに悪きもの七つあり。一には高くやんごとなき人。二には若き人。三には病なく身強き人。四には酒を好む人。五には武く勇める人。六には虚言する人。七には慾深き人。善き友三つあり、一には物くるゝ友。二には醫師。三には智慧ある友。

（講譯）　友達にするのに悪いところのものが七つあるのである一つには高貴なるところの人、二つには年の若いところの人三つには病氣のない身体の丈夫なるところの人、四つには酒のすきな人、五つには勇猛なる軍人、六つにはうそをつく人、七つには慾心の深いところの人、又善い友達が三つあるのである、一つには物をくれるところの人、二つには醫者、三つには智慧のある友達

【第百十八段】　鯉の羹食ひたる日は、鬢そゝけずと

なん。膠にもつくるものなれば、粘りたる物にこそ。鯉ばかりこそ、御前にても切らるゝものなれば、やんごとなき魚なり。鳥には雉双無きものなり。雉、松茸などは、御湯殿の上にかゝりたるも苦しからず、その外は心憂き事なり。中宮の御方の、御湯殿の上の黒み棚に鴈の見えつるを、北山入道殿の御覽じて、歸らせ給ひて、頓て御文にて、斯樣の物さながらその姿にて、御棚にゐて候ひし事、見ならはず樣惡しき事なりはかゝしき人のさふらはぬ故にこそ、など申されたりけり。

二條院と申し、常磐井相國實氏公の御女也◆北山入道　中宮の父常磐井實氏公を云ふ◆黒み棚　料理室の棚の烟に黒くふすぶりたる也◆はか〴〵しき人　確かに故實など知れる人を云ふ

【第百十九段】

（講譯）　鯉の吸物を食つた日は髮の毛がほつれないと云ふが鯉は膠を拵へるところの材料にもなるものであるからればりけのつよいものと見えるさて鯉は天子の御前にでも切られるものであるから魚の中にても最も貴いものである次に鳥では雉が一番尊い雉や松茸は御料理部屋にかゝつて居ても差支へがないけれども外のものではよくないのであるこれについてこんな話がある中宮の御膳の御料理部屋のくろみ棚に鴈が置いてあつたのを中宮の父君なる北山入道殿が御覽になつてそのときは默つてお歸りになつたが歸ると早速御手紙が參つて『かう云ふものが姿のまゝ御棚の上にあつたことはかつて見たることも御座いません見つともないぢやありませんか物のわかつたしつかりとしたるところの人間が居ないからついこんなことにもなるのでせう』と云はれた

【第百十九段】　鎌倉の海に鰹といふ魚は、かの境には

◆鎌倉の海　神奈川縣鎌倉の事也◆はか〴〵しき人　こゝでは際立つた身分のある人の意也◆下部　下等な者也◆斯樣の物を云々　鰹の如きものも末世になれば上流社會の食用に供せらるゝに至ると云ふ意

双無きものにて、此頃もてなす物なり　それも鎌倉の年寄の申し侍りしは、この魚己等若かりし世迄は、はか〴〵しき人の前へ出づる事侍らざりき。頭は下部も食はず、切りて捨て侍りしものなりと申しき。かやうの物も世の末になれば、上ざま迄も入りたつ業にこそ侍れ。

（講譯）　鎌倉の海に産するところの鰹と云ふ魚はあの邊では此の上もないものであると云ふので近頃では京でも大にこれを珍重する所がこの名高い魚も鎌倉の年よりの話によると彼れ等の若い時分にはまだ立派なる人の前へは御馳走としてだすことはなかつたのである且つ頭の如きは召使ひのものでさへ食はずして切つて捨てたるものだと云ふこんなに卑しめられたる魚でも世が末となる

【第百二十段】

◆唐の物　外國の物産也、茲では支那の物産也、元來「カラ」は外國の異稱にして元は朝鮮加羅國に起り後には何れの國も外國は「カラ」を云ふに至る、王朝時代最多く支那唐國と交通あり故に唐を「カラ」と云ふに至る後には唐國に限らず外國を「カラ」と稱するに至る◆唐船のたやすから〻道　唐との交通は航海上

と上つ方の御膳にまで上るやうなるものだよ

〔第百二十段〕　唐の物は、薬の外は無くとも事缺くまじ。書どもは此國の多く弘まりぬれば書きも寫してん唐船のたやすからぬ道に、無用の物共のみ取り積みて所狭くわたし持て來るいと愚なり。遠きものを寶とせずとも、又得難き寶を尊まずとも、と文にも侍るとか

（講釋）　近來はだん〳〵支那のものを珍重するやうになつたが薬は兎に角そのほかのものはなくても別に不自由なることはあるまい書物の如きも今日ではもう我が國に廣まつて居るからこれを書き寫しても一通り用は足るのであらう然るにわざ〳〵危險なる航路を經て遠い支那から益にもたゝぬ品物ばかりをギッシリ積み

風波の難多がりしを以つて也◆遠き物を寶とせずとも　尚書旅獒篇に「不レ寶二遠物一、則遠人格」とあり◆得難き寶を貴ますとも　孝子經に「不レ貴二難レ得之貨一使レ民不レ爲レ盜」とあり

【第百二十一段】

◆養ひ飼ふ物　周禮に六畜として牛馬羊犬豕鷄をあげたり◆繋ぎ苦しむること云々　事林廣記に「牛資二之以レ耕、馬資二之以レ戰、尤有國有家者之所レ不レ可レ緩込んで持つて來たるとはさても馬鹿の骨頂である古人の書物にも、『何もわざ〳〵遠方のものを寶とするにも及ばない』と又『手に入りにくい寶は珍重するにも足らぬと書いてあるさうである』

〔第百二十一段〕　養ひ飼ふ物には馬牛、繋ぎ苦しむることこそ痛ましけれど、無くて叶はぬものなれば如何はせん。犬は守り防ぐ務め、人にも勝りたれば必ずあるべし。されど家毎にあるものなれば、殊更に求め飼はずともありなん。その外の鳥獣、凡て用なき物なり。走る獣は檻に籠め、鎖をさゝれ、飛ぶ鳥は翼を切り、籠に入れられて、雲を戀ひ野山を思ふ憂へ止む時なし。その思ひ我身にあたりて忍び難くは、心あらん人これ

也」とあり◆犬は守り防ぐ　東坡曰はく「畜ㇾ犬以防ㇾ姦不ㇾ可ㇾ以ㇾ無ㇾ姦而蓄ニ不ㇾ吠之犬一」とあり◆檻　鳥獣を入れる器具也◆雲を懸ひ野山を思ふ　東坡が詩の三に「鳥囚不ㇾ忘ㇾ飛、馬繫嘗念ㇾ馳」とあり◆生を苦しめて云々　夏王桀無道にして、美人妹喜を愛して瑤臺を作りて牛飯するを見て獣び、關龍逢を殺せり。殷王紂は妲己を愛して天下の財を徒消し炮烙の刑を加へて忠臣を戮し孕女の胎を割いて喜ぶ、共に非道の王也◆王子猷　晋人王羲之の子にして一に王徽子と云ふ、常に愛を愛し植ゑて名けて此君と云ふ其竹間の煙に鳥の自から遊接するを見て愛したりと云ふ◆珍しき鳥怪しき獣　尚書に曰く「珍禽奇獣國ニ育ハズ」とあり

を樂しまんや。生を苦しめて目を喜ばしむるは、桀紂が心なり。王子猷が鳥を愛せし、林に樂しぶを見て逍遙の友としき。捕へ苦めたるにあらず。凡そ珍しき鳥怪しき獣、國に養はずとこそ文にも侍るなれ。

（講譯）　家に畜ふところの畜生の中にて最も一般的に普通であるのは牛馬であるこれをつないで自由を與へず苦しめるのは氣の毒なることであるがどうしてもなくてはならぬものであるから仕方がないのである同じく家に飼はれるところのものでは犬は人にも勝さつて家を守り盜賊を防ぐ功があるからこれもぜひなければならぬしかしどこにもあるものだからわざ〳〵求めて飼つておく程のものでもない兎に角以上三種は吾人の生活にも直接關係するものだがその他のものに至つては鳥も獣も凡べて無用なるものであるからこれを飼ふのは畢竟無益の殺生をなすものに過ぎぬのである走る

【第百二十二段】

◆才能　才智藝能◆文　四書六經◆手書くこと

獣や飛ぶ鳥を强いて捕つて小さい檻の中に入れたり鎖でつないだり翼をきつて飛び立ぬやうにしたり籠に入れたりして置けばそれ等のものは皆元の住家の野山や谷を戀しがつて絶えず悲めることであらうもしその思ひを我が身に引きくらべて見て忍び難ひと感するならば苟くも情を知る人間は罪もない鳥獣を苦しめて樂しむやうなることはあるまいもの生あるものを苦しめて面白がるのは殘忍至極で丁度彼の古への樂紂に等しい心である晋の國の王子猷は非常に鳥を愛したるさうだがしかしこれは林の中に樂しみ遊べるさまを見て自分の遊びの友となしたるまでにして捕つて籠に入れたりなどして苦しめたるものではなかつた『珍奇な鳥獣は國に養はず』とある古い書物にも載せられ居るのであるぢや

【第百二十二段】　人の才能は、文明らかにして聖の教を知れるを第一とす。次には手書くこと、旨とする事

と習字也◆旨とする事　専門に學修する事也◆忠孝のつとめも　小學に曰はく「伊川先生曰、病臥二於牀一委二之庸醫一、比二之不慈不孝一事レ親者亦不レ可レ不レ知レ醫」と◆六藝　禮、樂、射、御、書、數◆食は人の天　帝堯務農篇に「夫食爲二人天一農爲二政本一、倉廩實則知二禮節一衣食乏則忘二廉恥一」とあり、食は人命を繫ぐものなれば也◆多能は君子の恥づる所　何でも出來るのは君子の恥づる所の意也輪語子罕篇に「吾少也賤、故多二能鄙事一君子多乎哉不レ多也」とあり◆絲竹　音樂の事也、絲は琴の如く糸によつて彈する樂器、竹は主として笛を云ふ◆君臣之を重くす　古來君臣禮樂を以て治國の要となす◆愚　おろそか◆幽玄の道　幽微玄妙の道なりとの義也

は無くともこれを習ふべし。學問に便りあらん爲なり。次に醫術を習ふべし。身を養ひ人を助け、忠孝のつとめも醫に非ずばあるべからず。次に弓射、馬に乘ること六藝に出だせり。必ずこれを窺ふべし。文武醫の道誠に缺けてはあるべからず。これを學ばんをば、徒なる人と云ふべからず。次に食は人の天なり、よく味を調へ知れる人、大なる德とすべし。次に細工萬の要多し。この外の事ども、多能は君子の恥づる所なり。詩歌に巧に絲竹に妙なるは幽玄の道君臣これを重くすといへども、今の世には是を持ちて世を治むる事、漸く

愚なるに似たり。金は勝れたれども、鐵の益多きに加かざるが如し。

（講譯）　我々人間の才智藝能と云ふものは六經四書の意味を明かにして聖人の教へを知れるのを以て第一番とする次によく文字を書くことでありこれは專門にやらないまでもつとめて習ふのがよい學問の助けにするためである次に醫者の術を習ふがよい自分の身の衛生、人助けのためになるばかりでなくして君に忠親に孝するのも醫術を知られば出來ないところのことがある次に弓を射ること馬に乘ることこれは周禮の六藝の中にも書き出してあることであるが必ずこれ等の道を知つて置くがよい文武醫の三つの道は人として實際缺けてはならぬものであるこれを學ぶのをばムダな事をする人であるとは云へない次に食物は人の天であるよく料理を知つて居る人は大きなる德があるものとすべきものである次に小刀の細工であるこれは萬事に必要が澤山である此の外にもいろ〳〵なる事は

あるが何でも出來ぬと云ふことは君子の恥とする所である詩や歌を上手に作り音樂の天才のあると云ふことは幽徴玄妙の道であつて昔の君も臣も重んじたるが今の世には詩歌や音樂を以て世の中を治めることは段々おろそかになつたやうである黄金は非常に貴いところのものであるが饑の實益の澤山なるには及びつかないやうなるものであらう

〔第百二十三段〕 無益の事をなして時を移すを、愚なる人とも、僻事する人ともいふべし。國の爲君の爲めに、止む事を得ずして爲すべき事多し。其の餘りに暇いくばくならず思ふべし。人の身に止む事を得ずして營む所、第一に食物、第二に着物、第三に居所なり。人間の大事この三つには過ぎず。飢ゑず寒からず、風雨に犯されずして、靜かに過すを樂とす。但し人皆病あり、病にをかされぬればその愁忍び難し。醫療を忘るべからず。薬を加へて、四つの事求め得ざるを貧しとす。この四つ缺けざるを富めりとす。この四つの外を求め營むを奢りとす。四つの事儉約ならば、誰の人か足らずとせん。

（講譯） つまらぬむだな事をして時を移すのを馬鹿なる人とも又ひが事をする人とも云ふべきであらうどんな人でも國のため君のためには是非ともせなければならないことが澤山あるのであるその殘りの時間がどれ程もないのであることを考えて見よ又我々人間の身の上のことについて止むことを得ずする事は第一には食物第二には着物のこと第三には住む所のことである人間の大事はこ

〔第百二十三段〕

◆儉約　入費を少くして用に事缺かざるをいふ、驕奢の反對也◆四つの事　食、衣、居處、薬の四者を云ふ

の三つのものに過ぎないだから食物にかつえず寒くなく雨風にもうたれない程度で滿足して閑に日を過ごすのを樂とするのである但し人には皆病氣と云ふものがある病氣にかゝれば其の惱ひ悲みは辛抱することが出來ない故に醫療の必要であることも忘れてはならないぢやそこで藥を入れて此のまへに云つた衣食住の三つのものに加へこの四つのことを求めることが出來ぬものを貧しとしこの四つのものに不自由のないのを富めりとし此の四つのものより外のものを求めたりしたりするのを驕りとする四つの事が儉約であるならば誰か事足らない生活だと云はうや

〔第百二十四段〕 是法法師は、淨土宗に恥ぢすといへども、學匠をたてず、たゞ明暮念佛して安らかに世を過す有樣、いとあらまほし。

（講譯）是法法師は淨土一宗の學に於いて誰にも恥ぢぬと云ふ程の大學者であるが少しも學ぶことはなく旦暮たゞもう念佛はかりをして氣樂に氣樂に暮らして世を過して居るあゝ云ふ風にありたいものだ

〔第百二十五段〕 人に後れて、四十九日の佛事に或る聖を請じ侍りしに、說法いみじくして、皆人涙を流しけり。導師歸りて後、聽聞の人ども、いつよりも殊に今日は尊く覺え侍りつると、感じ合へりし返事に、或る者の曰く、何とも候へ、あれ程唐の狗に似候ひなん上は、と言ひたりしに、あはれも醒めてをかしかりけり。さる導師の譽めやうやはあるべき。又人に酒勸むると

〔第百二十四段〕

◆是法法師　歌人にして念阿の弟子也新千載新後拾遺等に其作歌あり◆淨土宗に恥ぢず　淨土一宗の學問に恥ずる事なき學者也の意◆學匠をたてず　學を以て人の師匠とならざる也◆あらまほし　誰人も然うありたいものであるの意

〔第百二十五段〕

◆人に後れて　人に死に後れての意◆四十九日の佛事　死んだ人の四十九日の佛事也◆導師　釋氏要覽に「十住斷結經曰號ニ導師一者令ニ衆生ヲシテ類ニ示セシム其正道一ヲ故華首經ニ云ハク能

為レ人説ニ無生死道一故名二導師一とあり◆唐の狗　導師の面の犬に似たるを云ふ◆譬めやうやはあるべき　そんな譬め樣があらうやありはしない

て、己れ先づ喫べて人に強ひ奉らんとするは、劒にて人を斬らんとするに似たる事なり。二方に及つきたるものなれば、持上ぐる時先づ我頭を斬る故に、人をば得切らぬなり。己れ先づ醉ひて臥しなば、人はよも召さじと申しき。劒にて斬り試みたりけるにや、いとをかしかりき。

（講譯）　或人が死んだので四十九日の佛事に當り或僧を呼んたるものは皆有難さに涙をこぼしたそしてその僧の歸つた後で聽いて居た連中が噂し合つて『今日はどうも特に尊いやうに感じた』などゝ云つて居るとその中の一人が云ふには『まあ何にしてもあれほど唐の狗に似て居る以上は有難いことです』と云つた、あまり突飛なほめ方と云ふものはあつたものぢやない又こんなことを云つた人に酒をすゝめるのに自分が先づ飲んでおいてそれから人に强ゆるのは丁度劒で人を斬らうとするやうなものだ劒は二方に及がついて居る故にふりあげるときに先づ自分の頭を斬るから人は切れない自分が先きに醉ふて仕舞へば肝心なる客は飲む事はできない筈だ』とこれも隨分突飛なる例へである一体自分が劒で斬つた經驗でもあるのであらうか

【第百二十六段】

◆博奕　賭博の事也

（第百二十六段）　博奕の負極まりて、殘りなくうち入れんとせんに、あひ手は打つべからず。立ちかへり續けて勝つべき時の至れると知るべし。その時を知るをよき博奕といふなりと、或者申しき。

（講譯）　ばくちの相手がもうすつかり負けてしまつて最後の所謂る乾坤一擲の勝負をしやうと云ふやうなる場合になつて

は此方は決して打つてはならぬこのとき相手は既に勢なもりかへして逆に連戦連勝をなすときが来て居るのであるこんな場合をよく知りわけるのをよいばくちうちと云ふのであると或人が云つた

〔第百二十七段〕　改めて益なきことは改めぬをよしとするなり。

（講釋）　改めたからとてそのために利益なることでないところのことは改めない方がよいとするのである

〔第百二十八段〕　雅房大納言は、才賢く善き人にて、大将にもなさばやと思しける頃、院の近習なる人、只今あさましき事を見侍りつと申されければ、何事ぞ、と問はせ給ひけるに、雅房卿鷹に飼はんとて、生きたる犬の足を切り侍りつるを、中垣の穴より見侍りつつ、と申されけるに、疎ましく憎く思召して、日頃の御氣色も違ひ、昇進もし給はざりけり。さばかりの人、鷹を持たれたりけるは思はずなれど、犬の足は跡なき事なり。虚言は不便なれども、かゝる事を聞かせ給ひて惡ませ給ひける、君の御心はいと尊き事なり。大方生ける物を殺し、痛め闘はしめて遊び樂まん人は、畜生殘害の類ひなり。萬の鳥獣小き蟲迄も、心を止めて有様を見るに、子を思ひ親を懐しくし、夫婦を伴ひ、妬み怒り、慾多く、身を愛し、命を惜しめる事、偏に

【第百二十八段】
◆雅房大納言　正二位大納言近衛大将源雅房の事太政大臣實定の子
◆善き人　品行善き人
◆院　後宇多院の事ならん◆大将　近衛大将なり◆御氣色　御機嫌
◆虚言は不便なれども　虚言を云はれた雅房卿は氣の毒であるが◆痛め闘はしめ　闘鶏闘狗などの遊を云ふ◆畜生殘害　鳥獣虫魚の互にそこないくひあふ事を云ふ◆慈悲　法界次第に曰く「能ク他ノ樂ヲ與フルノ心、之ヲ名ケテ慈　爲ス、能ク他

ノ苦ヲ抜クノ心、之ヲ名ケテ悲ト爲ス」と他をいつくしむ心也

愚痴なる故に、人よりも勝りて甚し。彼に苦しみを與へ、命を奪はん事、いかでか痛ましからざらん。凡て一切の有情を見て、慈悲の心無からんは人倫にあらず。

（講譯） 雅房大納言は才智もすぐれて品行も善いところの人であるので近衛大將にもしてやりたいものだと思召しになつて居たをりから院のおそばつきの人が只今呆れたることを見ましたと申されたるのでそれは何の事であるのかとお尋れになると雅房卿が鷹の餌にしやうとて生きて居る犬の足を斬つて居る所を中垣の穴から見ましたと申されたるのでこはいま〳〵しく憎い奴であると思召して常によかつた御機嫌も變り官位遷級の御沙汰もなかつたそれ程に才智のすぐれたるところの善人が無益な殺を持つて居られるのは案の外のことであるが犬の足を切つたと云ふのは跡方もないことである嘘を言はれたる雅房卿は氣の毒であるがこんなことをお聞きになつて慈悲のないのを御恨みになつたところの君の御心はまことにありがたく貴いことである全体生物を殺したり苦しい目に逢はせたり喧嘩をなさせたりなどして遊び樂める人は畜生が互に喰ひ合ふのと同じやうなる所業をなすものであるすべての鳥や獸。小さい蟲までも氣をつけてその狀態を觀察するときは子を思ひ親を慕ひ夫婦つれだち怒つたり慾心が澤山で自分の身体を大切にして命を惜んで居れることは唯もう愚痴なる畜類だけに人間より一層はげしいのであるこのやうなるものを苦しませたり命をとつたりするのは誠に可愛想ではあるまいかすべて一切の有情の生き物を見て慈悲の心のないのは人間の中間ではない

【第百二十九段】

◆顔回　孔子の門人、顔淵と云ひ世に亞聖と稱す◆人に勞を施さじ

【第百二十九段】 顔回は　志　人に勞を施さじとなり。

凡て人を苦め物を虐ぐること、賤しき民の志をも奪ふべからず。又幼き子を賺し怖し、言ひ辱しめて興ずる

論語公冶長に「子曰壹各言爾志、顏淵曰願無伐善無施勞」とあり◆賤しき民の志なも　論語に「匹夫不可奪志」とあり◆おとなしき人　大人しきにて大人の心を云　◆虛妄なれども　喜怒哀樂皆むなしき妄念也、凡世間萬の事根本を尋ぬる時は皆無なれどもその實有とするが世の中の人の情なりと也◆

事あり、おとなしき人は、實ならねば事にもあらず思へど、幼き心には、身に沁みて恐ろしく恥しくあさましき思ひ、誠に切なるべし。これを惱して興ずる事、慈悲の心に非ず。おとなしき人の、喜び怒り哀び樂ぶも、皆虛妄なれども、誰か實有の相に着せざる。身を破るよりも心を傷しむるは、人を害ふ事猶甚し。病を受くる事も多くは心より受く、外より來る病は少し藥を飲みて汗を求むるには、効能なき事あれども、一旦恥ぢ恐るゝ事あれ、必らず汗を流すは心の仕業なりといふ事を知るべし。凌雲の額を書きて、白頭の人と

藥を飲みて汗を求る　嵇康の養生論に「夫服藥求汗、或有弗獲而愧情一集渙然流離云々」とあり◆凌雲の額　三國史に「魏明帝立凌雲觀、誤先針榜乃以籠盛韋誕、轆轤引上書之去地二十五丈、既下鬚髮皓然、還語子弟直絕此法」とあり

なりし例なきにあらず。

（講譯）　顏回と云ふ人は他人に苦勞なことをさせまいと思ふと言つたすべて人を苦めたり物をムゴク扱つかたり下級の人民でもそのせうと思ふ所のことをさせなかつたりしてはいけない又小さい子供をだましたりおどしたり恥づかしがらせたりして面白がる所のものがある大人は本當のことではないから何んでもなく思つて居るが子供心には身にしみて怖ろしく恥づかしく淺ましく思へることが誠に深いであらうこんな幼子の心を惱まして面白がるのは慈悲の心ではないおとなの人の喜んだり怒つたり悲んだり樂んだりするのも皆妄念であるが誰も現實の形に拘泥して一向に思ひ込まぬものはない身体を傷けるよりも心を苦める方が人を害することが一層ひどひものである病氣を受けるのも大概は心から受けるものぢや外より來たるところの病氣は少ない藥を飲んで汗を出さうとするときには効能のないときもあるが一旦恥づかしいと思ふか怖ろしいと思

へることがあつたがさいごきつと汗を流すのは心の所業であると云ふことを知るがよろしい凌雲觀の額を書いて暫らくの間に頭が白髪になつたところの人の例もある

〔第百三十段〕 物に爭はず、己れを枉げて人に從ひ、我が身を後にして人を先にするには如かず。萬の遊びにも勝負を好む人は、勝ちて興あらん爲なり。己れが藝の勝りたる事を喜ぶ。されば負けて興なく覺ゆべき事、又知られたり。我負けて人を歡ばしめんと思はゞ更に遊びの興なかるべし。人に本意なく思はせて、我が心を慰まん事德に背けり。睦じき中に戲るゝも、人を詐り欺きて、おのれが智の勝りたる事を興とす、こ

◆物に爭はず　論語に「君子無レ所レ爭」とあり　◆我が身を後にして　論語に「仁者己欲レ立而立レ人己欲レ達而達レ人」と老子云はく「欲レ先レ民必以レ身後レ之と」と　◆又知られたり　又知れきつた事である　◆本意なく思はせて　不本意の思をさせて　◆始め興宴より起りて云々　親しき友でも酒宴などより事起りて遂に仲惡しくなるを云ふ、魏其侯武安侯は共に漢帝の外戚たりしが、酒宴の席上仲惡しくなり魏其侯殺されたる事あり　◆大なる職をも云々　高位高官を棄て性慾を棄つるは皆學問の力也の意

れ又禮にあらず。されば始め興宴より起りて、長き恨みを結ぶ類多し。これ皆爭を好む失なり。人に勝らん事を思はゞ、只學問して、其の智を人に勝らんと思ふべし。道を學ぶとならば、善に誇らず、ともがらに爭ふべからずといふ事を知るべき故なり。大なる職をも辭し、利をも捨つるは、只學問の力なり。

（講譯）　何事でも他人と衝突することを避けて爭ひをなすことをせず意見の違ふ場合は自分の方なる所信を枉げて人の云ふところに從ひ萬事自分と云ふことを第二位にして人を先きにするがよろしい種々の遊戲などに於いても碁、將棋のやうな勝負好きな人はつまり勝つて面白みを得やうとするのである一体自分の方の技量が人よりすぐれて居るのを誇りとするのは勝てば面白いためにや

るのであるからその反對でまけたる場合の不愉快なるべきは亦勿論であらうがもし自分の方が負けて相手の方を喜ばしめやうと思つたならば遊戯の愉快はあるものではあるまいと云つて又人に失望させておいて自分だけ面白がるのは德にそむひたる所の行爲であらう親しい間柄の中にてじやうだんを云つて居つても矢張りその中で人をだまして自分の智惠の勝つて居るのを喜ぶやうなものもあるがこれも同じく禮儀の道に背いたところの行ひである兎に角かくしては德義にはづれたることであるから最初は酒宴などの席のちよつとしたるじやうだんなどから事が起つて遂に長い恨みを結ぶやうなことになるのが隨分あるものであるこれらは皆爭ひを好むからのあやまちであらう人にまさるやうにと思ふならば何にもそんなつよらぬことでまさらないでも學問をして智力をみがきそれに於いてまさるやうにせうと思ふのがよい若し道を學ぶならば善にほこらず惡に爭ふはならぬと云ふこともわかるからだ場合によると高位高官も辭して利益をも捨て亭も未練がましくないのは唯學問の力ぢや

【第百三十一段】

◆貧しき者は云々　曲禮に「貧者不レ以二貨財一爲レ禮、老者不レ以二筋力一爲レ禮」とあり◆許さゞらんは　貧者に財を出させ老者に奔走させる事也

〔第百三十一段〕貧しき者は財を以て禮とし、老いたる者は力を以て禮とす。己が分を知りて及ばざる時は速に止むを智といふべし。許さゞらんは人の誤りなり。分を知らずして強ひて勵むは、己が誤なり。貧しくて分を知らざれば盜み、力衰へて分を知らざれば病を受く。

（講譯）　貧乏なるものは人のために金を澤山に使へることを見ていに出すのを以て禮儀に叶ふものだとするのであるが自分の金力や體力の分限のどれ程と云ふ事を量り知つてその力の及ばないときには早くやめるのが智慧あるものゝやりやうと云ふべきであらう若し人が止めることを許してくれなかつたならばそれはその人のあやま

りである分も知らずして無理にまけ惜しみをしてやるのは自分のあやまりぢや貧乏で分限の度を知らなければ盗賊になり年が寄つて老衰して力の減つて居るのに分限の度を知らぬと病氣になるものだ

〔第百三十二段〕 鳥羽の作道は、鳥羽殿建てられて後の號にはあらず、昔よりの名なり。元良親王、元日の奏賀の聲甚殊勝にして、大極殿より鳥羽の作道まで聞えける由李部王の記に侍るとかや。

（講譯） 鳥羽の作り道の鳥羽と云ふところの名は鳥羽殿が建築せられそれが造營されてから後につけられたるところの名號ではないのである昔しからあつたところの名ぢや元良親王が元日の慶賀を申上げられたる聲が人よりもよく通つたので大極殿から鳥羽の作り道まで聞えたと李部王の記に書いてあると云ふ事である

は去年國々より奏せし吉祥どもを書集めて今日奏上する也◆李部王の記 部は式部の唐名 醍醐天皇の皇子式部卿重明親王の記錄也

〔第百三十三段〕

◆夜の御殿 天皇の御寢所を云ふ◆東御枕 禮記に云はく「寢時東首」とあり◆陽氣を受くべき故に 論語鄕黨 朱子註に「東首以受二生氣一也」新安陣氏曰く「天地生氣始二於東方一云々」とあり◆白河院は北首に云々 佛法信

〔第百三十三段〕 夜の御殿は東御枕なり。大方東を枕として、陽氣を受くべき故に、孔子も東首し給へり。寢殿のしつらひ、或は南枕常の事なり。北は忌む事なり。又伊勢は南なり。白川院は北首に御寢なりけり。北は忌む事なり。又伊勢は南なり太神宮の御方を、御跡にせさせ給ふ事如何と人申しけり。但し太神宮の遙拜は、巽に向はせ給ふ、南にはあらず。

（講譯） 天子の御寢所は東御枕である大抵は東の方を枕として寢るのだ寢殿のかざりつけは東枕でなくば南枕にするのが普通である所か白河院には北枕に御寢になつた北枕は釋迦涅槃の姿であるから忌み嫌ふ事である又或人は『伊勢は南である太神宮の方に足を向けに

仰の餘り釋迦涅槃の姿に倣ひ給ひ、北首に御寢ありしなる可し、されど普通には忌む事也

◆遙拜　遠方より遙に大神宮を御拜あること

【第百三十四段】

◆高倉院　後白河院第三の皇子、第八十代の天皇也◆法華堂　高倉院崩御の後、山城國愛宕郡清閑寺の法華堂に奉葬ぜり、之れ法華堂也◆三昧僧　法華三昧を行ふ僧にて法華經のみを讀誦して他念なく

なるのはどう云ふものであらうか』などゝ云つた但し天皇が太神宮を遙拜せさせ給へるときに東南の方にお向きに相成る眞南の方に向はれるのでないぢや

〔第百三十四段〕　高倉院の法華堂の三昧僧、何某の律師とかや云ふもの、或時鏡を取りて顏をつく〴〵と見て、我が容の醜くあさましき事を、餘りに心憂く覺えて、鏡さへ疎ましき心地しければ、その後長く鏡を恐れて手にだに取らず、更に人に交ること無し。御堂の勤ばかりにあひて、籠り居たりと聞き傳へしこそ、有難く覺えしが。賢げなる人も、人の上をのみ計りて己れをば知らざるなり。我を知らずして、外を知ると云

勤むるを云ふ◆律師　僧官にて五位に准するもの也◆勤ばかりにあひて　法華堂のお勤の時だけ出合つての意也

◆我を知らずして云々　我定木直からずしては他の物の曲直は圖り難しとの意也◆但し容は鏡に見ゆ云々　以下身の上の非を知ればいかでか律師の如く退かざるとの意を自問自答せる也◆何ぞ茲を念ふ事云々　尚書大禹謨に「

ふ道理あるべからず。いふべし。容醜けれども知らず、藝の拙きをも知らず、年の老いぬるをも知らず、病の胃すをも知らず、死の近き事をも知らず、行ふ道の至らざるをも知らず、身の上の非をも知らねばまして外の謗りを知らず。但し容は鏡に見ゆ。年は數へて知る。我身の事知らぬには云はまし。容を改め、齡を若くせよとにはあらず。拙きを知らば、何ぞ頓て退かざる。老いぬと知らば、何

念ㇾ茲在ㇾ茲」とある詞を用ひたり◆愛樂　世人に愛し好まるゝ意也◆不堪　不堪能の事◆雪の頭　老いて白髪となれるを云ふ◆盛なる人　血氣盛なる人也

ぞ靜に身を安くせざる、行 愚なりと知らば、何ぞ茲を念ふ事茲に在らざる。凡て人に愛樂せられずして、衆に交るは恥なり。容 醜く心おくれにして出で仕へ、無智にして大才に交はり、不堪の藝をもちて堪能の座に列なり。雪の頭を戴きて盛なる人に並び、況や及ばざる事を望み、叶はぬ事を憂へ、來らざる事を待ち、人に恐れ、人に媚ぶるは、人の與ふる恥にあらず。貪る心に引かれて、自ら身を恥かしむるなり。貪る事の止ざるは、命を終ふる大事、今こゝに來れりと、確に知らざればなり。

（講譯）　高倉院の法華堂の三昧僧で何とかの律師といふ者が或時のことであつたが鏡でつく〳〵と自分の顏を見たる所が我れながらあまりに見にくいひどい顏付であるので不愉快にてたまらずそれを見せつけたるところの鏡までがいやになつて來てそれより以後は長らく鏡を恐れて手にさへ觸れず人と交際することもせずして法華堂のおつとめだけをやつて一人籠つて居つたと云ふことであるところが世の中にはとかく人の事ばかりが目につくものが澤山で賢いやうに見えてると薩張りわからない、しかし自分の事がわからなくして人のことがわかると云ふの理屈はない故に先つ自分の事を知れるものがよくても物を知るところの人であるとするのである自分の容貌がみにくくしてもわからず心の愚かであることなども知らず藝道のつまらぬことも知ず年のよつたることも知らず病氣になることも知らず行ふべき道の未だ達せぬのも知らず身の上の缺點も知らなければ固より他人の誹りなども知つて氣づかうべき筈もなからうこんな連中ほど仕方の

ないものはないのである、ところが彼れ等に云はせて見ると恐らくはかうも云ふであらう顔の美醜は鏡でわかるし年の老若はとつた跡を數へて見ればわかる自分の醜いこと年をとつたことがわからないと云ふではないがこれを知つたからとて今更どうとも詮方のあるものではないから外より見れば或はこゝに氣のつかぬやうにも見えるであらう併し自分の云ふことは何んにも醜いところの顏を美麗にせよとか年をとつて皺くちやになつた皺をのばして若くなれとかを云ふのではない若し自分の藝の拙いと云ふことを知りたとならば何故に直に引込んで仕舞はないか年がよつたと知るならば何故に安靜にして居ないか又もし自分の行爲が馬鹿ものゝするのであるを知るならば何故にそれに注意して改めないか一体人に愛せられもしない僻に大きな顏をして世の中へ出でゝ交るのは恥づべきところの事柄であるよその他の容貌みにく愚なるものが出でゝ仕へ無智なるものが智者に交はり藝も何もないものが巧者なるものばかり居る所へ出でゝ白髮頭で若者の中に交るなどゝ云ふのはこれいづれも恥づべきことである、ましてとつてもつかぬ望を抱き出來ないことに頭を痛め空しく未來のことを望み人を恐れたり人に媚ひたりするやうなるは人がする恥ではないこれ全く自分の慾心に引かれて自分で自分を辱めるのだ一体慾なる心を止めないのは死と云ふことについて眞面目に考えないからの故である

〔第百三十五段〕

資季大納言入道とかや聞えける人、具氏宰相中將に逢ひて、吾主の間はれん程の事、何事なりとも答へ申さゞらんやと云はれければ、具氏如何侍らんと申されけるを、去らば爭ひ給へと云はれてはかゝしき事は片端も學び知り侍らねば、尋ね申す迄もなし。何と無き漫言の中に、覺束なき事をこそ問ひ奉らめと申されけり。ましてこゝもとの淺き事は、

〔第百三十五段〕

◆資季大納言入道　正二位大納言藤原資季の事、入道して了心と號す、從三位左中將資家の子也◆具氏宰相中將　從三位源具氏也、中院と號し從三位右中將通氏の子也、宰相とは

少納言の唐名◆吾主和主とも書きかヌシの意、親しむ詞也◆はか〴〵しき事云々　具氏の詞也◆漫言　つまらぬ事の意也◆ましてこゝもとの云々　資季の言、「こゝもと」は日本の事◆御前　上皇の御前◆供御　上皇の御膳◆馬のきつりやう云々　古來云ひ來れる世話語なる可し、語意不明なるも、或説に遠國などにて馬の煩ひたる時の禁厭に云ふ詞なりと◆所課　負けわざの振舞にて前に約束せる供御の事也

何事なりとも明らめ申さんと言はれければ、近習の人々、女房なども、興ある諍なり、同じくは御前にて爭はるべし、負けたらん人は供御を設けらるべしと定めて、御前にて召し合はせられたりけるに、具氏幼くより聞き習ひ侍れど、其の心知らぬ事侍り。馬の「きつりやうきつにのをかなかくぼれいりくれんどう」と申す事は如何なる心にか侍らん、承はらんと、申されけるに、大納言入道、はたと詰りて、是は漫言なれば、云ふにも足らず、といはれけるを、もとより深き道は知り侍らず、そゝろごとを尋ね奉らんと、定め申しつと申されければ、大納言入道負けになりて、所課嚴しくせられたりけるとぞ。

（講評）　資季大納言入道とか云へる人が具氏宰相中將に出逢ひて『あなたのお尋れになる位の事なら何んでもお答えいたしませう』と云つたで具氏は『さあどうだか』といゝ加減に云つた所が一方は本氣になつて『それでは何でも問ひつめるがよい』と云へるので『私は固より無學文盲の者むづかしい事は存じまぬからそれはおつて唯何んと云ふこともないつまらぬ事のなかに合點の參らぬことが御座るからそれをばお尋れいたします』と云つた、すると資季は益々威丈高になつて『まして我國の而もつまらぬ事位ならば何でもお答えいたしませう』などゝいかにも大きなことを云ふので傍に居つたる近習の人々女房なども『これは面白い爭ひぢや同じ事ならば陛下の御前にて闘論せらるゝがよからうそして負けた方が御馳走をいたすとしませう』と云ふことにしてよう〳〵二人は御前にて勝負をすることゝなつたが先づ具氏は口を切つて『私子供の時分

から始終聞いて居りまするがわけのわからぬことがあります「馬のきつりやうきつるのをかなかくぼれいりくれんどう」と申すことはどう云ふ意味でござりませするか』と聞くので大納言入道忽ちつまつて『こんなことはつまらぬ事だから御話をいたす限りでない』と逃げる具氏『固よりむづかしい道理などは存じませんからつまらぬ事をお尋れいたしますと云つてはありませんか』と云つたので遂に資季の方が負けになつたそしてその罰として大に御馳走をさゝれたと云ふことである

【第百三十六段】 醫師あつしげ、故法皇の御前に侍ひて、供御の參りけるに、今參り侍る、供御のいろ〳〵を、文字も功能も尋ね下されて、そらに申し侍らば、本草に御覽じ合せられ侍れかし、一つも申し誤り侍らじ、と申しける、時しも六條の故内府參り給ひて、有房序に物習ひ侍らんとて、先づ「しほ」といふ文字は、いづれの偏にか侍らんと問はれたりけるに、土偏に候ふと申したりければ、才の程既に顯れにけり。今はさばかりにて候へ、床しき所なしと申されけるに、騒笑になりて退り出でになり。

（講譯） 醫者のあつしげと云ふものが故花園法皇の御前に參つて御膳に陪したるときに『只今まゐりました御馳走の品々をばその文字でも功能でもお尋れ下さい一々暗記で申し上げますそれを本草にお照らし合せ下さいましても決して間違ふやうなることはいたしません』と大きなことを申して居る所へ丁度有房が見えて序に一つ伺ひいたしたいが先づ「しほ」と云ふ字は何偏でござります

古代の藥物學書也神農初めて之を作り、後之に例ひて數多の書あり◆六條の故内府　從一位内大臣有房公にて和漢の才人能書也、左中將通有の子◆才の程既に顯れにたり　塩の字を聞かれて、俗字の鹽を答へたるを以て學力の程度を量られたる也

〔第百三十七段〕

◆花は盛に云々　此段文章の變態きはまりなく古來稱美の段也、六家集の中家隆「世の中を思ひつゞけて見る時はちるこそ花の盛なりけれ」、西行「中々に時々雲のかゝるこそ月をもてなすけしきなりけるかと問はれたるのであつしげ早速『土偏です』と云つたところが『いやもうそれであなたの學力も分りましたそれでよろしい大いしたことともない』と云はれたのでそこに居つた連中か皆ドッと笑ひくづれるあつしげは面目ない表情して退出せられた

〔第百三十七段〕　花は盛に月は隈なきをのみ見る者かは。雨に向ひて月を戀ひ、垂れ籠めて春の行方知らぬも、猶あはれに情深し。咲きぬべき程の梢、散り萎れたる庭などこそ見所多けれ。歌の詞書にも、花見にまかれりけるに早く散り過にければ、とも、さはる事ありてまからで、なども書けるは、花を見て、と云へるに劣れることかは。花の散り月の傾くを慕ふ習ひは左

れ」とあり◆雨に向ひて月を戀ひ云々　朗詠集に一對ノ雨戀ノ月序」めり、古今集に藤原因香朝臣「たれとめて春の行方も知らぬまに待し櫻もうつろひにけり」とあり◆歌の詞書歌の前書也◆頑なる人　頑固なる人◆遠き雲ゐ　雲ゐは雲居にて空を云ふ、遠境に隔りたる中を云ふ也◆淺茅が宿　淺茅の生いて荒れたる宿を云ふ◆望月

る事なれど殊に頑なる人ぞ、此の枝彼の枝散りにけり今は見所なし、などは云ふめる。萬の事も始め終りこそをかしけれ。男女の情も、偏に逢ひ見るをば云ふものかは。逢はで止みにし憂さを思ひ、假なる契りを嘆ち、永き夜を獨り明かし、遠き雲ゐを思ひやり、淺茅が宿に昔を忍ぶこそ、色好むとはいはめ。望月の隈なきを、千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うち時雨たる村雲隱れの程、又なくあはれなり。椎柴白樫などの濡れ

満月「ミチヅキ」の轉語、陰暦八月十五夜の月を云ふ◆千里の外まで　月光により遠望し得る事を云ふ、古詩に「三五夜中新月色、二千里外故人心」とあり◆いと心深う　これにて句を切る可し、下の又なく哀なりと云ふ詞をとめたる也◆濡れたるやうなる　葉のつやありて映るさまを云ふ也◆目に見て見るものかは　目のみにて見るものにあらで心にても觀る可きを云ひし也◆思へるこそ　花やさくらん月や出らんと思ひやるがをかしとの意也◆色濃く　俗に云ふシッコク也◆あからめもせず　わき目もふらず見つめゐる也◆泉には「李義山殺風景花上曝ゞ視清泉濯ゞ足」とあり◆見事いとあそし　通る物の甚だ遥　となり◆桟敷　祭行列見物の爲に高く構へたる床

たるやうなる、葉の上に煌きたるこそ、身に沁みて、心あらん友もがなと、都戀しう覺ゆれ。すべて月花を　ば左のみ目にて見る者かは。春は家を立ち去らでも、月の夜は閨の内ながらも思へるこそ、いと頼もしうをかしけれ。よき人は偏に好ける様にも見えず、興ずる様も等閑なり。片田舎の人こそ、色濃く萬はもて興ずれ、花のもとには涙ぢ寄り立ち寄り、他見もせず目守りて、酒飲み連歌して、果ては大なる枝心なく折り取りぬ。泉には手足さし浸して、雪には下り立ちて跡つけなど、萬の物外ながら見ること無し。左様の人の祭見し様、いと珍らかなりき。見事いと遅し、その程は桟敷不用なりとて、奥なる屋にて酒飲み物食ひ、圍碁双六など遊びて、桟敷には人を置きたれば、渡り候ふ、といふ時に、各々肝潰るゝやうに爭ひ走り上りて、落ちぬべきまで簾張り出で、押し合ひつゝ、一事も見洩さじと目守りて、兎あり角有りと物毎に云ひて、渡り過ぎぬれば、又渡らん迄と云ひて下りぬ。唯物をのみ見んとするなるべし。都の人の由々しげなるは、眠りていとも見ず。若く末々なるは、宮仕に立ち居、人の後に侍ふは、様悪しくも及びかゝらず、わりなく見ん

◆人を置きたれば　見物わたらば告よとて人を置きたれば也◆簾張り出でゝ　桟敷にかけたる簾を爭ひ見んとておよび出てつき張る也◆兎あり角有りとかやうにあつたと渡りし物を批判する也◆又渡らんまでと　祭の見物の一はな〳〵わたれるを又他の見物わたらん迄は、奥の屋にとて桟敷より下るゝ也◆ゆゝしとする人もなし、何となく葵懸け渡して濃艶かしきに、明け離れぬ程忍びて寄する車どもの床しきを、其れか、彼れかなど思ひ寄すれば、牛飼下部などの見知れるもあり。をかしくも、きら〳〵しくも、様々に行き交ふ。見るもつれ〳〵ならず、暮るゝ程には、立て並べつる車共、所なく竝み居つる人も何方へか行きつらん、程なく稀になりて、車共の、亂がはしさも濟みぬれば、簾疊も取り拂ひ、目の前に淋しげになり行くこそ、世の例しも思ひ知られてあはれなれ。大路見たるこそ、祭見たるにはあれ。かの桟敷の前をこゝら行きかふ人

げなる　茲ではほめたる詞にて俗に云ふエラサウナルの意也◆様悪しくも　下人女房など見様わろく前の人におしかゝり及び出で無理に見んともせず、後なるは後ながら静に物見ると也◆葵懸け渡して　賀茂の祭には二葉の葵を長くつられて、前日より御簾、柱、諸道具等にかける事各戸皆同じ、葵祭といふは此が爲也◆其れが彼れかの見知れるが、數多あるにて知りぬ、世の人數も左のみは多からぬにこそ。此の人皆亡せなん後、我身死ぬべきに定りたりとも、程なく待ち付けぬべし。大なる器に水を入れて、細き孔をあけたらんに、滴ること少しといふとも、怠る間なく漏り行かば、頓て盡きぬべし。都の中に多き人、死なざる日はあるべ　らず。一日に一人二人のみならんや。鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも、送る數多かる日はあれど、送らぬ日はなし。されば棺を覆ぐもの、作りてうち置く程なし。若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり。

今日まで遁れ來にけるは、有難き不思議なり。暫時も世を長閑には思ひなんや。「まゝ子立て」といふものを、双六の石にて作り立て並べたる程は、取られん事何れの石とも知らねども、數へあてゝ一つを取りぬればその外は遁れぬと見れど、また〳〵數ふれば、かれこれ間抜き行く程に、何れも遁れざるに似たり。兵の軍に出づるは、死に近き事を知りて、家をも忘れ身をも忘る、世を背ける草の庵には、靜に水石を弄び て、これを他所に聞くと思へるはいと果敢なし、靜なる山の奥、無常の敵競ひ來らざらんや。其の死に臨め

其人か彼人か◆籠疊機敷の道具也◆世の例し　世の盛衰人の榮落無常の理などを云ふ也◆大路見たるこそ　只大路のさまを見たるが師祭を見たると云ふものよとて物を觀ずるといふ事をいはん便に置きたり、これ決前生後の詞也◆こゝら　多くの意也◆大きなる器物に　後漢書王符傳に「山林不レ能レ給二野火一江海不レ能レ實二漏巵一」と

あり◆鳥部野、舟岡共に京都附近の地名、葬送の場所也◆まゝ子立て　黒白の石を雜へ並べて數へて十にあたる石を次々除く遊戯也◆遁れざるに似たり　まゝ子立ての石の遂にめぐり來て取らるゝ如く世人のおくれ先立ちて死を遁れずと也◆兵の軍に出づるは　兵士の出軍を云ふ、當時は南北朝の戰爭ありし頃也◆これを他所に聞く

る事、軍の陣に進めるに同じ。

（講譯）　普通の人が花を見るとか月を見るとか云つて居るのは爛漫と咲き揃つたる花清く澄み渡つたる月のときを云ふのであるが花や月の面白みは決してそれには限らぬものである雨の夜に今宵は見えないところの月を慕ふとか花を外にツッと家の内にとち籠つて何時の間に春の去るのを知らないなども亦趣味のあることである花を見るにもまだ咲きかけなる雨の先きがホンノリとやゝ赤らんだる頃とか既に散つて庭に白く雪を降らしたるやうなる所などがよい歌の詞書にも『花見に參つたる所がもう散つて居つたので』とか『差支があつて行かないので』などゝ書いたのは『花を見てよむ』と書いたのに決して劣らぬことである花が散るとか月が傾くとか云ふことを名殘惜しく思ふゝ云ふのはこれは人情の然るべきことではあるが『もうあの枝もこの枝も散つてしまつたつまらない』などゝ云ふのは物のわからないところの連中である花も眞盛よりは咲きかけであるとか若しくは既にちつたる跡のまだ間のない時分が何

と　彼軍兵の軍に出で死に近く危ふきありさまを外事と思ふは果敢無しと也◆閑なる山の奥　世を遁れて山にあらば敵兵の攻寄する事こそ無けれ、無常の敵は閑なる山中にも來るの意也

となく詩趣があつてよいと云つたが一体何でも始めか終りかゞ面白いものである男女の戀ひも唯圓滿なるその逢ほうと思へば自由自在に逢はれるやうなるそんな戀ひには眞の趣と云ふ者はないものである逢ほうと思つて焦れながら遂に逢ひ得なかつたなりのつらさを思ふとか二世も三世もちぎつたる戀ひの忽ち破れたる果敢なさを恨むとかその他或は秋の夜長にこぬ人を待ちわびながら獨明かし或は遠くはなれたる戀ひ人の身の上を思ひ或は荒れはてたる家に昔しの戀ひの花やかさを思ひ出だせるなどかうしたる事が眞の戀ひてふものの趣味が見えて面白さがあるのであるこれを自然の景色について見るに皎々として中天に澄み渡つたる月影よりは待ちこがれつゝ漸く明け方近くになつて出でたる月影のいかにも意味ありげなる奇味がかつた色をして深い山の杉の梢に懸つたところを木の間からすかして見るときさては時雨の雲のかげからうすらかに顯はれ見えるときなどの常盤木の葉のぬれたるやうに光つたる所へキラ〳〵と月の映

つたる景色を見るとシミ〴〵と身にしみ渡るやうなるところの氣がしてあゝもし趣味を解するところの友達どもあつたことならばと都の空のそらがなつかしくなる一体月や花を唯目ばかりで以て觀るとは云ふことは間違つて居るのである春は家の内に居つても花の光景のほどを推し思ひ月の夜は閨の裡にひそみれて居ながらもその月光の越をさぞ今ごろは一入と知るのが面白いで身分のある所の人は何事にも夢中になるやうなることはせないものであるあつさりと面白がるものである譬へば花を觀るとするとせんにその木の下へ無暗と立ち寄つてよそ見もせずに見るそして酒を飲み連歌をしてしまひに大きなる花の枝を平氣で折り取る又清い泉を掬むときなどは唯ちよつと飲むだけではない手も足もひたして仕舞ふぢや雪の上へは飛び下りてあし跡をつけるかやうにして何んでもさはつて見なければ承知しないのであるこんな連中が賀茂祭を見物するのは又頗る珍妙〳〵あつた『まだ中々だ來るまでこゝに居つても仕方がない』こんなことを

云つて奥へ行つて酒を飲んだり圍碁双六などをして居る但し棧敷には番人が置いてあるから『いよ〳〵お渡りです』と云ふ時には各々ドタバタととびで〻來て落ちかけるほど籬の所へ身体を出だして互におし合ひしあひながら少しでも見落すまいとうちまもつて居るそしてどうのかうのと批評をして行列が過ぎて仕舞へば又『來るまで一休みしやう』と云つて奥へ行くこんな連中は趣味も何もないのぢや唯もう行列だけを見やうと云ふのであるこれに反して都の人は立派なる身分の人になるとむしろ目をつぶつたるやうにして居てよく見ないし身分の低いところの若者はそれ〳〵仕つて居るところの主人の用事で働いて居る人の後について見物に來て居るところのものでも見えないからとて前の方へ押しかゝつたりして不体裁なるところの眞似はなさぬかの田舎漢の無暗矢鱈に見やうとするやうなることは決してなさない何處と定めなく彼方此方に葵をかけわたして見るから艶に奥床かしいけしきであるそこへまだあけはなれぬ時分からもつと車をよせて來る連中が澤山あるのである體の車であるのか

よくわからないがあの人だらうか此の人であらうかなど推し量つて見るゝ中にはその牛飼や下部などに顔を知つて居れるものもあるそんな連中が面白く美をしくいろ〳〵と往來するのを見ると亦面白い所がやがて暮近くなるゝその邊一面に並んで居つたところの物見車も一杯にならんで居つたところの見物人も何處へ參るのやら減つて仕舞つて物車の混雜も消えてしまへば棧敷に使つたるところの籬や疊も取り拂つてしまひさしも賑はしかつたところの祭も淋しくなつてしまふのだ浮世の榮華も丁度こんなものであるかと思ふとまことに悲しいところの氣がする祭の見やうにもいろ〳〵あるべけれどもかういふ大路のさまを見たるのが眞に祭を見たと云ふものであらうところであの棧敷のまへをそろ〳〵と通つて行くところの連中に見知つたものが案外に澤山であるのを見ると世の中の人の數は多いやうでも割合に少ないものと見られるぢやして見るとこれ等の連中は皆死んでしまつたる後で一番最後に自分が死ぬるに定まつて居るものにしてもやがて死なればならぬのだからまして何時死ぬるのかわ

からない身には今日の夕もはかられない話しではあるまいか善へば
大きな入物に水を入れてその底へ小さな穴をあけたりとせよ穴は小
さいのであるから滴ると ころの水は勿論僅少なる譯であるがしかし
少しも休まず滴つて居れば後にはその入物の水はなくなつて仕舞ふ
であらう都の中には澤山に人が住んで居るが一日として死人のない
ところの日はないのである而もそれは決して一日に一人や二人の少
數ではない鳥部野、舟岡その外諸所の墓地へ葬れる所の數は多い日
はあつても これがないところの日はないのであるされば棺屋がせつ
〳〵とやつても棺桶が節季に澤山賣れ殘ると云ふ樣なことはない死
と云ふものは老少強弱には關係がない全く思ひがけないところのも
のである自分が今日までその死の手にかゝらずかうして生き延びて
來たと云ふのは固よりこれ非常なる不思議である世の中は元來無常
極まつたところのものである纔子立と云ふものを見るにこれを双六
の石で作つて最初並べたるだけである間はどの石がとれるかわから
ぬのであるけれどもいよ〳〵十にあたるのを數へあてゝ一つこれを

【第百三十八段】

◆祭　賀茂野社の祭也　毎年四月中の酉の日に行はる　◆色もなく　沒

取ればその他はそれが助かつたるやうなるもの〻又數へるとだん
〳〵と取られて行つて遂には殘らず取られて仕舞ふ事になるのこと
ではないか人間の死ぬるのは既に死ぬるのも之と同じことなのである軍人の軍に參
るのは既たる草の庵にて靜かに水石を弄んで居れる連中は全く世とは沒交
涉で戰爭の死と云ふ問題は全くよそにして居るものであらうが實は
甚だたよりないところの次第ぢやたとひ靜かなる山の奥でも無常と
云ふところの敵は遠慮會釋なく押し寄せて襲ひ來たるものである隨
つて死と云ふものゝ追ひ廻つて居れることは戰場に臨んで敵軍に對
して居る所の兵士と全く變りはないのである

【第百三十八段】

或人の御簾なるを皆取らせられ侍りしが、色もなく覺え侍りしを、よき人のし給ふ事なれば、さるべきにや

祭過ぎぬれば、後の葵不用なりとて、

趣味な事の意◆よき人　高貴な人◆周防の内侍　周防守平棟仲の女仲子と云ひ、後冷泉院の女房也◆かくれどもの歌　諸共に見はこそかひもあらめ、思ふ人とも見ればみすの葵の枯葉もかひなしと也、「簾一に一見す」をかけてよめり◆母屋　おもやにて本家を云ふ也◆古き歌の詞書に　新古今集に「はやう物申しける女に枯れたる葵をみ

と思ひしかど、周防の内侍が、懸くれども甲斐なきものは諸共に御簾の葵の枯葉なりけり、と詠めるも、母屋の御簾に葵のかゝりたる枯葉を詠める由、家の集に書けり。古き歌の詞書に、枯れたる葵にさしてつかはしける、とも侍り。枕草紙にも、來し方戀しきもの、枯れたる葵、と書けるこそ、いみじく懐かしう思ひ寄りたれ。鴨長明が四季物語にも、玉だれに後の葵はとまりけり、とぞ書ける。おのれと枯るゝだにこそあるを、名殘なくいかゞ取り捨つべき。御帳にかゝれる藥玉も、九月九日菊に取りかへらるゝと云へば、菖蒲

あれの日遣しける實方云々」とあり此外かゝる類多し◆鴨長明　後鳥羽院の時和歌所の寄人となる、加茂の社家也、後出家して蓮胤と云ふ　四季物語、無名抄、方丈記、道の記、海道記などの著あり◆おのれと枯るゝ　自然と枯るゝさへ惜しきものなとの意也◆御帳　御戸張也、戸の代りに張りて光を取るもの也◆藥玉

は菊の折迄もあるべきにこそ。枇杷の皇太后宮かくれ給ひて後、古き御帳の内に、菖蒲藥玉などの枯れたるが侍りけるを見て、折ならぬ根をなほぞ懸けつる、と、辨の乳母のいへる返りごとに、菖蒲の草はありながら、とも、江の侍從が詠みしぞかし。

（講釋）　賀茂の祭がすむと後の葵はもう入用がないと云ふので或人が御簾について居つた葵をすつせかり取らせたるのを趣味を解せない事であるのせられることであると思つたが何分にも身分のあるところの人あるのかと思つて居つた、所が周防の内侍の歌に

かくれどもかひなきものはもろともに
みすの葵の枯れ葉なりけり

と云ふのがあるがこれは母屋の御簾に葵の枯れ葉がかゝつて居るの

種々の香料を玉にして、これに其時々の造花を結びつけ、五色の糸を垂れたるもの、多く御簾又は柱にかけて不浄を拂ひ邪氣を避く五月五日には菖蒲を添へ、九月九日には菊と取替へる也◆枇杷皇太后　御堂關白道長の女妍子、三條院の御后、扇御後、陽明門院と稱し奉る◆辨の乳母　前加賀守顯時の女◆江侍從　大江匡衡の女、母を詠んだものであるとその家集に書いてあるその他古い　の詞書に【枯れた葵にさしてやる】と云ふのもあり又枕草紙にも『過ぎ去つた日の戀ひしものは枯れた葵である』と書いてあるがなるほどさうである又鴨長明の四季物語にも『王だれに後の葵はとまりけり』と書きのせてある、自然に枯れて行くのさへ惜しいものをどうしてむざ〳〵と取り捨てられやうか後の葵を捨てるのは矢張り物を知らないところのやり方であるのだ又直に取り捨てぬのはこの葵ばかりでは無い五月の節句にとばりにかける薬玉も九月九日菊に取り代へるとも云ふことであるから五月の菖蒲は九月の菊のときまでも殘しておくべき筈のものなのであらうこれについてこんな話しがあるよし昔し枇杷皇太后のお崩れにならせ給ひたる後で古いとばりの中に枯れたる菖蒲や薬玉のあつたのを見て辨の乳母が『菖蒲ぐさ涙の玉にぬきかへて折りならねなほぞかけつる』とよんだその返事に江侍從が『玉抜きし菖蒲のくさはありながら淀野は荒れむとやは見む』と詠まれたと云ふ話があるこれも矢張り古い菖蒲や薬玉が捨てられずに

は赤染衛門也

【第百三十九段一】

◆五葉　五葉松也◆左近の櫻　紫宸殿南庭の階に近く左右に櫻と橘あり、櫻を左近の櫻、橘を右近の橘と云ふ◆異樣　異風體なり◆遲櫻　晩櫻とも書く◆覺え劣り　勢劣る也◆京極入道中納言　藤原定家、貞永元年出家して法名明靜と云へり◆唐めき　支那臭きを云ふ

あつたところの證據であるであらう

〔第百三十九段〕　家にありたき木は松、櫻、松は五葉もよし、花は一重なるよし。八重櫻は奈良の都にのみありけるを、此頃ぞ世に多くなり侍るなる。吉野の花、左近の櫻、皆一重にてこそあれ、八重櫻は異樣の物なり。いと事甚く捻けたり。植ゑずともありなん。遲櫻また荒涼じ。虫のつきたるもむづかし。梅は白き、薄紅梅、一重なるが疾く咲きたるも、重なりたる紅梅の、匂ひめでたきも皆をかし。遲き梅は櫻に咲きあひて、覺え劣り氣壓されて、枝に萎みつきたる心憂し。一重なるが先づ咲きて散りたるは、心疾く、をかし、とて、

京極入道中納言は、猶一重梅をなん軒近く植ゑられたりける。京極の屋の南向きに、今も二本侍るめり。柳又をかし。卯月ばかりの若楓、凡て萬の花紅葉にも勝りてめでたき物なり。橘、桂、いづれも木は物古り大なるよし。草は山吹、藤、杜若、撫子、池には蓮、秋の草は荻、薄、桔梗、萩、女郎花、藤袴、紫苑、木香、苅萱、龍膽、菊、黄菊も、蔦、葛、朝顔、いづれもいと高からず、さゝやかなる垣に茂げからぬよし。この外世に稀なるもの、唐めきたる花の聞きにくゝ、花も見なれぬなどいと懐かしからず、大方何も珍しく

有難き物は、よからぬ人のもて興ずるものなり。左樣の物無くてありなん。

（講講）家の庭のうちに植ゑて置きたいところの木は松に櫻であるその中で松は五葉の者がよい櫻の花は一重であるのがよい八重櫻は元は奈良の都にだけあつたものでそれがとうく廣まつて來て近頃では到る所海内何所にでも見るやうになつたしかしよいのはかの有名なるところの吉野の花や左近の櫻も皆一重のもので ある八重は一種の殊なつたものでくどくてすなほなる所がないこんなものは先づ植ゑて置かない方がよからう又その遲櫻と云ふのも面白うないところのものだよ殊に虫のついたのなどはいやなるものである、梅は白梅、薄紅梅いづれもよい又一重の花の新巻劈頭に咲づ雷を破つたものもよければ一重ならぬ紅梅の色美しく咲いたのもよいものぢや但し咲き遲れたるのは櫻と一緒になつて人にも愛されず何んだか櫻に壓道されるやうで枝にしぼみついゐるなど面白くな

〔第百四十段〕

いこんなわけで京極入道中納言も一重の梅が他の花に先だつて咲き他のものゝ咲く時分にはもう散つて居ると云ふのが面白いからと云ふので一重櫻を軒近く植ゑておかれたのであるさうだそれが今も京極の御邸の南側に二本殘つて居る次に柳の木も面白いものである又四月頃に若楓の新芽を出したる美しさは他の花や紅葉にも一入まさつて居る橘や桂は大きな木の久しく年を經て古くなつたのがよい次に草では山吹、藤、杜若、撫子がよろしい池に生えたるものでは蓮である秋の草では荻、薄、桔梗、萩、女郎花、藤袴、紫苑、われもかう、苅萱、龍膽、菊、蔦、葛、朝顔などいづれもあまり高くないところの小さな垣根にまばらに植ゑたるのがよろしいこの外なるあまり世にないものやむづかしい支那風の名前の花も見馴れないやうなのは面白くない一体何んでもあまり珍奇なるところのものは身分の低いところの人の喜ぶものでそんなものは寧ろない方がよからう

〔第百四十段〕 身死して財殘る事は、智者のせざる所なり。よからぬ物貯へ置きたるも拙く、よき物は心をとめけんと果敢なし。こちたく多かる況して口惜し。我こそ得め、など云ふ者共ありて、後に爭ひたる、様悪し、後は誰にと志す物あらば、生けらん中にぞ譲るべき。朝夕なくて叶はざらん物こそあらめ、その外は何も持たでぞあらまほしき。

（講譯） 自分の死んだあとに財寶を殘すことは智慧のあるところの者のなさないところである善くもないものを貯へて置いたるのは見下げらるゝ所のわざであるし又善い物は死ぬるときに心を殘したらうと思はれてはならない事でもあるちやコテ〳〵と下らぬ物が澤山に在るのは況して苦々しいものだ自分こそ何々の品を得やうなど云ふところの人だちがあつて死んだ跡に遺族や親族など

◆身死して云々　前漢書に「韋賢及子玄成以レ明レ經至レ相諺曰遺二子黄金滿籯一不レ如レ教二子一經一」とあり、古人賢者に富者少く、家に儲石の蓄なきを美談とす　◆よきもの　よき道具には執着もしたそうの意　◆こちたく　ことごとしき也　◆我こそえめ　後の人の財を爭ふ様也　◆後は誰にと云々　死後は此物は誰に遣らんと思ふものあらば生

前に分けつかはす可しと也

【第百四十一段】

◆悲田院　今の孤兒院也奈良朝時代より東西の二箇所にありて孤兒病者を養ふ、延喜左右京職に「凡京中之路邊病者孤子仰二九箇條一令下其所レ見所レ過隨レ使必取送中施藥院及悲田院上一とあり◆堯蓮上人傳記不詳◆双無き　並ぶもの無き也◆言受け　返辭よく埃拶する也◆乏しく　貧乏也◆賑ひ豐かなれば　富み盛なる也此頃朝廷は年々に衰へ、武家は日々に盛なりし頃なれば也◆聖教　佛道の經論を云ふ◆多かる中に　法師は世に多くある中に悲田院の住持とせるなりと也

が形見爭ひなどなすのはこれもザマの悪いものであるから自分の死んだる後は誰それに間に讓つておくのがよろしい朝夕なくてはならぬところの日用品は素よりこれ仕方なしであるけれどもその外なるものは何んにも持たないで居たいものである

【第百四十一段】　悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦の某とかや。双無き武者なり。故郷の人の來りて物語すとて、吾妻人こそ言ひつる事は頼まれ、都の人は言受けのみよくて、實無しと云ひしを、聖、それは左こそ思すらめども、己れは都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心劣れりとは思ひ侍らず。なべて心柔かに情ある故に、人の云ふ程の事、酷甚く辭み難く、萬得云ひ放たず、心弱く言受けしつ。僞せんとは思はねど、乏しく叶はぬ人のみあれば、自ら本意通らぬ事多かるべし。吾妻人は我が方なれど、實には心の色無く情後れ、偏に直よかなる者なれば、始めより否と云ひて止みぬ。賑ひ豐かなれば、人には頼まるゝぞかしと、ことわられ侍りしこそ。この聖聲うち歪み荒々しくて、聖教の細やかなる理り、いと辨へずもやと思ひしに、この一言葉の後心にくゝなりて、多かる中に寺をも住持せらるゝは、斯く和らぎたる所ありてその益もあるにこそと覺え侍りし。

（講譯） 悲田院の尭蓮上人と云ふは俗名を三浦某とか云つたが元は立派なるところの武士であつたと云ふことである或時のことであつた故郷の人が訪れて來て何やかや話をなしたる序に『一体私等の生れました關東地方の者はよく然諾を重するからあてになりまするが都の人は唯口先のみがうまくて眞心と云ふものがありませぬ』と云つたところが上人は案外にもこれに反對して『なるほどさう思はれるかも知れぬが自分は實際永らく都に住んで居つて都の人とも交はつて見たが人の心が劣つて居るとは思はないしからば何故さう思はれるであらうやと申すと一般に心が穩かで情けに厚いから人の云ふことをきつぱり斷はつて仕舞ふことが出來ない心が弱いためについ何事でもよい加減に受け合ふので決して嘘をつかうなどゝは思はぬのであるけれどさて愈々實行と云ふことになると何分貧乏人ばかりであるので自然にお流れとなつて仕舞ふのが澤山あるのぢや關東は自分の故郷であるが彼方の人はどうも愛想と云ふものがなく人の情けと云ふものを知らぬ唯もう眞直な一方なので最初からきつぱり斷はつて仕舞ふ且つ又ウンと云つたところで上方人のやうに貧乏でないから人のためにも盡すのである』と說明されたと云ふことであるがこの上堯蓮上人といふ人は物の云ひ振りも所謂るあづま言葉で妙に訛つて荒つぽい故どうぜわかるまいと思つて居たところがこの一言を聞いてよりは何んだか奥床しいやうに思はれ多い法師のある中で寺でも持つて居られるはつまり柔和なるところがあつてよい所もあることだらうよと感服をした

〔第百四十二段〕 心なしと見ゆる者も、善き一言は云ふものなり。ある荒夷の恐ろしげなるが傍の人にあひて、御子はおはすや、と問ひしに、一人も持ち侍らずと答へしかば、さては物のあはれは知り給はじ、情無き御心にぞ物し給ふらんと、いと恐ろし、子故にこ

〔第百四十二段〕

◆心なし　人情のない者也◆荒夷　東國荒々しき夷族を云ふ◆子故にこそ云々　池の尼の輕朝をたすけ、熊谷が敦盛を助けんとするも

我子の事を思へば也、古歌に「人の親の心はやみにあられども、子を思ふ道に迷ひぬるかな」とあり◆恩愛の道　子を憐みうつくしむ心を云ふ◆斯る者　荒爽を云ふ◆子持ちてこそ云々　最明寺殿の歌に「子を思ふ親ほど親を思ひなば世にありがたき人といはれん」と、古語にも「養レ子方知二父母恩一」とあり◆匹如身　匹夫にて無一物の

そ萬のあはれは思ひ知られ、といひたりし、左もありぬべき事なり。恩愛の道ならでは、斯る者の心に慈悲ありなんや。孝養の心無き者も子持ちてこそ親の志は思ひ知るなれ、世を捨てたる人の萬に匹如身なるが、並べて絆多かる人の、萬に諂ひ望深きを見て、無下に思ひ朽だすは僻事なり。その人の心になりて思へば、まことに悲しからん。親の爲、妻子の爲には、恥をも忘れ盜みもしつべきことなり。されば盜人を縛しめ、僻事をのみ罪せんよりは、世の人の飢ゑず寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。人恒の產なき時は恒

獨身なるを云ふ、白氏文集に一匹如身後有二何事一應レ向二人間一無レ所レ求」とあり◆恥をも忘れ云々　前漢書に「飢寒至レ身不レ顧二廉恥一」とあり◆人恒の產なき時は云々　孟子梁惠王上篇に「無二恒產一而有二恒心一者惟士爲能、若レ民則無二恒產一因無二恒心一、苟無二恒心一放辟邪侈無レ不レ爲已及レ陷レ於レ罪然後從而刑レ之是の心なし。人窮りて盜みす。世治らずして、凍餒の苦しみあらば、科の者絕ゆべからず。人を苦しめ法を犯さしめて、それを罪なはん事不便の業なり。さていかがして人を恵むべきとならば、上の奢り費すところを止め、民を撫で農を勸めば、下に利あらん事疑ある べからず。衣食世の常なる上に、僻事せん人をぞ實の盜人とはいふべき。

（講譯）　わけのわからないやうに見えところの者でも時としては隨分よいことを云ふものである或荒々しい所の東國人の見るのも怖いやうなのが或時は傍の人に向つて『御子さんはありますか』と聞いたる所がその人は『いえ實は一人もありませんので』と答えた、するとその東國人は見かけの荒々しさうなるにも似ず

民ノ民也」とあり◆人窮りて盗みす　孔氏家語に「歌窮則攫、鳥窮則啄、人窮則詐」とあり◆衣食世の常なる上に　これ奢を戒むる調にて上下に通じて云へるなる可し

んなことを云つた『それでは物のあはれはわかりますまい大方冷酷なる御心でいらつしやらうと思ふと恐ろしうございます實際子供が御座りましてこそはじめて世の中のあはれと云ふものがわかるものですから」と云つた夷の云つたことながらなるほど尤も千萬なることである子を思ふ道でなければとてもそんな連中には慈悲の心は起りはすまい不孝なるものでも自分が子を持てるやうになると始めてこの者が妻子などいふいろ〳〵の束縛のある者の何かにつけて人に詔ひ慾の深いのを見て無暗にそれを輕蔑するのは間違つて居る假りに自分がその人の心になつて見れば實際已むを得ないのであらう親のため妻子のためには恥も外聞も忘れて仕舞つてまた盗みもする者であるのだから盗人を拘禁したり悪いことをしたる者を罰したりするだけでは世の中はよく治まれるものではないそれよりは先つ世の人を飢ゑたり凍えたりしないやうにさせて行くのが第一番である孟子も云つて居る通り相當の財産がなければ正しい心も保ち難い譯で

【第百四十三段】

◆終焉　臨終の事、死にぎは也◆言ひし詞な

はないが貧に迫まられて遂に盗みもするのであるから世がよく治まらず飢ゑたり凍えたりするやうなことであつては罪人は到底絶えろ所のものではないのである然るにその最も必要なる所の生活の途を立てゝやらずに人を苦しめ法律を犯さしめてそれを罪するのは實に可哀相なることではあるまいかしからばどうすれば人を惠むことが出來るであうかと云ふにこれ他なし唯上に立つところの者が奢り費すところの者がおごり費すところの費用を止めてこれを以て人民を愛し農をすゝめたるならば下に居れるものが利益を得ることは慥かであるかやうにそしてその衣食に不足のないやふにならせたる上で悪いことをするものがあつたならばそれこそ眞の盗人であることれを罪するは固より當然のことであらう

〔第百四十三段〕　人の終焉の有樣のいみじかりし事など、人に語るを聞くに、唯靜かにして亂れずと云はゝ。

云々　其死にたる人の詞も行跡も也◆此大事　臨終の時をいふ◆權化の人　佛菩薩などの衆生濟度の爲にかりに此世に生れ來るをいふ　釋迦の如し◆定むべからず、測るべからず　傍より見ては權者博士の臨終も測り定め難し唯其死ぬる人の心次第なるべしと也

心にくかるべきを、愚なる人は怪しく異なる相を語り付け、言ひし詞も振舞も、己れが好む方に譽めなすこそ、其の人の日頃の本意にもあらずやと覺ゆれ。この大事は、權化の人も定むべからず。博學の士も測るべからず。己れ違が所なくば、人の見聞にはよるべからず。

（講譯）　人の死にぎはの有樣が立派であつたことなどを人が話して居るのを聞くとたゞ靜かにして取り亂せるところもなかつたと云つて置くと奥ゆかしうに聞えるべきだのな馬鹿なる人は不思議にも奇特の相が顯はれたなどつけ加へ死んだる人が言つたところの言葉もその動作も自分のすきなるやうになしてほめるのは死んだ人の平日の本意ではあるまいと思はれるのであるこの死にぎはのことばかりは權化の人でも豫め之を定めると云ふことは出來ず博學であるところの人でもこれを豫識することは到底得られないことや故に終焉たる死にぎはのことは自分の本心に間違つたるところさへなかつたならばその死相などはどうでもよろしいのぢや人の見聞に依つて支配せられるに及ばぬものであらう

〔第百四十四段〕　栂尾の上人道を過ぎ給ひけるに、河にて馬洗ふ男、あしゝといひければ、上人立ち留まりて、あな尊とや、宿執開發の人かな、阿字々々と唱ふるぞや、如何なる人の御馬ぞ、餘りに尊く覺ゆるは、と尋ね給ひければ、府生殿の御馬に候ふ、と答へけり。こはめでたき事かな、阿字本不生にこそあなれ、嬉し き結緣をもしつる哉とて、感涙を拭はれけるとぞ。

【第百四十四段】◆栂尾上人　釋高辨明惠上人の事、栂尾は山城國高尾の西北◆あしゝ　馬の爪を洗ふ時足をあげよとて云ふ詞也、之を上人は阿字々々と聞たる也◆宿執開發云々　前生にて修めたる功德の開發して今阿字を唱ふるよとの意也◆府生殿　府生とは

左右の衛門、左右兵衛の下官也、判任官也◆阿字本不生　大日經に一有情及非情阿字第一命」又阿字門一切諸法本不生」と、阿の字は眞言秘密の觀法也、本不生とは諸法本來空の義也、上人あし／＼を阿字、府生を不生と聞きなしたる也◆結緣　佛緣を結ぶ也、其緣即ち自己の善根なれば感涙せる也

【第百四十五段】

◆御隨身　弓箭帶劍して供奉する近衛の舍人

（講譯）　山城の國の栂尾の明惠上人が曾つて或る所で道を通行して居られたるところが河に馬を洗つて居るところの男があつてそれが『あしあし』といつたので明惠上人にこれを聞いて立ちとまり『あゝ尊いあの男は宿執開發と見え阿字阿字といつて居るぞやあの馬はどんな人の所有であるのであらうかあまりありがたいと思ふぞ』と尋ねられたるのでこの馬を洗ひ居つた男は『府生殿の御馬で御座います』と答えたすると上人には『これはめでたい阿字本不生でうれしい佛緣を結んだるものぢや』と云つて感涙を流されたと云ふことである

【第百四十五段】　御隨身秦の重躬、北面の下野入道信願を、落馬の相ある人なり、よく／＼愼み給へと云ひけるを、いと實しからず思ひけるに、信願馬より落ちて死にけり。道に長じぬる一言神の如しと、人思へり。

を云ふ◆北面　北面武士也、重躬、信願共に傳記不詳◆桃尻　鞍の上に尻のおちつかぬを云ふ◆沛艾の馬　躍れる馬、跳馬也、文選に「龍驤蹀躞而沛艾（すゴリアガル）」とあり

さて如何なる相ぞと人の問ひければ、極めて桃尻にして、沛艾の馬を好みしかば、この相を課せ侍りき。いつかは申し誤りたるとぞ云ひける。

（講譯）　御隨身の中に秦の重躬と云ふものがあつた北面の武士の下野入道信願と云ふものを見て『あなたにはどうも落馬の相がありまする故よく／＼御注意なされまするがよい』と云つたけれども信願には『なにそんなことがあるものか』と思つて居つた所がその後の日になつて信願は果して馬から落ちて死んだので聞く人は皆流石は重躬である道に達したる人のことは丸で神樣のやうやと感服したそこで誰かゞ『落馬の相とはどんなもので御座りますか』と聞くと重躬は答えて『あの人は非常な桃尻なるが上に無暗とはね上る馬がすきであつた故に落馬の相だと申したので御座る私の云ふことは決して誤りはありません』と云つた

【第百四十六段】

◆明雲座主　久我太政大臣雅實公の孫顯通の子、山門の座主となれり、義仲の亂の時射殺されたり、座主とは一座の主と云ふ義、叡山三千の衆徒の棟梁也◆相者　相人とも云ふ、今の骨相學者、人相見の類◆兵仗の難　刀劍弓箭の難、卽ち武器にて殺傷せらるゝ厄難の義也◆果して矢に中りて　明雲座主は壽永二年十一月十九日、木曾義仲の郎黨なる楯六郎親忠の放ちたる矢に中りて死せり

【第百四十七段】

◆あまた所に云々　灸をすえた箇所の許多なるを云ふ◆格式　今の法令の類也、嵯峨天皇の時、弘仁格弘仁式を、清和天皇の時、貞觀格、貞觀式を、醍醐天皇の時、延喜格延喜式を撰ばせらる、世に之を三代格と云ふ

【第百四十八段】

◆三里　明堂灸經に、「男子三十已上不レ可レ不レ灸二三里一三里所二以

【第百四十六段】

若し兵仗の難やあると、尋ね給ひければ相人、誠にその相おはします、と申す。如何なる相ぞと尋ね給ひければ、傷害の恐れおはしますまじき御身にて、假にも斯く思しよりて尋ね給ふこれ、既にその危みの兆なり、と申しけり。果して矢に中りて失せ給ひけり。

（講譯）　明雲座主が或時のことであつた人相見にお逢ひになつて『自分に劍難の相はあるまいか』とお尋ねになりたるところがその人相見は『慥にござりまする』と申すそこで明雲『どう云ふ相ぢや』とお聞きになると『一體座主の御身で傷害の御心配抔は決してないとこの御身分でありながら假初めにも劍難の相はないかなどゝお尋れに相成るのは全くその前兆でござりまする』と申し上げたるがところが果して矢に中つて薨ぜられた

【第百四十七段】　灸治あまた所になりぬれば、神事に穢れありと云ふ事、近く人の云ひ出せるなり。格式等にも見えずとぞ。

（講譯）　灸をすゑたる跡が澤山にあつては神事にけがれがあるとて云ふことであるがこれは近頃になつて云ひ出だしたることにて根據のないとこるのことである古い法令規則などを書きのせたところの格式には書かれて居ないとのことである

【第百四十八段】　四十以後の人、身に灸を加へて三里を燒かざれば、上氣の事あり。必ず灸すべし。

（講譯）　年齡が四十歲以上になつては只からだだけに灸をすゑて三里をすゑないとのぼせるからこれにも必ずすゑるのが

下ノ氣也」とあり、或云「三里穴在二膝下三寸一」と、膝の下の外側の少し凹みたる所を三里と云ふ

【第百四十九段】

◆鹿茸　鹿の袋角也、一說に鹿の胃袋の乾したるものなりとも云ふ

【第百五十段】

◆能をつかんとする人　藝能を我身に附けんとする人也◆慥に　生強ひにの義也と云ふ◆内々　内々の下練習也

よからう

【第百四十九段】　鹿茸を鼻にあてゝ嚊ぐべからず。小さき蟲ありて、鼻より入りて腦を食むといへり。

（講譯）　鹿茸を鼻にあてゝ嚊いではならぬものであるこれには小さなる虫がついて居つて鼻から這入つて腦を食ふと云ふことであるから危險であるが故に

【第百五十段】　能をつかんとする人、よくせざらん程は、慥ひに人に知られじ。内々よく習ひ得てさし出でたらんこそ、いと心にくからめと常に云ふめれど、斯くいふ人一藝も習ひ得る事なし。未だ堅固片帆なるより、上手の中に交りて、譏り笑はるゝにも恥ぢず、つ

◆堅固片帆　堅固は未熟の意、片帆はかたはしにてまほならぬ意也◆天性その骨無けれども　生れつきの器用はなくともの意也◆堪能の嗜まざるより云々　器用の人の藝を嗜み勤めぬよりは却つて上手になるとの意也◆放埒せざれば　みだりにせざる意也◆博士　物しりの義也

れなく過ぎて嗜なむ人、天性その骨無けれども、道に泥まず妄にせずして、年を送れば、堪能の嗜まざるよりは、終に上手の位に至り、徳長け人に許されて、竝び無き名を得る事なり。天下の物の上手といへども、始めは不堪の聞えもあり、無下の瑕瑾もありき。されども其の人、道の掟正しく、これを重くして放埒せざれば、世の博士にて萬人の師となる事、諸道變るべからず。

（講譯）　何か藝能を身につけて見やうと思ふところのものが下手なる内は何んでも人には知られまいコッソリと人知れず習つておいてうまくなつたらば人前に出るとすれば感心するであらうなどゝ云ふのが普通であるのであるけれどもかういふやうな連中

は遂に何一つも習ひ得ないものであるまだ極未熟なる内から上手なる人の中に交はつて嘲笑されても氣に止めず平氣でやつて行くところの人はたとひ天性不得手なるところの人でも屈託せすおろそかにせず功を積んで行く内には遂に器用なるものが一生懸命でやらないよりは却つて上達して德望もつき人にもゆるされ非常に有名なるものとなるものである一體天下一の上手と云はれるところの者も最初は矢張りまづいと云はれて大きなるきづもあつたるものであるしかしチヤンと眞面目にしてよくその道の規則を遵守しこれを重んじて怠らなければ遂に斯道の大家となつて萬人の師範ともなるものだこれは何の道も皆同じもので變りはないのである

【第百五十一段】 或人の曰く、年五十になる迄上手に至らざらん藝をば捨つべきなり。勵み習ふべき行末もなし、老人の事をば人も得笑はず、衆に交りたるもあへなく見苦し。大方萬の仕業は止めて、暇あるこそ目安くあらまほしけれ。世俗の事に携りて、生涯を暮すは下愚の人なり。床しく覺えん事は學び聞くとも、その趣を知りなば、覺束なからずして止むべし。もとより望む事無くして止まんは、第一の事なり。

【第百五十一段】◆年五十になる迄云々　論語子罕篇に「後世可レ畏焉、知二來者之不一レ如レ今也、四十五十而無レ聞焉斯亦不レ足レ畏也已」と◆あへなく　可愛らしげなくと云ふ程の意◆目安く　見易く也◆床しく覺えん事　其藝をゆかしく思ふならばとの意也◆覺束なからずして　覺束なからざる程度での意、大體の事に通曉したる程度に止め置くを云ふ

（講譯） 或人はこんなことを云つた『五十までやつても上達しないやうなる藝道は見切つてこれはもう駄目であるとして捨てて仕舞がよいそこまでやつてならぬものならこの上やつたと所で到底駄目であるのぢやいくらあせつたる所でもう先か知れて居るではないか老人なれば人もいくらか遠慮して笑はないけれどもそれはとて己れを忘れて人の中へ出しやばるのは見つともないものであるよまあ年がよれば何も止めて暇にして居るのが人から見るにしても體裁もよくて願はしいことであるつまらぬ俗世間の事に關係して

齷齪として一生を過すのは馬鹿なることであらう又たとひ知つて見たいと思ふことがあつて習ふにしたところでその大體のところがわかればよい加減の所にて止めるがよいよ但し勿論最初から習はうと思はないのが最もよいよ

〔第百五十二段〕

西大寺靜然上人、腰屈まり眉白く、まことに徳長けたる有様にて、內裏へ參られたりける を、西園寺內大臣殿、あな尊の氣色やとて、信仰の氣色ありければ、資朝卿これを見て、年の寄りたるに候ふと申されけり。後日に、尨犬のあさましく老いさらぼひて、毛禿げたるを曳かせて、この氣色尊く見えて候ふとて、內府へ參らせられたりけるとぞ。

〔講譯〕

西大寺の靜然上人か年をとつて腰も曲り眉も白くなつて見るからに高德のやうなる有樣で宮中へ參られたるところが之を見たる西園寺內大臣には非常に感服して『何んとまあ尊い有樣だこと』と如何にも信仰したるやうなる樣であるので之を見たるところの資朝卿が『何んでもないつまり年がよつたからぢや』と云はれた且つその後非常に年をとつたるむく犬のとら毛のはげたるのをこの西園寺大臣の所へ贈つて『この有樣は如何にも尊いではありませんか』と申されたと云へることである

〔第百五十三段〕

爲兼大納言入道召捕られて、武士共打ち圍みて、六波羅へ率て行きければ、資朝卿一條わたりにてこれを見て、あな羨まし、世にあらん思出斯くこそ有らまほしけれとぞ云はれげる。

〔講譯〕

爲兼大納言入道が陰謀を企てたと云ふ噂のために北條氏の手に捕へられて武士等の中に圍まれ乍ら六波羅へ行く男、權中納言從三位檢非違使別當也、南朝の忠臣にして正中二年五月北條氏のため佐渡に流され後斬首せらる、有名なる日野阿新丸の父也◆老いさらぼひ老いやせ衰へたる狀也

〔第百五十三段〕

◆爲兼大納言入道 藤原爲家の孫、爲教の子、權大納言正二位藤原爲兼にして伏見天皇の時北條氏を滅さんとして謀漏れ、捕はれて佐渡に流され後歸洛す◆六

途中であつた一條の邊でこれを見たるところの資朝卿が『なんとまあ羨ましいことではある男子として苟くもこの世に生れたる以上はかういふ風にありたきもので御座る』と仰せられたとのことである

〔第百五十四段〕 この人、東寺の門に雨宿りせられたりけるに、不具者どもの集り居たるが、手も足も屈ぢ曲みうち返りて、何所も不具に異樣なるを見て、とり〴〵に類ひ無き曲者なり、尤も愛するに足れりと思ひて、目守り給ひける程に、頓てその興盡きて醜く幽鬱く覺えければ、只素直に珍しからぬ物には如かずと思ひて、歸りて後、この間植木を好みて、異樣に曲折あるを求めて、目を喜ばしめつるは、彼の不具者を愛す

波羅　北條氏の京都政治所也、二人の探題を爰に置き畿内西國の政事を掌らしむ南北兩六波羅之事也◆世にあらん思出　世に生れ出た思出にの意、男兒世に生れた以上須らく爲業癖の如くなる可しと資朝の羨みたる也

〔第百五十四段〕

◆この人　日野資朝卿を云ふ◆東寺　京都下京區に在る眞言宗の總本山也、昔鴻臚館なりしを弘仁年中弘法大師に賜はりて寺とす、實は八幡山敎王護國寺と云ふ

るなりけりと、興なく覺えければ、鉢に栽ゑられける木ども、皆堀り棄てられにけり。左もありぬべき事なり。

（講譯） この資朝卿は何かにつき餘程面白い人であつたのと見えて又こんな話もある或時のことであつたこの人が東寺の門のところへ雨をよけて居られたるところ丁度そこにいろ〳〵不具者が集まつて居つたが手も足もねぢ曲つて仕舞つたりなどしていかにも奇抜であるのを見て『これは又いづれも〳〵ひとくせあるべきところの奴等ぢや面白い〳〵』など思つてヂット見て居られたるが暫らくして又その面白みがなくつて今度は唯もう見にくいいやな感じがするのでこれは何んでも普通なるものに限ると思ひ家へ歸つてからもこれきで植木をすいて妙な曲りくれつたものを求めては皆喜んで居たのは丁度あの不具者を愛したるやうなものであらとて我れながら頗る不快を感じて遂に鉢に植ゑてあつたところの植木など

も皆なげすてて仕舞はれたなる程尤なる次第であらう

〔第百五十五段〕 世に從はん人は、先づ機嫌を知るべし。序惡しき事は、人の耳にも逆ひ心にも違ひてその事成らず、左樣の折節を心得べきなり。但し病を受け、子產み、死ぬる事のみ、機嫌を計らず、序惡しとて止む事なし。生住異滅の移り變る實の大事は、猛き河の漲り流るゝが如し。暫しも滯らず、直ちに行ひゆくものなり。されば眞俗に付けて、必ず果し遂げんと思はん事は、機嫌を云ふべからず。兎角の用意無くば足を踏み止むまじきなり。春暮れて後夏になり、夏果て

【第百五十五段】

◆機嫌 機は發する也 嫌は疑ふ也、對人の喜怒哀樂の狀を見て感情を察するを云ふ◆序惡しき事は 都合惡し、折惡しなどの意、目出度き場合に不吉の事を云ふなど是也◆生住異滅 世に之を細の四相と云ふ生は生れ出るを云ひ、住は人の世に居住して老身となること異は病を受けて異形となるを云ひ、滅は死にゆくを云ふ◆猛き 急流の事也◆眞俗 眞は出世間を云ひ、俗は世間を云ふ◆小春 十月の異名也、歲時記に一天時和暖似レ春、故曰二小春一とあり◆迎ふる氣下に云々 下より崩ゝ迎ふる氣をまうけし故に上の木の葉のまちとりて落つる次第甚早きなりとの意也◆生老病死 之を粗の四相と

て秋の來るにはあらず。春は頓て夏の氣を催し、夏より既に秋は通ひ、秋は則ち寒くなり、十月は小春の天氣、草も青くなり梅も莟みぬ。木の葉の落つるも、先づ落ちて芽ぐむにはあらず、下より萠しつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる氣下に設けたる故に、待ちとるついで甚だ早し。生老病死の移り來る事、又是に過ぎたり。四季は猶定れる序あり、死期は序を待たず。死は前よりしも來らず、かねて後に迫れり。人皆死ある事を知りて、待つ事而も急ならざるに覺えずして來る。沖の干潟遙なれども、磯より潮の滿つるが如し。

云ふ、生老異滅に同じ
◆かれて後に迫れり　今唯足もとに迫れりの意也

（講義）　世の中に出で、人と交はるには先づ第一に時機といふものを考えねばならぬものである時機を失したる事は聞く人の耳にもちがひ心にもそむいて遂に成功せぬ者ぢや故によくそんな場合を知らねばならぬものである但し病氣、出産、死亡の三つは又特別で時機をはかつて起るものではないものであるされば此れ等は都合が悪いからとて躊躇はしないものぢや人間の生住異滅は丁度かの滔々たる大河の流れと同じことで遠慮會釋もなくズン〳〵と運んで行くものであるから眞俗どちらのことでも必ずそれを成就しやうと思ふことは時機などないつて居るところの餘地はない思ひ立つたがさいごそれには何の用意もいらぬ直に着手するがよい四季うつり變りに見るも春が暮れてから夏になり夏がすんでから秋がくるのではない夏の氣は既に春の中に催ほし夏の中にも既に秋の氣が籠つて居る冬の寒さも秋にあれば十月には早や小春の天氣で草も青み梅もつぼむのである木の葉の落ちるのも先づ落ちてそれから次に芽ぐむのではない新しいところの芽が下から衝き上げるので已むを得ず古い方の葉が落ちるのである新を迎へる氣が下にあるから次へ次へと進み行く順序が早いところが人間の生老病死の變化の早きは猶ほこれ以上である四季には猶ほ定まつたる順序があるが死には何の順序もなく突如として來るそれも前から來ればわかるが前からは來ぬそして早くも自分の後に迫つて居るのである勿論人は誰でも死ぬるといふことは心得て居るけれどもさう早く來やうと思はぬがその足は意外に早く來る丁度沖の干潟が遠いので潮はきだ〳〵來たらないであらうと思つて居れるのに突如として横の磯の方から來るやうなものだらう

【第百五十六段】
◆大臣の大饗　新任大臣の饗應也、江次第に「正月四日、左大臣饗、五日右大臣饗、是式日也而近代任大臣明年行之、不レ行二大饗一大臣

〔第百五十六段〕　大臣の大饗は、然るべき所を申し受けて行ふ、常の事なりにて行はる。内裏にて有りけるを申されけるによりて、よそへ行幸ありけり。させる事の寄せ無けれども、女

不レ向二饗所一云々」とあり◆常の事　普通の例である◆宇治左大臣　従一位左大臣藤原頼長也、關白忠實の二男なり◆内裏にてありけるを　當時東三條殿は皇居なりしを申請ひしかば他所へ行幸せさせ給ひきと云ふ也◆させる事の寄せ　さして外戚とかの緣故なくとも規模の儀なればわりなき女院の御所など借り申さるゝ故實なりとの意也◆女院　國母に院號を奉らせ給ひたるを云ふ

院の御所など借り申す故實なりとぞ。

（講譯）　初めて大臣になつた時の披露式をするには然るべき所を借り受けてそこで行ふのが普通である宇治大納言は東三條殿でこれを行はれたるが當時そこには陛下がをられたしかし拜借を願ひ出でたるので陛下にはわざ〳〵他所へ行かれた別に外戚などと云ふ身分でなくても女院の御所などを拜借するのが故實であると云ふことである

【第百五十七段】　筆をとれば物書かれ、樂器を取れば音を立てんと思ふ。盃を取れば酒を思ひ、賽をとれば攤打たん事を思ふ。心は必ず事に觸れて來る。假にも不善の戯れをなすべからず。明地に聖敎の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。卒爾にして多年の非を改むる事もあり。假に今この文を廣げざらましかば、この事を知らんや。是れ卽ち觸るゝ所の益なり。心更に起らずとも、佛前にありて珠數をとり經を取らば、怠るうちにも善業自ら修せられ、散亂の心ながらも繩床に坐せば、覺えずして禪定なるべし。事理もとより二つならず。外相若し背かざれば、內證必ず熟す。強ひて不信といふべからず。仰ぎて是れを尊むべし。

（講譯）　筆を執れば自から物を書くやうになり樂器をとれば音を立て、見やうと思ふその他盃をとれば酒を飲まうと思ひ賽をとれば双六をやつて見やうと思へるなど人の心は必ず何か事に觸れて動くものである故に苟くも善くないところの戯れをしてはならぬものであるこれに反して又善い方にも動き易く唯かりそめに佛

【第百五十七段】◆筆をとれば云々　陳師道思亭記に「目之所レ視而思從レ之、視二干戈一思レ鬪視二刀鋸一則思レ懼視二社廟一社則思レ敬視二第家一則思レ安」とあり◆攤打たん事　双六の事也◆聖敎　佛道の經論也◆散亂の心　しづかならぬ心◆繩床　繩もて造りたる粗末なる床にして座禪工夫の床也◆無理　事は外形の所作、理とは其心、眞

如佛性に歸するを云ふ
◆外相　外の貌也◆内證　内の心也

典の一句を見てもそれが緒となつて自然前後の所も目につくかうしてふとしたる事から多年の過ちを改めることもあるのである近い話がもし今この佛典を見なかつたとならばこれもわからぬ譯ではあるまいかさらばこの佛典を見たるだけでも既に有益なるのである即ち觸れたる爲に得られたるところの利益である故自分の心には毫も佛教を信ずるところの念が起らないとするも唯佛壇の前に座つて珠數をとりお經をとりたるならば忽ち中にも自から善業が修められて居るたとひ氣が散つても繩床にさへ座して居れば我れ知らずく〳〵に禪定も出來居れるものであるこれ畢竟するに外に現はれたる事と内にひそめるところの理とがもと一にして二ならざる所以なのであるから若し外形が道に背かないことすれば内心の悟りは盛すできるわけであるのだだからたとひ初めはどんな氣持でやつて居つても強ゐてそれを不信となし去つてはならぬやがてはこれも悟に入る所の人である大に尊敬するがよい

【第百五十八段】
◆盃の底を捨つ　盃の底に殘れるまりを捨てる事也◆凝當　當は底也◆魚道　下學集に「魚道建二殘盃一也以二餘瀝一洗二盃痕一、喩二之魚過二舊道一、故云二魚道一也、魚雖レ游二泳大海一終不レ忘二舊道一者一」とあり

【第百五十九段】

〔第百五十八段〕盃の底を捨つる事は如何心得たるとも或人の尋ねさせ給ひしに、凝當と申し侍れは、底に凝りたるを捨つるにや候ふらんと申し侍りしかば、左にはあらず、魚道なり、流を殘して口の付きたる所を瀉ぐなりとぞ仰せられし。

（講譯）
『盃のそこを棄てると云ふことがあるが何う云ふことであるのかを知つて居れるか』を或人が自分に對して聞かれたるので『凝當と申しますからそこの所に滯つたのを捨てるとで御座いませう』と答えたる所が『否さうではない所謂る魚道ぢや即ち流れを殘して口のついたところを洗ひ去るのであるのぢや』とかやうに仰せられた

〔第百五十九段〕「みなむすび」と云ふは、糸を結び重

◆みなむすび　公家の長袴或は聖道の袈裟などの飾に糸を以て結びさぐるを云ふ◆蜷　和名抄に「河貝子（和名美奈、俗に蜷字を用ふるは非也、蜷貝は扁する貌也）殻上黒小狭長似二人身一者也」とあり

【第百六十段】

◆勘解由小路二品禪門　正二位参議行忠の事　世尊寺と號す◆平張　庭上などに板敷をして假に張り出したる所を云ふ◆護摩　梵語にて焚焼の意也、故に護摩焚くと云へば重言也◆清閑寺僧正　道我として兼好と同時代の人也、清閑寺は東山清水寺の西南にあり、延暦年中紹巖法師の開基にかゝる

ねたるが、蜷といふ貝に似たればいふとあるやんごとなき人仰せられき。になと云ふは誤なり。

（講譯）　袈裟の組緒を『みなむすび』と云ふのは糸を結びかされたるところの形がみなと云ふ貝に似て居る故に云ふので あると或高貴なる所の人が仰せられたこの『みな』の事を世間の人が『にな』と云ふは間違て居るのである

【第百六十段】　門に額かくるを、うつと云ふはよからぬにや。勘解由小路二品禪門は、額かくると宣ひき。平張うつなどは常の事なり、桟敷構ふるなどいふべし。護摩焚くと云ふも惡し、修する、護摩するなどいふなり。行法も、法の字をすみて云ふ惡し、濁りていふと、清閑寺僧正仰せられき。常にいふ事にかゝる事のみ多し。

（講譯）　門に額をかけることを『額をうつ』と云つてはよくないのであらうか勘解由小路二品禪門は『額をかける』と云はれて居る又物見のときに桟敷の用意をすることを『桟敷をうつ』と云ふのも惡いことであるのと見える平張などは普通『うつ』と云つて居るが桟敷は『かまふ』と云ふべきものであるその他『護摩を焚く』と云ふもよくないぢや『護摩を修する』とか『護摩する』とか云ふ方がよからう又清閑寺僧正の話せるところによると『行法』の法の字も『はふ』とすんで讀むのは惡い『ばふ』と濁つてよむのであると云ふことぢや平生云つて居れることにこんな間違は極めて澤山あるのであるこれ等はつまらぬことのやうであるが矢張り注意せねばならぬ事だらう

【第百六十一段】

◆冬至　太陽が南回歸

【第百六十一段】　花の盛は冬至より百五十日とも、時

線上を直射する時、即ち十二月二十一日頃也一年中晝間の最短、夜間の最長なる時にして正午に於ける太陽の高度最も低し◆時正　彼岸中の日、晝夜の長さ等しき故時正と云ふ、春季皇靈祭の日也◆立春　俗に云ふ節分の事二十四氣の第一にして春の初日也

〔第百六十二段〕

◆遍照寺　嵯峨の廣澤の池の附近に在り◆承仕法師　僧名にあらず寺中の觸れ流し法事な

正の後七日ともいへど、立春より七十五日大様違はず。

（講譯）　花（櫻のこと）の盛りになるのに冬至より百五十日頃ともいひ又彼岸の中から七日目頃てあるとも云へるが經驗によると立春の日より七十五日目位とすれば大抵間違はないのである

〔第百六十二段〕　遍照寺の承仕法師、池の鳥を日頃飼ひつけて、堂の内まで餌を撒きて、戸一つを開けたれば、數も知らず入り籠りける後、己れも入りて、立てこめて捕へつゝ、殺しけるよそほひ、おどろ〳〵しく聞えけるを、草苅る童聞きて人に告げければ、村の男どもも、起りて入りて見るに、大雁ども紛騒き合へる中に法師交りて打ち伏せ捩ぢ殺しければ、この法師を捕へ

どの雜用をするものを云ふ、給仕僧也◆池の鳥　廣澤の池の鳥也◆おどろ〳〵しく　騒ぎの仰山なる意也◆所より檢使廳へ　其所より檢違非使廳へなり◆禁獄　罪人を牢獄に入れて禁足するを云ふ◆某後大納言　久我基具の二男、前に出でたり◆別當　檢非違使廳の長官也今の警視總監に相當す

て、所より使廳へ出したりけり。殺す所の鳥を頸にかけさせて、禁獄せられにけり。基俊大納言別當の時になん侍りける。

（講譯）　遍照寺の承仕法師と云へるは平常から池の鳥を馴らして置いたそして或時の事であつたが堂の内まで餌をまいて戸を一所あけるとそれ等の鳥が無數に這入つて來たので法師は自分もその所へ入つて戸をとぢて鳥が逃げないやうにし一々捕へて殺すところのさまがいかにも恐ろしく聞えたるのを丁度その邊で草を刈つて居つたところの子供が聞きつけて人に告げたそこで村の男だち大勢かけつけてそのところへ參つて見ると果して大きなる雁がばた〳〵として居る中に坊主がまじつて打ち伏せ打ち伏せして殺して居るので早速その坊主を捕へて檢非違使廳へ連れ行つたところが檢非使廳にてはかうして殺したる鳥を頸にかけさせて獄に入れたるがこ

【第百六十三段】
◆太衝　九月の異名、筆談七に「九月木可レ爲二枝幹一、故云二太衝一、太衝者、日月星所レ生門戸、天之衝也」とあり　◆陰陽のともがら　陰陽道の輩を云ふ◆もりちか入道　傳不詳◆吉平　安倍晴明の子にして主計頭、陰陽博士たり◆自筆の占文の裏に　古反古の裏に記錄を書きありたる也

れはかの基俊大納言が檢非違使廳の別當であつたころであつたのである

〔第百六十三段〕太衝の太の字、點打つうたずといふ事、陰陽のともがら相論の事ありけり。もりちか入道申し侍りしは、吉平が自筆の占文の裏に書かれたる御記、近衞關白殿にあり、點打ちたるを書きたりと申しき。

（講譯）九月の異名であるところの太衝の『太』の字は點をうつて『太』の字にするとか點をうたずして『大』の字とするとか云ふので陰陽法の連中が議論をやつたることがあるがそのときにもりちか入道が云へるには『吉平自筆の占文の裏に近衞關白殿の書かれたる御記錄が今も尙ほその關白殿の御家にあることであるがこれには太の字として點をうつてある』と云つた

【第百六十四段】
◆是を語る時　無益の事をうつら〳〵と語りゆきて無益の事とも知らずと也、されば心す可しとの意也

【第百六十五段】
◆東　關東を云ふ、日

〔第百六十四段〕世の人相逢ふ時暫くも默止する事なし、必ず言葉あり。その言を聞くに、多くは無益の談なり。世間の浮說、人の是非、自他の爲に失多く得少し。是を語る時、互の心に無益の事なりといふことを知らず。

（講譯）世の中の人が誰でも互に相逢ふ場合には少しもだまつて居ることはない屹度何とか話をするものであるところがその話を聞いて見ると大抵は役にもたゝぬところのつまらぬ事にて譬へば世の中に根もない話他人の評判などを云へるものでいづれも利益は少なうして損失の澤山であるものぢや而もそれを話して居るときには誰もそれが無益なる事であるとは悟り知らないのである

〔第百六十五段〕東の人の都の人に交はり、都の人の

本武尊東征の時、相模より房總に渡るの海上にて風に遭ひ、風浪を鎮むるため妃橘媛海に投す、尊歸途碓氷峠に上り顧みて橘媛を思ひ「吾妻はや」と宣ひしに始まる◆顯密の僧　顯教密宗の僧也、顯教は顯はに佛說を教へ聞かする天臺宗などを云ひ密宗とは眞言宗秘密の法を云ふ◆我が俗　我が風俗也

【第百六十六段】

◆雪佛　貞和集子元雪佛頌に「一華擎出一如來六出圀々咲瞼開識得髑髏元是水摩耶宮裏不レ投レ胎」とあり◆安置　二字共に置くとよむ、佛を据え置くを云ふ

【第百六十七段】

◆一道に携る人　携はるは關係する、從事するの意、何にても一藝を覺え其れに從事するを云ふ◆あらぬ道の席

東に行きて身を立て、又本寺本山を離れぬる顯密の僧、凡て我が俗にあらずして人に交はれる、見苦し。

（講譯）　東國の人の京都の人に交はるとか京都の人の東國に行きて立身出世するとか又僧侶がその本寺本山を離れて他宗に這入るとか凡べてかうしたる身分本來の習俗を脫して他に交るのにまことに見苦しいよ

【第百六十六段】　人間の營みあへる業を見るに、春の日に雪佛を作りて、其の爲に金銀珠玉の飾りを營み、堂塔を建てんとするに似たり。その構へを待ちてよく安置してんや。人の命ありと見る程も、下より消ゆる事雪の如くなるうちに、營み待つこと甚だ多し。

（講譯）　我々人間のして居れる所のことを見ると丁度春の日に當りて雪佛を造つてたりしやうとするやうなものぢやそれ等の事がいよ〳〵出來上つたる時分には本尊の雪佛を安置しやうとしたるところでもうそれはとけて仕舞つて居る人間の生きて居る間と云ふのも丁度これに同じやうなるものでいろ〳〵としやうと思つて居ることは實に澤山であるが本尊たるところの自分の命は春の日の雪と同じやうに刻々と下の方より消え行くのである

【第百六十七段】　一道に携る人、あらぬ道の席に臨みて、あはれ我道ならましかば、かくよそに見侍らじものをと云ひ、心にも思へること常の事なれど、世に惡く覺ゆるなり。知らぬ道の羨しく覺えば、あな羨ましなどか習はざりけん、と云ひてありなん。我智を

わがえせぬ道の筵に臨みての意◆我道ならましかば　自分の専門の道であるならば人を驚倒せしめんものをと慢心する也◆常の事　俗にありがちの事の意◆世に惡く　只惡しくの意にして、「世に」は強める爲の添へ言葉也◆我智を取り出て、若し我専門の道にて我智を挾みて人と爭ふはの意也◆人としては　人は萬物の靈長、豈獸

取り出で、人に爭ふは、角ある物の角を傾け、牙ある物の牙を嚙み出す類なり。人としては善に誇らず、物と爭はざるを德とす、他に勝る事のあるは大なる失なり。品の高きにても、才藝の勝れたるにても、先祖の譽れにても、人に勝れりと思へる人は、たとへ詞に出でゝこそ云はねども、內心に若干の咎あり、謹みてこれを忘るべし。痴にも見え、人にも云ひ消たれ、禍をも招くは只此の慢心なり。一道にも誠に長じぬる人は自ら明かにその非を知る故に、志常に滿たずして、遂に物に誇る事なし。

行に類する事ある可けんや、されば善に伐らず物と爭はざるを德とする也◆品の高き　品位の高きを云ふ◆痴にも　馬鹿々々しき事也◆慢心　法界次第に「自恃輕他人之心云慢、若恃種姓富貴有德才能輕蔑於他即是慢也」とあり◆志常に滿たずして　曲禮に曰く「志不可滿樂不可極」と

（講譯）何でも一つの藝能を心得てそれに從事をいたして居れる人が自分の専門以外の事の會に行つてあゝ自分の専門の事であつたらばかうして傍觀しては居ないのであるにと口へ出しても言ひ心の裡で思へるのは普通のことであるがこれはこの上もなき惡いことであると思ふ、知らない道のことを羨ましく思つたならばあゝ羨しい我れはどうしてこれを習はなかつたのであらうやと云つて居る方がましだ自分の智惠を持ち出して人と競爭をやるのは角のあるところの獸が敵をつき殺さうとしてその角を傾けて突いてかゝり牙のあるところの獸が敵をかみ殺さうとして牙をむぎ出だして向ふと同じやうなものである我々人間としては自分の善い事を自慢せず人と競爭をなさないのを以て德ある人とするのぢや他人にすぐれたることのあるのは大きな過ちである品位の高きでも才智藝能のすぐれたるのでも系圖が正しいとか家柄がよいとかいふやうなる先祖の名譽でも人よりまさつて居ると思へるところの人は假令口へは出して言はないにしてもその內心にイクラか慢心の罪があるものであ

【第百六十八段】

◆此の人の後には　此の人もし死にたる後には誰にか問はんの意◆老の方人　老功の其道の人の意味也◆今は忘れにけりと　たとへ知り居たりとも、態とかすめて、忘れたりと云ふ方よろしとの意◆定かにも　確かに、明にの意◆道の主　其道の棟梁◆したり顔　得意顔◆おとなしく戻きぬべくも云々　大人なしく他人の反對するこことの出來ない樣な老成家の言聞かせるのを然らすなど思うて聞き居たるはの意◆わびし　不愉快位の意味也

る慨しんでこの慢心を忘れて仕舞ふがよからう馬鹿にも見え人にも厭く言はれ禍を招くのも只此の慢心のあるがためである眞實一道にも長じたる位なる人は自分でハツキリト慢心するのは惡るいと云へる事を知りて自分の智惠の足りないことを知つて居るから上達を望む心はいつも滿足しないでしまいまで人に自慢するやうなことはないものである

〔第百六十八段〕　年老いたる人の、一事勝れたる才能ありて、此の人の後には誰にか問はんなど云はるゝは、老の方人にて生けるも徒らならず。左はあれど、それも廢れたる所の無きは、一生此の事にて暮れにけりと拙く見ゆ。今は忘れにけりと言ひてありなん。大方は知りたりとも、漫に云ひ散らすは左ばかりの才にはあらぬにやと聞え、自ら誤もありぬべし。定かにも辨へ、知らずなど云ひたるは、なほまことに道の主とも覺えぬべし。まして知らぬ事、したり顏に、おとなしく戻きぬべくもあらぬ人の云ひ聞かするを、左もあらずと思ひながら、聞き居たるいとわびし。

（講譯）　年はとつても何か一方に傑出したところの才能があつて『この人が死んだらばこの道の大家はなくなる』などと云はれるのは全く老人仲間に於けるところの光榮でこんな人は年がよつても生き居るところの生き甲斐があるのでありしかしそれも程度問題で太したる傑出でないのならば何んだあの老人は一生涯かつてあんなものかもうあのまゝで死ぬるのだらうよ』抔と馬鹿に見られるがこんなものは寧ろ『今はもう忘れて仕舞つた』と云つておけばよいのである假令一通りは知つて居るにしても無暗に人に云

【第百六十九段】

◆式　諸種の儀禮を行ふに當りての法則を云ふ◆後嵯峨の御代　後嵯峨天皇は第八十七代の天皇、御諱を邦仁と申し奉る、御代は御治世を云ふ◆建禮門院　第八十代高倉天皇の皇后、安德天皇の御母、

ひたりするのは却つて人から『太したる才でもないのであらう』などゝ思はれその云へることには自然誤りもあるであらう之に反して『よくは知らない』など、云ふのは却つて斯道の大家であらうと思はれるものだまして知りもせぬことを知つたるやうなる顏をいたして立派なる人たるやうに云ひきかせるのを心の裡では『何だい馬鹿々々しい』と思ひながら聞いて居るのはいやなるものである

【第百六十九段】　何事の式といふことは、後嵯峨の御代迄は云はざりけるを、近き程より云ふ詞なりと人の申し侍りしに、建禮門院の右京大夫、後鳥羽院の御位の後、復内裏住したる事を云ふに世の式も變りたる事は無きにもと書きたり。

（講譯）　近來よく何々の式と云ふことを云へるがこれは後嵯峨天皇の御代まではなかつたところの言葉で近世に初まつた

太政大臣平清盛の女◆右京太夫　建禮門院の官女、藤原伊行の娘◆復内裏住したる　右京太夫は源平爭亂の時一たび宮仕を辭し、平家沒落後又後鳥羽天皇に宮仕したるを云ふ

【第百七十段】

◆左したる事なくて　往く可き程の事なくての意◆むづかし　うるさい、むさくるしなどの意◆厭はしげに　主人が客の長居を迷惑さうに不請々々に受答をすることであると或人が申したがこの說は誤つて居ることである古い所でもかの建禮門院の右京太夫がもと高倉院のときに内裏に居つて源平の亂に一度下り又後鳥羽院のときになつて再び内裏に仕へたることを云つたところに『世の式も變りたることはなきにも』と云へる言葉がある之に由つて見ると既に以前より使つて居つたるものであるよ

【第百七十段】　左したる事なくて、人の許行くは善からぬ事なり。用ありて行きたりとも、その事果てなば疾く歸るべし。久しく居たるいとむづかし、人と對ひたれば、詞多く、身も草臥れ心も靜ならず。萬の事障りて時を移す、互の爲め益なし。厭はしげに言はんもわろし。心づきなきことあらん折は、なか〳〵其の由

してなるのもよくない　◆心づきなき　急用などありて長談の氣に乘らぬ樣の時には其由を客に云ひて斷る可し　◆同じ心に　わがあひ口の友にて今日は徒然なれば緩りせよと主人の云ふた時は此限りで無い　◆阮籍　竹林七賢の一人、あひ口の友には青眼をなし、あはぬ友には白眼をなせる事晉書に見ゆ　◆その事となきに　此れはあひ口の

をも云ひてん　同じ心に對はまほしく思はん人の、つれ〴〵にて、今暫し、今日は心靜になどいはんは、この限りにはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべき事なり。その事となきに人の來りて、長閑に物語りして歸りぬるいとよし。又文も「久しく聞えさせねば」などばかり云ひおこせたる、いと嬉し。

（講義）　これと云ふ太つたる用事もないのに人の所へ行くのはよくないことである又たとひ用事があつて行つたとしてもその用向がすんだならばすぐに歸るのがよろしいのであるぐず〳〵として居つてながく人の邪魔をするのはいたつてよくないことである人と向ひあつて居ればなにかとつまらないことをしやべつて身もくたびれるし心もそは〳〵として自然すべての仕事を妨げられ時間

友の事也、大事な用事があるのでもなくの意

【第百七十一段】

◆貝を掩ふ人　貝合と云ふ遊戲をなす人、三百六十の蛤殻を分ちて

を空費することにもなるのであるこれお互ひのために利益のないことであらうされば折角客の來て居れるのをいかにもいや〳〵さうなる風であしらふのは禮を缺ける次第であれば自分に氣乘のせぬときなどには寧ろこの事をうち明けて話すのがよからう但し氣のあふところの人が無聊なるときに『もう暫らく今日はまあゆつくり』などゝ云ふやうなる場合は例外である昔阮籍と云ふ人は喜ぶときには青眼を以て迎へいやなるときには白眼をしたりと云へるがこれは阮籍のみならず誰もあるところのことである但し別の用もないのに訪れて來て心のどかに話をいたして歸ると云ふことなどはよいものである手紙でも只『久しく御無沙汰をいたしましたから』と云ふ位の事だけを書いておこしたのは嬉しいものである

〔第百七十一段〕　貝を掩ふ人の、我前なるをばおきて、他所を見渡して、人の袖の陰、膝の下迄目を配る間に、前なるをば人に掩はれぬ。よく掩ふ人は、他所迄わり

片方の貝を場にまき散らし、他の一片と合はせ、多く合せたるものを勝とす◆碁盤の隅に

藝經に「彈碁兩人對レ局白黑碁各六枚先引レ碁相當更先彈也其局以レ石爲レ之」とあり◆聖目　井目也周田制井田の九百畝に準へて然云ふ◆外に向きて求むべからず　中庸に「射有レ似二乎君子一失二諸正鵠一反求二諸其身一」とあり◆清獻公　宋人趙抃

なく取るとは見えずして、近きばかり掩ふやうなれど、多く掩ふなり。碁盤の隅に石を立てゝ彈くに、向ひなる石を目守りて彈くは中らず、我が手許をよく見て、此所なる聖目を直に彈けば、立てたる石必ず中る。萬の事外に向きて求むべからず、只此許を正しくすべし。清獻公が詞に、好事を行じて前程を問ふ事勿れといへり。世を保たん道も斯くや侍らん。内を愼まず、輕く放恣にして妄りなれば遠國必ず背く時、始めて謀を求む。風にあたり濕に臥して、病を神靈に訴ふるは愚なる人なりと、醫書に云へるが如し。目の前なる人の

の事、字は閻道と稱し清獻は諡也衢州の人なり、仁宗・英宗・神宗の三朝に仕へて參政となる◆好事を行ひて　清獻公座右銘の一にして「行二好事一莫レ問二前程一」とあり◆内を愼まず　論語に「遠人不レ服則修二文德一以來之既來之則安レ之」註に「內治修然後遠人服有二不服一則修レ德以來レ之亦不レ當レ勤二兵於遠一」とあり◆風にあたり　本草序に「眞誥曰常不二能愼一

愁を止め、惠を施し道を正しくせば、その化遠く流れん事を知らざるなり。禹の行きて三苗を征せしも、師を班して德を敷くには如かざりき。

（講譯）　貝合せをするところの人が自分の前にあるのをばほつて置いてよそのを見渡して人の袖のかげや膝の下まで目を配つて居る間に自分の前にあつたのをば人にやられて仕舞ふよく蓋をする人は外の人の手元のまで無理にとる風はなく近くにあるのばかりを蓋をするやうであるが結局その方が澤山に蓋をして勝てるのである碁盤の隅に石を立てゝ彈き落とすのに前の石を目あてにして彈いては當らない自分の手元をよく見て前のセイモクの所を眞直ぐに彈くやうにすれば立てゝある石にキツと中るものである萬事外に向つて求めてはいけないものぢや只自分の手もとを正しうするのがよろしい支那の清獻公の座右の銘にも好い事をして行末の結果を思ふなと云つてある國家を保つ道もこの通りであらう爲政者たるもの

事ㇾ上者自致ニ百痾之本一而怨ニ皆於神靈一乎當ㇾ風臥ㇾ濕反責ニ他人於失攝一皆痴人也」とあり◆禹の行きて三苗を征せしも　禹三苗を征して三旬未だ服するに至らず、歸つて犬に文德を天下に敷くに及んで七旬の後三苗遂に歸服するに至れる故事ある也

〔第百七十二段〕

◆若き時は血氣　論語に「少之時血氣未ㇾ定

が自身にその行ひを愼ます輕々しく勝手氣儘なる事ばかりをいたして内政が亂れて居れば遠國の殖民地などが必ず反を謀るやうになるものだそのときになつて初めて軍略を求めるのは馬鹿のことであるこれは丁度不養生をして風に當つて風邪になり濕氣に中つて腰痛になつて病氣の平癒を神に祈るのを馬鹿なる人であるとして昔の醫學書に書いてあるのと同じことである目前の人民の心配を止め恩惠を施し下を治むるの道を正しくやつたならばその教化は遠くまで流れて行つて自然ト遠國の人も服するものであると云ふことを知らないものである夏の禹王はわざ〳〵出かけて行つて三苗の國を征伐したるがその結果は軍兵を引き上げて德政を下に施すには及ばなかつたのである

〔第百七十二段〕　若き時は血氣内に餘り、心物に動きて情慾多し。身を危ぶめて碎け易きこと、珠を走らし

戒ㇾ之在ㇾ色」とあり◆苔の袂　袂の朽ちて苔の生ひ出づる程にやつれたるを譬へたる也、隱遁の意也、照明の歌に「皆人は花の衣になりにけり、苔の袂は乾きだにせよ」とあり◆長き世語りとも　後世迄も語り草にせらるゝを云ふ◆淡く疎かにして　精神淡薄にして物に感動すること少き也◆心自ら靜なれば　僧靈徹の詩に「年老心閑

むるに似たり。美麗を好みて寶を費し、これを捨てゝ苔の袂にやつれ、勇める心盛にして物と爭ひ、心に恥ぢ羨み、好む所日に定らず、色に耽り、情に愛で。行を潔くして百年の身を誤り、命を失へる例願はしくして、身の全く久しからん事をば思はず、好ける方に心引きて、長き世語りともなる、身を過つ事は若き時の仕業なり。老いぬる人は精神衰へ、淡く疎かにして感じ動く所なし。心自ら靜なれば、無益の業をなさず、身を助けて愁無く、人の煩ひ無からん事を思ふ。老いて智の若き時に勝れる事、若くして容の老いたるに勝

無二外事一とあり

れるが如し。

（講譯）　年の若い時分には誰でも血氣が盛んであつて見るところのもの聞くところのものにつけて心の動き易いものであるために自分の身を危くして碎け易いことは丁度玉を飛ばすやうなものだ譬へばなにかに美くしいところのものを好んでこれがために財寶を費し得々として居れるかと思へば又忽ちにしてその心が變つて來て折角ためたる金銀珠玉も棄てゝ仕舞つて墨染の衣にやつれ或は又血氣にはやつて人と爭ひ喧嘩を突初め或は他人の富貴なるを見て自分の身の上を恥ぢ人を羨めることをばするなど心常に風船玉のやうにフワ〳〵として毫も定まつたるところがないかくして色に耽り情に捕はれ時には一時の熱情のために命まで捨てたるやうなる人が自分の理想のやうに思はれその身を安全にして長命することなどはこれを思はず唯自分が好める方にのみ走りて死んだ後迄も人の口に上る兎角身をあやまつのは血氣の盛んであるときなのであるが之に反して年をとつたるものはその精神が衰へ淡泊にして物に感動す

【第百七十三段】

◆小野小町　小町と稱せらるゝもの數人あり〳〵諸家の說一ならず、中院准后親房古今序注には出羽國郡司が女、容色無双の人なりとあり◆玉造　玉造小町壯衰書と云ふ書なり、中に「予行路之次歩道之間徑邊傍有二一女人一容貌憔悴身體疲痩云々予

ることが薄い心も自然に靜かである故に年若のものが血氣にはやつてやるやうなる無益なることはなさぬ身を大事にして心配もなく人にも亦迷惑をかけまいとする卽ち年がよると智慧がまさるのであるものにまさつて居るのである

〔第百七十三段〕　小野小町が事、極めて判かならず。衰へたる樣は、玉造といふ文に見えたり。この文漬行が書けりと云ふ說あれど、高野大師の御作の目錄に入れり。大師は承和の初めにかくれ給へり。小町が盛なる事その後の事にや、猶覺束なし。

（講譯）　小野小町は昔より有名なる女であるがその傳記と云ふものはよくわからぬ老後になつておちぶれたるさまは玉造

問ㇾ女曰汝何鄉人誰家之子有ニ父母一哉無ニ子孫一歟、女答ㇾ予曰吾是倡家之子艮室之女焉壯時憍慢最甚衰日愁歎猶深」とあり、一説には玉造小町と云ふは小野小町に非らずと◆清行三善清行也、弘法大師の作とする説非也◆高野大師　空海即弘法大師◆承和　仁明天皇の御時の年號　大師の寂年は承和二年三月二十一日

【第百七十四段】

◆小鷹大鷹　鷂鶉など

小町と云へる書物に載せられて居るこれは清行の書いたるものであるとの説があるけれども弘法大師の著述書目錄中に見える、併し弘法大師は承和の初年に死なれたる人であるから小野小町の如き時代は寧ろそれより後なのだらうが矢張りよくわからぬ

〔第百七十四段〕

小鷹に慾くなるといふ。大に就き小を捨つる理り、まことに然かなり。人事多かる中に、道を樂むより氣味深きは無し。これまことの大事なり。一度道を聞きてこれに志さん人、何れの業か廢れざらん。何事をか營まん。愚なる人といふとも、賢き犬の心に劣らんや。

（講譯）

鷹狩をするときに使ふ犬にして小鷹によろしいのを大鷹に使はんとする時は今度は小鷹にはもううまく使へぬや

を捕ふるを小鷹、雉を捕ふるを大鷹と云ふ◆大事　佛道を樂しむ事人生の最も大切なる事であるの意◆道　佛道の事

【第百七十五段】

◆ともある毎に　吉凶を問はず何事かとかくの事のある毎にとの意◆人目をはかりて　人の見ぬすきを計りて堪へ難さに酒を捨んとすうになると云へるのであるがこれは畢竟大きいものゝために小さいものを捨てるからの故である人生の事はいろ〳〵あるが中に最も意義あるものは道を樂しむと云ふことであるこれこそ眞の人生の一大事である故に一度道を聞いてこれを志したるものは宜しく他の一切の事を捨てゝ仕舞ふべきことである犬さへ既に大のためには小を捨てると申せるではないかいくら馬鹿であつても苟くも人たるものが犬に劣つてよからうか

〔第百七十五段〕

世には心得ぬ事の多きなり。ともある毎には、先づ酒を勸めて強て飲せたるを興とする事、如何なる故とも心得ず。飲む人の顔いと堪へ難げに眉をひそめ、人目をはかりて捨てんとし、遁げんとするを捉へて、引き留めてすゐろに飲ませつれば、麗はし

る也◆麗はしき人　殿重なる人◆祝ふべき日　元服・婚禮・節句などの祝言の折にかく狂人となし病者となす事與さむる事なりと也◆醉ひ臥し　呻吟き臥し也◆生を隔てたる　何事も忘れ果て、恰も隔世の感ある事◆これらに無き　外國だけにありて我國になき習慣ならばの意也◆人の上にて　人の行ひとして見たるだにイヤであるに、

き人も忽ちに狂人となりて痴しく、息災なる人も目の前に大事の病者となりて、前後も知らず倒れ臥す。祝ふべき日などは淺間しかりぬべし。明くる日迄頭痛く、物食はずに醉ひ臥し、生を隔てたるやうにして、昨日の事覺えず、公私の大事を缺きて煩ひとなる。人をして斯る目を見する事、慈悲も無く禮義にも背けり。かく辛き目に逢ひたらん人、妬く口惜しと思はざらんや。他の國に斯る習ひあめりと、これらに無き人事にて、傳へ聞きたらんは怪しく不思議に覺えぬべし。人の上にて見たるだに心憂し。思ひ入りたる樣に心にく

況して自ら飲みてかやうならば如何に心うからんの意を含む◆思ひ入りたる樣に　用意深く思ひ入れし容體にて日頃心にく、奥ゆかしく見えたる人もとの意也◆紐はづし　裝束の紐をはづす也、裝束のしどけなき樣を云ふ◆晴れらかに　晴れやかにして隆る所無きを云ふ也◆まばゆからず　物恥ぢもせず、顔さしあげて笑ふ事也◆振舞

しと見し人も、思ふ所なく笑ひ匐り、詞多く、烏帽子歪み紐はづし、脛高く掻上げて用意無きけしき、日頃の人とも覺えず。女は額髪晴れらかに掻き遣り、まばゆからず、顔うちさゝげて打ち笑ひ、盃持てる手に取り付き、善からぬ人は肴取りて口にさし當て、自らも食ひたる樣惡し。聲の限り出しておの〳〵謠ひ舞ひ、年老いたる法師召し出されて、黒く穢き身を肩脱ぎて、目も當てられず振舞りたるを、興じ見る人さへ疎ましく憎し。或は又我身いみじき事共、傍痛く云ひ聞かせ或るは醉ひ泣きし、下ざまの人は罵り合ひ諍ひて、淺

りたる　一曲をかなでたる狀を云ふ◆我身のいみじき事　我身のゑらいと云ふ事、即ち自讃と云ふ也◆得も云はぬ事　嘔吐などつく也◆百藥の長　前漢書の食貨志に「夫レ鹽ハ食肴之將、酒百藥長也」とあり◆萬の病　槃若論に「佛告雜提酒有多過一設二財多病」とあり◆憂を忘るといへど　東方朔傳に「銷レ憂者莫レ若レ酒」とあり◆地獄　大毘婆娑論に「地ハ底也、下也、萬物之中最モ底下ニアルヲ謂フ也、獄ハ局也、謂ハ局ニ拘ツテ自在ヲ得ザル故也と◆酒を取て人に飲ませたる人　梵網經心地法門品に「若シ自身手造ニ酒器ニ與レ人飲レ酒者ハ五百世無シ手何況自飲」とあり、手無き者とは蛇其他の爬蟲類、毛足類をいふ◆斯く疎しと思ふものなれど　以上酒の害毒を

間しく恐しく、恥ちがましく心憂き事のみありて、果ては許さぬ物どもおし取りて、緣より墮ち、馬車より落ちて過ちしつ。物にも乘らぬ際は、大路を蹌踉ひ行きて、築地、門の下などに向きて、得も云はぬ事どもを爲散らし、年老い袈裟かけたる法師の小童の肩を押へて、聞えぬ事どもを云ひつゝ、蹣跚めきたる、いと可哀し。斯る事をしても、此の世も後の世も、益あるべき業ならばいかゝはせん。此の世にては過ち多く、財を失ひ病を儲く。百藥の長とはいへど、萬の病は酒よりこそ起れ。憂を忘るといへど、醉ひたる人ぞ過にし憂さをを

も思ひ出でゝ、泣くめる。後の世は人の智慧を失ひ善根を燒く事火の如くして惡を增し、萬の戒を破りて地獄に墮つべし。酒を取りて人に飲ませたる人、五百生が間手なき者に生るゝとこそ、佛は說き給ふなれ。斯く疎しと思ふものなれど、自ら捨て難き折もあるべし。月の夜、雪の朝、花の下にても心長閑かに物語して盃出だしたる、萬の興を添ふる業なり。つれ〴〵なる日、思ひの外に友の入り來て、執り行ひたるも心慰む。馴れ〳〵しからぬあたりの御簾の中より、御菓子御酒など、善きやうなる氣情して、さし出されたる、いとよ

逃ぶ、以下酒の捨て難きを述ぶる也◆執り行ひたる　酒肴などとり出て飲む事也◆馴れ馴れしからぬあたり　高貴の女中などを云ふ◆物煎りなど　手料理する也、スキ焼、貝焼の類◆御肴何など云ひて　催馬樂に「我家は戸ばり帳をも垂れたれば大君きませ聟にせん、御肴には何よけん、あはびさだをかかせよけん」◆いたう痛む人

下戸の酒を苦痛に思ふ人也◆よき人　高貴の人◆左はいへど　酒は飲むべからざる物といへどの意◆主人の引きあけたる　他所にて酔て其儘寝たるをその主人の朝になりて戸障子など開くを云ふ◆恍れたる顔　寝ぼけ顔◆ひきしろひて　狩衣なども着ず、抱き持ちて引きすりながら恥ぢて逃げ行く也◆かいとり姿　下着ばかりの帯をも

し。冬狭き所にて火にて物煎りなどして、隔てなき同士さし向ひて、多く飲みたる、いとをかし。旅の假屋の野山などにて、御肴何、など云ひて、芝の上にて飲みたるもをかし。いたう痛む人の、強ひられて少し飲みたるもいとよし。よき人のとりわきて、今一つ上すくなしなど宣はせたるも嬉し。近づかまほしき人の上戸にて、ひしくと馴れぬるまた嬉し。左はいへど下戸は、をかしく罪許さるゝ者なり。酔ひ草臥れて朝寝したる所を、主人の引きあけたるに、惑ひて恍れたる顔ながら、細き髪さし出し、物も着あへず抱き持ち、ひ

きしろひて逃ぐる、かいどり姿のうしろ手、毛生ひたる細脛の程、をかしくつきづきし。

（講譯）　世の中には譯のわからないことが澤山にあるものである中でも殊にひどひのは人に酒をすゝめることにて何うかと云ふと酒をすゝめて無暗にのませて面白がるのは何のためであるのだかさつぱりわからぬことぢや先づその酒宴のさまを見るに下戸なる方ではうまくもないところの酒を強ひられるので堪らぬやうな顔付をして眉をひそめソッと隠して棄てやうとする所が又一方では逃げやうとするのを捕へ引き留めて無暗にのませるので果ては眞面目なる人も狂人のやうになつて馬鹿なことをするし健康なる人も忽ち非常な病人となつて前後も知らずに仆れて仕舞ふことになるのである若しそれが祝日などにてあることならば大變である而もその狂態は唯その場だけにてすまぬ翌日まで所謂る二日酔ひにて頭が痛み物が食はれず床についてうなつて居るなど丸で死人か何かのやうで

せぬ姿◉うしろ手　後姿也

昨日あつた事は全然覺へない私共に已が務めをやらないので他人には迷惑をかけると云ふやうになる所が誰がかういふやうなる事をなしたるかと云ふと畢竟酒を飲ませたるものであるのだ罪もないところの人間をこんな目に逢はせると云ふことは慈悲もなければ禮儀にも背いたることと云はればならぬこんなひどひ目に逢はされては誰だつてけしからん殘念なることであると思ふであらうもしこんな馬鹿なることが我が國にはなくして外國だけにあることであつたらは我れ等は妙なる事もあるもだと思ふであらうが何んしろ我れにもあることである故に詮方がない他人のことであるが見ても實にいやなる事だ平素は分別をよくするらしい顏付をしていかにえらさうであると思つて居たところの人も一度酒を飲んで醉へば無暗に笑ひ囃ぎしやべりちらして烏帽子はゆがむ紐ははづれる裾を高くまくりあげて脛を顯はし憚みも何も忘れて仕舞へる樣子はいつもに見て居つたところの人とは思へないやうになる女は又頭髮をあらはに掻きやり恥かしげもなく面をさらげだして笑ひ盃を持つて居るところの人

の手にとりついたりすると又下品なるところの連中は肴を取つて人の口につきつけ自分の口へも入れたりする實に見つともない事をやつてのけるのであるそれから一同聲の限りを出だして歌ふやら舞ふの肌ぬいで變てこなる踊をするこんなものを喜んで見て居るものさへ憎々しいと又一方では碌でもないところの白慢話に人をへこませ或は醉泣をするる又身分の低いところの連中などになると怒鳴りちらし喧嘩を始めてギョッとするやうなる唯もう外聞の悪い面白くもないことばかり果はやらぬと云へる物を無理やりに奪ひとるなどして椽から落ちる歸りには馬や車の上からころんで怪我をするなど步るいて歸るところの連中は千鳥足にて大路をヒョロ〳〵築地や門の所でヘドを吐きちらして居る裝束をかけたる年寄坊主が小さい子供の肩にすがつて譯のわからないことをクド〳〵と云ひながらひよろめいて居るところなどまことに言語同斷の話しであるこんなことをなしてもこの世も後の世も爲にならることならばそれこそまあよいで

あるがそんなことはあるまい未來は兎に角酒をのむのは此の世では過ち多く財産を失ふことであれば病氣にもなる酒は百藥の長と云ふの語もあれども實に萬病のもとであると云つてもよいものである又酒は憂を掃ふところの玉箒などゝ申してすべての心配事を忘れさせると云ふが實は醉漢こそ今更過ぎ去つた心配事などを思ひ出だして泣いたりなどするのである且又現世で人たるの智慧を失ひ善根を燒き盡し惡事を働らき戒めを破つたる結果として死後には地獄に墮ちるのである佛の說にも酒を人にすゝめて飲ませたるものは五百生の間手のないところのものに生れるとあるではないかこんな風に云つて見ると酒飲みはいかにも仕樣のない所の者のやうにはあるが併し又時によると中々面白いところもあるのである譬へば月の夜雪の朝乃至花の陰などにて心靜かに話しながら一杯傾けるのは實に何んとも云へぬところの趣味のあるものだその他退屈なる日に親しい友が訪れて來て酒をくみかはすのは樂しみである又高貴なる人が御簾の中よりいかにも上品なる樣子にて御菓物や御酒を賜はるのもよい又

【第百七十六段】

冬は狹い所にて打ちとけたる友達同志手料理の煮物などして牛飮馬食するのもよけれども旅宿或は郊外などにて『御肴には何がよけむ』と云ひながら芝生の上にて飮むのもよいのである下戶が無暗に强いられて已むを得ず一口飮むも面白いちや又身分のあるところの人が特に『まあ今一つやり給へそれでは餘り少ない』などゝ云はれるのも嬉しいものである又かれて親しくなりたいと思つて居たる人が偶々上戶であつて酒のために親しくなることも亦嬉しいことだ兎に角上戶は面白いもの罪のないところのものである昨夜の醉ひにくたびれてついウカ〳〵と朝寢をなして居る所へ突然主人が引き明けて來るあわてゝ飛び起き寢ばけたる顏に亂れて細くなつたところの髮をヒンと出して着物も着あへず抱たるまゝ引きずつて逃げて行くところの後姿毛の生えたる細脛を出したる所などもよく調和がとれて面白いことぢや

〔第百七十六段〕

黒戶（くろと）は小松（こまつ）の御門（みかど）位（くらゐ）に卽（つ）かせ給（たま）ひて

◆黒戸　清涼殿の北なる瀧口の戸の西に在り　◆小松の御門　五十八代光孝天皇◆たゞ人　人臣を云ふ、光孝天皇は御即位以前、常陸太守、中務卿、太宰帥、上野太守、中務卿、式部卿等に歴任後、御歳五十五にて御即位あらせらる◆まさな事　正なき事にて直料理などして聞食し給へるとの傳へあり

【第百七十七段】

◆鎌倉の中書王　鎌倉は相模の鎌倉、中書は中務卿の唐名、こゝには一品中務卿宗尊親王の事、征夷大将軍として鎌倉におはせし也　◆佐々木隱岐入道　佐々木太郎左衛門源政義也入道して心願と云ふ　◆吉田中納言　萬里小路従一位中納言藤原藤房を云ふ◆乾砂子　雨後の鞠場には鋸屑を敷て濕を去り、さて其屑を掃ひて後乾砂子を撒布するが例也

昔たゞ人に在しまし時、まさな事せさせ給ひしを忘れ給はで、常に營ませ給ひける間なり。御薪に煤けたれば黒戸といふとぞ。

（講譯）　黒戸と云ふのは光孝天皇がまだ御位に即かれない以前にこの處にて御手料理などいたされたることを忘れ給はず御即位になつたる後も始終御手料理などなされたるところの室であるから即ちこれを黒戸と云へるのは御薪のために黒くすゝげたるが故に由るとのことである

〔第百七十七段〕　鎌倉の中書王にて御鞠ありけるに、雨降りて後未だ庭の乾かざりければ、如何せんと沙汰ありけるに、佐々木隱岐入道、鋸の屑を車に積みて多く奉りたれば、一庭に敷かれて、泥土の煩ひ無かりけり。取り溜めけん用意有難しと、人感じ合へりけり。此の事を或る者の語り出でたりしに、吉田中納言の、乾砂子の用意やは無かりける、と宣ひたりしかば、恥しかりき。いみじと思ひける鋸の屑、賤しく異樣の事なり。庭の儀を奉行する人、乾砂子を設くるは故實なりとぞ。

（講譯）　鎌倉中書王の御邸にて御蹴鞠の御遊があつたなりに丁度雨の後であつたので庭がよく乾いて居らなかつたものだからどうしたものだらうかと御相談があつたところへ佐々木隱岐入道が鋸屑を澤山車に積んで持つて來たので庭一面にそれを敷いたので幸ひに泥で困ることはなかつたとのことである又人々もこれだけ澤

山な鋸屑をよくもためたる者ぢやと感心した所が後に或人がこのときの事を話したのを吉田中納言が聞いて『それではそのときには乾いた砂はなかつたのか』と云はれたるので聞て居たるところの自分までが恥かしいやうなる氣がしたこれで以て見るとあのときに感心したる鋸屑も實は下品なる所の變なものであつたのである庭のことを司るところのものは乾いたる砂を用意して置くのが故實であるとか云ふことぢや

〔第百七十八段〕 或所の侍ども、內侍所の御神樂を見て人に語るとて、寶劔をばその人ぞ持ち給へるなどいふを聞きて、內裏なる女房の中に、別殿の行幸には晝御座の御劔にてこそあれと、忍びやかに云ひたりし、心にくかりき。その人古き典侍なりけるとかや。

【第百七十八段】
◆內侍所　宮中三神殿の一たる賢所是也三種神器の一なる寶鏡を奉安せる所內侍の女官常侍する故に內侍所と云ふ◆寶劔　三種神器の中なる御劔を云ふ◆別殿　內侍所也◆晝御座の御劔　昔は御劔二あり、寶劔は神璽と共に夜の御殿の御帳の中御枕の上に安置し、晝御座の御劔は清涼殿にあり、御神樂執行の際內侍所へ行幸ある時持たせ給へる御劔は此晝御座の御劔なるを侍が寶劔と誤りたるを女房が正せる也◆典侍　內侍司に尚侍二人典侍四人掌侍四人あり、供奉奏請宣傳の事を司る也◆その人　女房を云ふ

【第百七十九段】
◆入宋　宋は支那の國名、唐に行くを入唐と

（講譯）　或所の侍等が內侍所の御神樂を見て參つて『寶劔は誰が持つて居つたか』と云つて居るのを聞いて內裏の女房の一人が『別殿の行幸には晝の御座の御劔を持つて行くのが故實である』とふさなる聲で云つて居つたがどうもよく故實のことを心得たるところの女であると奥ゆかしいやうなる氣がした、なる程それも尤もなることでこれは古い典侍の人であつたのだと云ふことであるのだ

〔第百七十九段〕 入宋の沙門道眼上人、一切經を持來して、六波羅のあたり燒野といふ所に安置して、殊に首楞嚴經を講じて、那蘭陀寺と號す。その聖の申されしは、那蘭陀寺は大門北向きなりと、江帥の說の說とて云ひ傳へたれど、西域傳法顯傳などにも見えず、

云ふ如く宋に行くを入宋と云ふ◆沙門　出家の通名◆道眼上人　兼好と同時代の法師なれど傳記不詳◆一切經　大藏經也五千餘卷乃至七千餘卷あり◆首楞嚴經　十卷あり、中印度那蘭陀大道場經とも云ふ◆那蘭陀寺　天竺の寺號、道眼歸朝して其名を假りて號ぜり◆江帥　太宰權帥大江匡房也◆西域傳　玄奘三藏渡天の記錄十二卷あり◆法顯傳　法顯三藏渡天の記錄也十二卷あり◆西明寺　法相寺の沙門圓測の居たる寺

更に所見なし。江帥は如何なる才覺にてか申されけん、覺束なし。唐土の西明寺は、北向勿論なりと申しき。

（講譯）　宋の時代に支那へ留學をしたるところの道眼上人といふ法師が歸朝の際に當り一切經を持つて歸つて六波羅邊の寺に安置しその中でも首楞嚴經を特に講讀して寺の名を那蘭陀寺と命じた、この法師が嘗つて話されたるのに『大江匡房卿の說によると天竺の那蘭陀寺は大門が北向きだと云ふことであるが西域傳法顯傳などにもなければその他何れもこれを書いたる所のものがないして見ると匡房卿は一體何によつてこんなことを云はれたるものであらうかよくわからない支那の西明寺は北向きだ』とこんな話をやつた

【第百八十段】

◆左義長　三毬打、三毬杖、爆竹とも書く、爆竹に竹三本を足に用ふるは昔の三毬打に模したるものなるを可し、又三毬打の玉は天地人の三つの玉に現はして打ち走らしむる也、竹を三本立つるも同斷也正月十五日、松の內に用ゐたる七五三繩、松竹を集めて其玉を燒く也◆眞言院　宮中にあり、後七日御修法の道場也◆神泉苑　二條大宮にあり、拾芥抄に「天子遊賢所云々」とあり◆法成就の池云々

〔第百八十段〕　左義長は、正月に打ちたる毬杖を、眞言院より神泉苑へ出して燒き上ぐるなり。法成就の池にこそと囃すは、神泉苑の池をいふなり。

（講譯）　『さぎつちやう』と云ふのは正月に毬を打つた毬杖（ぎつちやう）を眞言院から神泉苑へ出だして燒くことなのであるそのときに『法成就の池にこそ』とはやすのは神泉の池を云ふのだ

〔第百八十一段〕　降れ〳〵こ雪丹波のこ雪、といふ事、米搗きふるひたるに似たれば粉雪といふ。たまれこ雪と、云ふべきを、誤りてたんばの、とは云ふなり。垣や木のまたに、と謠ふべしと、或物知り申しき。昔より云ひける事にや。鳥羽院幼く在しまして、雪の降る

に斯く仰せられける由、讃岐典侍が日記に書きたり。

（講譯）　雪の降るときに子供等が『降れ〳〵こゆきたんばのこゆき』と云へるがあの『こゆき』と云ふのは小さい雪と云へるの意味ではなくして、その有樣が恰も米の粉に似て居れるのでのことではない『たまれ粉雪』と云へるのである又その『たんばのこゆき』と云ふのも丹波云つたのである尚この次に『垣や木の股に』と歌ふのだと或物識りが云つた一體この童謠は昔から歌はれて居つたものと見えて讃岐典侍の日記にも鳥羽院が少さいときからこの歌をうたはれたることが見えて居る

〔第百八十二段〕　四條大納言隆親卿、干鮭と云ふものを、供御に參らせられたりけるを、斯くあやしき物參るやうあらじ、と人の申しけるを聞きて、大納言、鮭

別當たりき◆鮭といふ魚云々　鮭を參らせぬ事ならば是非に及ばざれど、既に參らす物なれば干鮭にーたる何の雛かあらんの意、隆親卿の辯解せる也

〔第百八十三段〕

◆律のいましめ　法律の禁ずる所との意也、律とは厩牧律を云ふ、曰はく「凡馬牛及犬有ニ

といふ魚參らぬ事にてあらんにこそあれ、鮭の素干何條事かあらん、鮎の素干は參らぬかは、と申されけり。

（講譯）　四條大納言隆親卿が干鮭の天子の御膳に上つたるのを見て或人が『こんな變なものを奉ると云ふことがあつたものぢやない勿體ない』と云つたところが大納言はこれを聞かれて『もし始めから鮭を奉らないことゝきまつて居れば詮方もないがさ迄である又白干では鮎の白干は奉れるではないか只珍らしいからと云つて非難することはない』と云つた

〔第百八十三段〕　人突く牛をば角を切り、人食ふ馬をば耳をきりて其の標とす。標を付けずして人を傷らせぬるは、主の咎なり。人食ふ犬をば養ひ飼ふべからず。

觸レ觝ニ踢レ咬人ニ而記號栓繫不レ如レ法若有ニ狂犬ニ不レ殺者笞四十」と疏に云はく「依ニ雜令ニ畜産觝レ人者截ニ兩角ニ踰レ人者絆レ足齧レ人者截ニ兩耳ニ此爲ニ標幟覇絆法ニ」と

【第百八十四段】

◆相模守時頼　鎌倉幕府の執權北條時頼を云ふ、時政五代の孫、康元元年十一月入道して最明寺と稱す◆松下禪尼　北條時氏の妻、秋

これ皆咎あり。律のいましめなり。

（講譯）人をつくところの牛はその角を切り人をかむところの馬はその耳を切つて目じるしとすることになつて居るから若しその目じるしをせずに置いて人をつかせたり又はかませたりしたる場合は罪はその牛馬の持主にあるのであるこれと同樣に人にかみつくところの犬を飼つてはならぬこれは皆罪になることである律の戒めである

【第百八十四段】相模守時頼の母は松下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるゝ事ありけるに、煤けたる明り障子の破ればかりを、禪尼王づから小刀して、切りまはしつゝ張られければ、兄の城介義景、其の日の經營して候ひけるが、給はりて、なにがし男に張らせ候は

欠

欠

の中に、何れか勝るとよく思ひ比べて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひ捨てゝ、一事を勵むべし。一日の中一時のうちにも、數多の事の來らん中に、少しも益の優らん事を營みて、その外をばうち捨てゝ、大事を急ぐべきなり。何方をも捨てじと心にとりもちては一事も成るべからず。例へば碁をうつ人、一手も徒にせず、人に先だちて、小を捨て大に就くが如し。それにとりて三つの石を捨てゝ、十の石に就く事は易し。十を捨てゝ、十一に就く事は難し。一つなりとも勝らん方へこそつくべきを、十迄なりぬれば惜しく覺えて、

事を必ず成さんと　之れ此一段の眼目にして前にも大事を思ひ立ん人はさり難く心にかゝらん本意をとげずしてさながら捨つべきなりと云へる意也◆人の數多ありける中にて　人の噂をも顧みず思ひ立ちたる事をとげたる物語也◆ますほのすゝきまそほのすゝき「す」と「そ」とは通音にて同じ心也。「ますほのすゝき」とは十寸穗の薄、

多くまさらぬ石には換へ惡し。此をも捨てず彼をも取らんと思ふ心に、彼をも得ず此をも失ふべき道なり。京に住む人、急ぎて東山に用ありて、既に行きつきたりとも、西山に行きて、その益勝るべき事を思ひえたらば、門より歸りて西山へ行くべきなり。こゝ迄來着きぬれば、この事をば先づ云ひてん。日をさゝぬ事なれば、西山の事は歸りて又こそ思ひ立ためと思ふ故に一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる、これを恐るべし。一事を必ず成さんと思はゝ、他の事の破るゝをも痛むべからず。人の嘲りをも恥づべからず、萬事に換

眞麻緒の薄共に同物也
穗の色赤き薄の事を云ふ、古歌に「花すゝき月の光に紛はまし深きますをの色に染めずば」、「汐染むるますをの小貝拾ふとて色の濱とはいふにやあるらむ◆渡邊の聖　攝津國渡邊の里を云ふ、大阪市北區堂島邊の舊名也「聖」は聖僧の意◆登蓮法師　歌人として有名也、詞花、千載新古今、新勅撰、續後撰集に其

欠

欠

ぬ道ばかりは叶ひぬ、煩はしかりつる事は事なくて、安かるべき事はいと心苦し。日々に過ぎ行く様、豫て思ひつるには似ず。一年の事も斯くの如し。一生の間も亦然かなり。豫てのあらまし皆違ひ行くかと思ふに、自ら違はぬ事もあれば、いよ〳〵物は定め難し。不定と心得ぬるのみ實にて違はず。

（講義）　今日はその事をしやうと思つて居れると生憎思ひがけぬ急用ができて來てその事は出來ぬことになつたり折角待つて居るところの人が來たるこれば差支が出來て來なかつたり約束もせぬところの人が來たるこれば差支が出來て來なかつたり約束もせぬところて心にもかけなかつた方がうまくゆく又こみ入つてむづかしかつた事柄が何の苦もなく成就して仕舞ひ何んでもないと思つて居つた事

約束せぬ人也◆思ひ寄らぬ道　存知も寄らぬ事也◆豫てのあらまし　豫期也◆自ら違はぬ事　死のみ違はぬ意也　法然上人の歌にも「何事も皆いつはりの世の中に死ぬるばかりぞまことなりける」とあり

が案外にむづかしかつたりするこんな風に日常の生活にも案外なる事が澤山あるのである一年の事も一生の事もこれと同じであるそれでは豫期したることは皆はづれて仕舞ふものであるかと云ふに必ずしもさうとばかりには定められぬ者ぢやその中には又自から豫期通りに行く事もあるから何が何んであるのか先づ世の中のことはすべて定まらないものだと思つておけばこれだけは必ず慥かである

〔第百九十段〕 妻といふものこそ男の持つまじきものなれ。いつも獨住みにてなど聞くこそ心にくけれ。誰がしが聟になりぬとも、又如何なる女を取りするゑて相住むなど聞きつれば、無下に心劣りせらるゝわざなり。異なる事なき女をよしと思ひ定めてこそ添ひ居たらめと、賤しくも推し量られ、よき女ならば、此男をこそ

【第百九十段】

◆心にくし　奥床しの意◆取りすゑて　娶りて也◆異なる事なき女　普通の女を妻に持てば其なしもよしと思へるにやと其男の卑しく見ゆと云ふ意也◆よき女ならば　美妻を持てば其男さこそ可愛がりて吾本尊と大事にかけて守り居るならんとの意也◆況して家の内　女をやさしくもてなすには妻と定むる事は卑しげなるに、況んや世帯に染み子まで生みたるは化粧などに不注意なれば甚だ口惜しと也◆如何なる女なりとも　如何なる形心操よき女でもの意◆時々通ひ住まんこそ　夫婦同居

可憐くして、吾が佛と守り居たらめ。例へば、さばかりにこそと覺えぬべし。子など出で來て、かしづき愛したる、女、いと口惜し。男亡くなりて後、尼になりて年寄りたる有樣、心憂し。男亡くなりても、明暮添ひ見亡き跡迄あさまし。如何なる女なりとも、中空にこそならめ。よそながら時々通ひ住まんこそ、年月經ても絶えぬ仲合ともならめ。あからさまに來て、泊り居などせんは、珍しかりぬべし。

（講譯）　男は實際妻と云ふやうなるものは持つものではないあの人はまだ獨身であるなど、聞くと實際奥ゆかしいもので

あるこれに反して誰の聟になつたとかどんな女を娶つて一所に居れるとか云ふと實につまらないやうなる所の氣がするものである且つ又それが緑でもないところの女であるとすればあんなものでもよいと思へばこそ一所に居れるのであるぢやなど、輕蔑の心が起るし又その美人とすれば大方無暗と可愛がつて後生大事と守つて居る位の所であらうと思ふのであるまして世帶じみたるやうなるところの女はいやなるものだ子供などが出來てその愛育に沒頭して居るさういふ女も面白くないぢや又夫がなくなつたる後に尼になつて年のよつたなどはすのなき後までかうーた事であるかといやな氣がするものである隨つて又女の方でも甚だたよりないところの氣がするであらう故に何時たつても變らぬ契りを結ぶためには外ないのであるから時々通つて逢ふのがよい唯かりそめにちよつと來てそのまゝ宿つて居るなどは互に珍らしい氣がするであらうよ

〔第百九十一段〕

夜に入りて物の光彩無しといふ人、

◆物の光彩　物のつやひかりの意◆事省き　物事を簡畧にするを云◆およすけたる姿　大人めきたる樣なき姿を云ふ、さて人の身嗜豊は簡畧にして夜はわざと心留む可しと也◆暗くて聞えたる　闇き所にて聞くに用意し愼みたるは奥床しとの意也◆さしてことなる事なき夜　別段儀式など無き普通の夜でも、清らかに打繕ひて行く可き

いと口惜し、萬の物の綺羅飾り色節も、夜のみこそめでたけれ。晝は事省ぎ、およすげたる姿にてもありなん、夜は煌かに華やかなる裝束いとよし。人の氣色も、夜の火影ぞよきはよく、物云ひたる聲も、暗くて聞えたる、用意ある心にくし。匂も、物の音も、只夜ぞ一際めでたき。さしてことなる事なき夜うち更けて參れる人の、清げなる樣したる、いとよし。若きやち心とゞめて見る人は、時をも分かぬものなれば、殊にうち解けぬべき折節ぞ、私公無く引繕はまほしき。よき男の、日暮れて沐るし、女も夜更くる程にすべりつゝ、

であると云ふ意也◆沐浴し沐浴の意、源氏物語東屋の巻に「女君は御ゆするの程なりけり」とあり◆すべりつゝ奥に入るを云ふ

鏡取りて顔なを繕ひ出づるこそをかしけれ。

（講譯）夜になると物の美麗さがなくなるものであると云へる人があるがこれはまことにわけのわからない事ぢや何でも物の美麗さ色あひなどは夜に入つてこそ始めて眞の美麗さがわかるのである晝の間はふうなどは餘りに構まはずしみなる姿でも構はなぬ夜は美しうに筆かなる裝束がよろしい人のやうすも夜の火影で見れば奇麗なのは一層奇麗にして物ないふ聲もほの暗の所で聞くとたしみのあるところの物いひぶりが奥ゆかしいものであるその他物のにほひや音も夜は一段よいものぢや別にこれといふ特別の事もない普通である日に夜おそく來たる所の人の立派なるふうをして居るのは實によろしいものである年の若い間は誰も皆その風采に注意するものであるからたとひうちとけて差支のないやうなるときにもウッカリとして居つてはならぬ日が暮れてから美男が髪を洗ひ梳るとか夜の更けてから後に御殿を下るところの女の鏡を取つて化粧をするとさうしたるところのたしなみはまことに趣のあるものである

〔第百九十二段〕神佛にも人のまうでぬ日、夜參りたるよし。

（講譯）神佛へ參るのにも晝よりは夜の方がよろしいそれもあまり世間の人の參らない物靜かなる日の夜がよろしい

〔第百九十三段〕暗き人の人を量りて、其の智を知れりと思はん、更に當るべからず。拙き人の碁打つことばかりに敏く巧みなるは、賢き人のこの藝に愚なるを見て、己れが智に及ばずと定めて、萬の道の匠み、我道を人の知らざるを見て、己れ勝れたりと思はん事、大なる誤りなるべし、文字の法師、暗證の禪師、互に

【第百九十三段】◆暗き人　暗愚の人◆拙き人の　我得たる一藝を人のえせぬを見て我賢しと自慢するを云ふ也◆萬の道の匠み　巫醫百工の類を云ふと古抄にあり萬般の技藝

者を云ふ◆文字の法師　暗證の禪師　前者は教相を習ひて座禪を知らざる法師、後者は座禪工夫を專として教相に暗き法師也◆境界　自己專門の範圍内の意也

量りて己れに如かずと思へる、共に當らず。己が境界にあらざるものをば、爭ふべからず。是非すべからず。

（講譯）　馬鹿であるものが智慧のあるところの人の胸の中を推量してあつたものでないので、大抵この位のものであらうなどゝ思つて居るのは決して、人を詐る事あらんに、正直に實と思ひて、云ふ間で唯碁だけうまい所の者が賢い人の唯これだけにまづいのを見て世間ではえらい人だなどゝ云つて居るけれども矢張り我れには及ばないなどゝ思つたり又大工や左官のやうなるものでも自分のやつて居ることは普通の人の知らないのを見てから世間で自分が第一番にえらい所の者のやうに思つたりするのは非常なる間違ぢや之と同じ樣に法師の中にても學問本位たるところの文字の法師と坐禪本位であるところの暗證の禪師とが互に自分の方ばかりがえらいよと思つて居れるなどはこれ双方共に間違つて居るものだよ專門外のことについては競爭したり批評をやつたりすべきものではない

【第百九十四段】　◆達人　明達の士を云ふ◆何としも思はで　馬耳東風と聞き流すを云ふ◆聊か覺束なく覺えて　何となく偽らしく不審に思ひての意也◆推し出してあはれ然るめり　偽を云ふよと推量してあはれ我智を計るならんと思ひ乍らゝ也◆心得たれども　偽と云ふ事を知りてはあれどもの意◆覺束なからぬは　我智を計るべからず。例へば或る人の、世に、虚言を構へ出だして、人を詐る事あらんに、正直に實と思ひて、云ふ儘に詐らるゝ人あり、餘りに深く信を起して、猶煩はしく虚言を心得添ふる人あり。又何としも思はで、心を付けぬ人あり。又聊か覺束なく覺えて、頼むにもあらず、頼まずもあらで案じ居たる人あり。又實しくは覺えねども、人の云ふ事なれば左もあらんとて止みぬる人もあり。又樣々に推し心得たるよしゝて、賢げにうち頷づき、ほゝ笑みて居たれど、つやつや知らぬ人

【第百九十四段】

達人の人を見る眼は少しも誤る所あ

ぞと知て居るから知らぬ人と同じ様に默つて過す者もあるの意◆愚者の中の戯れ　虚言を構へて人を計るなどの愚者の戯事にても其はかる手段を觀破ぜる人の前には人々の生れつき本性はよく理があるとの意◆掌の上の物を　中庸に「治レ國其如レ示ニ諸掌ニ乎」とあり◆佛法までを　佛教の慈悲をも唯かくの如く皆虚言にて人を計る事とあり。また推し出して、あはれ然るめりと思ひながら猶誤りもこそあれと怪しむ人あり。又異なるやうもなかりけりと、手を打ちて笑ふ人あり。又心得たれども、知れりとも云はず覺束なからぬは、兎角の事なく、知らぬ人と同じやうにて過ぐる人あり。またこの虚言の本意を始めより心得て、少しも欺かず、構へ出したる人と同じ心になりて、力を合はする人あり。愚者の中の戯れだに、知りたる人の前にては、この様々の得たる所、詞にても、顔にても、隱れなく知られぬべし。況して明かならん人の、惑へる我等を見ん事、掌の上の物を見んが如し。但し斯様の推し量りにて、佛法までを準へ云ふべきにはあらず。

同一に見做す可らずと也

（講譯） 愚人はよく人にだまされるところの者であるが達人の目が一度になるんだならば決して誤ることはないものである喩へば誰かが何かうまいうたを考え出だして人をだますやうなことがあるとすると早速それをまにうけて云ふがまゝになれるところの人もあり又その事を信用し過ぎて虚言の上塗りをなすところの人もある者である又何んとか云はれたる所で氣にもとめず知らぬ顔で居るところのものもあるかと思へば多少は怪しく思つて半信半疑で考えて居るやうな人もある又自分では誠とは思はぬ、けれども兎角人が云ふことであるからとて強いて反對するにも及ばないことゝしてよい加減にすまして居れる人いろ〳〵と考えて見てわかつたるやうなる顔付をなしいかにも尤もらしいうなづきをやつて笑つて居るところのもの實は何もわからぬ人や推量してそんな事もあるであ

らう位は思ふけどもこれでも尚ほ考え違ひがあるかも知れぬと思つて居る所の人もあるぢや又別に不思議なることもないやうぢやないかと手をうつて笑へる所の人やうそとはわかつて居れるものゝわかつたとも云はずにその儘にしてわからない所の人と同じやうなる風にして居るのもある又その虚言の根本のところを初めからよく知つて居つても少しも嘲り誇らず云ひだしたる者とグルになつて却つて虚言を辯護しやうとするところの人もある即ちかうしたる愚者の中の一場の戯れでさへ眞相のわかつたところの人の前ではその人々のわかつたところとわからぬ所が言葉づきにも顔つきにもよくわかるものぢやまして明智の人が惑へる吾等を見る場合には何もかも丁度掌の上にあるところの物を見るやうによくわかることであらう但しこゝに斷はつておくが佛法の方便と云ふことまでこんな推量を以て論すべきものではないのである

【第百九十五段】

或る人久我畷を通りけるに、小袖に

◆久我畷　山城國鳥羽の西桂川の邊◆大口　大口袴也又表袴とも云ふ◆久我内大臣殿　従一位内大臣久我通基の事、愛宕と號し正二位大納言通忠の子◆世の常におはしましける時　狂氣して居られた人なるが、狂氣の治つて居る時はの意也

大口着たる人、木造の地藏を田の中の水におし浸して、懇ろに洗ひけり。心得難く見る程に、狩衣の男二人三人出で來て、此所におはしましけりとて、此の人を具して往にけり。久我内大臣殿にてぞおはしける。世の常におはしける時は、神妙にやんごとなき人にておはしけり。

（講譯）　或人が久我繩手を通過いたしたるところが小袖に大口を着たるところの男が木造の地藏を田の水の中へつけて叮嚀に洗つて居れるのがあつた變であるなと思つて居るとやがて狩衣の男が二三人出で來たつて『あゝ殿はこゝに居られたか』と云つてこの人を連れて皈つたこの人は別人ならず久我の内大臣であつたのである狂氣になる前には眞面目なる尊敬すべきところの人であつたるものが惜しことになつたものである

【第百九十六段】 東大寺の神輿、東寺の若宮より歸座の時、源氏の公卿參られけるに、此の殿大將にて先を追はれけるを、土御門の相國、社頭にて警蹕いかゞ侍るべからん、と申されければ、隨身の振舞は、兵仗の家が知る事に候ふ、とばかり答へ給ひけり。さて後に仰せられけるは、この相國北山抄を見て、西宮の說をこそ知られざりけれ。眷屬の惡鬼惡神を恐るゝ故に、神社にては、殊に先を追ふべき 理 ありとぞ仰せられける。

（講譯） 東大寺の御輿が東寺の若宮から東大寺へ向つて御帳りのときであつた源氏の公卿達が供奉のために參られたるが

なるべし◆氏の公卿八幡宮は源氏の氏神たるを以て神輿に供奉する也◆此の殿 久我内大臣を指す◆先を追はれ 前驅の警蹕せし◆土御門の相國 從一位太政大臣定實公、久我の庶流也◆警蹕 先拂の掛聲也、前漢書に「梁孝王得レ賜二天子旌旗一從二千乘萬騎一出儛レ警入言レ蹕」とあり註曰「警者戒肅也、蹕止二行人一也」と◆兵仗の家 武官の家也大將は武官の司なれば云ふ也◆北山抄 大納言藤原公任

このとき久我の内大臣にはまだ近衞の大將にしてお供の隨身に先きを追はせられるところを 御覽になつて 居あはしたる 土御門相國が『社頭にて先きを追ふのは如何なるものでござらうか』と仰せられたる所が内大臣には『隨身のことは武家の知つたる事です』とだけ答えてその外には何にも申されなかつたそして後にある人に對して『土御門相國殿には唯北山抄ばかりを見て西宮の說は御存じでないのであるのだ神社では神の眷屬の惡鬼惡神を恐れることであるから殊に先きを追はねばならない道理である』と申された

【第百九十七段】 諸寺の僧のみにもあらず、定額の女孺といふこと延喜式に見えたり。すべて數定まりたる公人の通號にこそ。

（講譯） 今日『定額』と云へるところの語は僧侶にのみ用ゐて居るのであるけれども延喜式には『定額の女孺』と云へる

卿の記也◆西宮記　左大臣源高明卿の記錄也北山抄には大嘗會御禊の時警蹕なき事を記せるなり、西宮記には變化の物も警蹕の聲に怖るゝ事を書けり

【第百九十七段】

◆諸寺の僧のみにもあらず　諸國の寺院數を定め、僧正僧都以下の僧員數を延喜式に定む

◆定額の女孺　内侍、藏司、書司等の女官の下にある召使也其員數も職員令に規定せり◆延喜式　五十卷あり、

右大臣藤原忠平等の撰醍醐天皇の延長五年十一月成る

【第百九十八段】

◆揚名の介　名義のみ一國の介となりて、實地に任に下らざるを云ふ、そは介のみに限らず目にもある事なりとあり◆政事要畧　百三十卷、惟宗允亮撰也

【第百九十九段】

◆横川　近江國坂本附近の地名◆行宣法印　坂本の北、あふぎの地に居たる僧、龜山天皇時代の僧也◆呂、律の

ところの語もあるがして見るとこの語はすべて數の定まつたるところの公人には何にでも用ゐるところの通號であるのだ

〔第百九十八段〕　揚名介に限らず、揚名目といふものもあり。政事要略にあり。

（講譯）　揚名の介と申すところの語は古來妙なるものゝやうに思はれて居れるところのものであるが政事要略と云へる本を見ると揚名目と云ふものもあるぢや何にも妙がる程でもないやうである

〔第百九十九段〕　横川の行宣法印が申し侍りしは、唐土は呂の國なり、律の音なし、和國は單律の國にて、呂の音なしと申しき。

（講譯）　横川の行宣法印が仰せられたりしことには支那は呂の音の國であつて律の音がないがこれに反して我が日本國にただ律だけある國で呂の音と云ふもののないぢやとかやうに云はれたきは河竹、仁壽殿の方によりて植ゑられたるは吳竹なり。

〔第二百段〕　吳竹は葉細く、河竹は葉廣し、御溝に近

（講譯）　人のよく誤るところのことであるが竹の中にて吳竹と云へるのは葉が細くてかは竹と云ふのは廣いのぢや禁庭の御溝近く生えて居るところのはかは竹であつて仁壽殿の方に近より植ゑられてあるところのは吳竹である

〔第二百一段〕　退凡、下乘の卒都婆、外なるは下乘、内なるは退凡なり。

音　呂は陰にして柔なる音、律は陽にしてたちてこはき音也

【第二百段】

◆吳竹　昔支那吳國より移植せる竹◆御溝　禁庭の溝也◆仁壽殿　南殿の北九間四面と拾芥抄に在り、賀祝の式など行はせらるゝ宮中の御殿也

【第二百一段】

◆退凡下乘　退凡は凡人を退けて入るを禁ずる標示、下乘は車馬より下りしむる地點を示す標示也下乘は山下にあり故に外也、退凡は山中にあり故に內也◆卒都婆　塔の義也、退凡下乘の卒都婆は印度靈鷲山にあり

【第二百二段】

◆本文　確かな正しい本文也◆十月諸社の行幸　寛和元年十月十四日花山院松尾へ、寛弘元年十月二十一日一條院北野天滿宮へ、延久三年十月二十九日後三條院日吉神社へ行幸あり◆不吉の例　花山天皇御在位二年御落飾あり、後三條天皇は行幸の翌年御讓位其翌年崩

（講譯）　退凡の卒塔婆と下乘の卒塔婆とはどちらが外であつてどちらが內であるのであらうものだらうとはこれよく惑へるところのものであるがまことなるのは下乘が外であるもので退凡が內であるべきのぢや

【第二百二段】　十月をかみなづきといひて、神事に憚るべき由は記したるものなし。本文も見えず。但し當月諸社の祭なき故に、この名あるか。この月萬の神たち、太神宮へ集り給ふなどいふ說あれども、その本說なし。さる事ならば、伊勢には殊に祭月とすべきに、その例もなし。十月諸社の行幸、その例も多し。但し多くは不吉の例なり。

（講譯）　十月の異名を神無月と云ふのであるがこの月には神事にはは遠慮して用ゐないのがよいと云ふしかし別に書いたるところの記錄やうなものはない但し我れが思へるのではこの十月には何處にも祭りと云ふものがないからさう云ふのではなからうかと俗にはこの月諸國の神が伊勢の大神宮へ集まれると云つて居るが本說はない若し實際そんなことがあるのなら伊勢にては特にこの月が祭月とでも云ふべきであらうがそんなこともないやうぢや勿論十月にも天皇の諸神社へ行幸に相成つたところの例は多いがそれは大概は皆不吉であつた

【第二百三段】　勅勘の所に鞊かくる作法、今は絕えて知れる人なし　主上の御惱、大方世の中の騷がしき時は、五條の天神に鞊をかけらる。鞍馬に鞊の明神といふも、鞊かけられける神なり。看督長の負ひたる鞊を、

御あり

【第二百三段】

◆勅勘　天皇の御勘當を云ふ◆靫　箭を入れる器、後世の箙の類也◆五條の天神　京都西洞院五條の松原にあり祭神は少彦名命にして醫藥の神也◆鞍馬に靫の明神　山城國愛宕郡鞍馬山にある由岐の明神を云ふ、祭神は大己貴命にしてこれ亦醫道の祖神也◆看督長（カドノオサ）檢非違使廳の被官也、六十六人あり、別當に從ひ、赤き狩衣白き布袴を着、白き杖を以て雜人を追ひ拂ふ又國々へ赴き國司の善惡を檢する事あり

【第二百四段】

◆笞　昔の刑罰にて最も輕き者に此刑を科す笞は罪人を打つ杖にして唐令には大頭二分小頭一分半長さ三尺五寸許とあり

【第二百五段】

◆大師　釋良源の事、慈惠大師と云ふ康保三年八月天台座主となり天元元年大僧正となる近江國淺井郡の人也◆觀講の起請文　神佛觀

その家にかけられぬれば、人出で入らず。この事絶えて後、今の世には封をつくることになりにけり。

（講譯）　勅令に背いてから勅勘になつたる所の家に靫をかけることがあるが今日はその作法を知つて居るところのものはないのであるたゞしこの靫をかけると云ふ事にては至尊陛下の御病氣のときであるとかその他流行病などにて世間がざわ〳〵といたし落ちつかぬやうなるときに五條の天神に靫をかけられることの例があるとの事であるので又鞍馬にゆきの明神と云へる祠があるがこれも靫をかけられたのであるちやもとは勅勘の人の家に監督長の負ふて靫をかけると人がその家へは出入をなさなかつたのだ、ところがこの事のすたれて後今日ではその代りに門口へ封をつけることゝなつた

【第二百四段】

犯人を笞にて打つ時は、枷器によせて結ひつくるなり。枷器の樣も、よする作法も、今は辨へ知れる人なしとぞ。

（講譯）　犯罪をなしたるところの人を笞にてうつときにはその罪人を枷器と云ふところのものに結ひつけて逃がさぬやうにしてうつのであるしかしこれは昔しにあつたことで今日ではその枷器のさまもその枷器に犯罪者をゆひつけたりするしかたも知つて居るものはないと云ふことである

【第二百五段】

比叡山に大師勸請の起請といふ事は慈惠僧正書き始め給ひけるなり。起請文といふ事、法曹には其の沙汰なしい、にしへの聖代、すべて起請文につきて行はるゝ政はなきを、近代此事流布したるより、又法令には水火に穢をたてず、入物にはけがれあ

るべし。

（講譯）　比叡山に大師勸請の起請文といふものがあるのであるが云ふことはよく云へることであるが昔しは法律家の間にはなかつたところの事である昔しの聖代にては起請文などを作つて政をすると云ふことは決してなかつたものであるが近代になつてからこんなことが流行するやうになつたそれから法令には水火そのものには汚れを言はぬ只その入れ物だけに汚れがあると云へることになつて居る

【第二百六段】　德大寺右大臣殿、檢非違使の別當の時、中門にて使廳の評定行はれける程に官人章兼が牛放れて、廳の內へ入りて、大理の座の濱床の上に登りて、鮨うち嚙みて臥したりけり。重さ怪異なりとて、牛を

請の起請文也、起請文は誓書也、牛馬の血を啜りて之を書し土に埋めて、約する所若し違背せば此牛馬の如く屠られんと神佛に誓ふ也◆慈惠僧正書き始め給ふ　慈惠僧正參內して說教の際、或る女房御簾の內より「有漏地より無漏地に通ふ釋迦だにも羅喉羅が母はありとこそ聞け」と詠みかけしに、僧正「いなむきて見べきいが栗の笑めば一たび落ちもこそせめ」と返歌ありしより艷聞立ちしかば山

門にて觀請の起請を書き始められたる也◆法曹　明法家を云ふ律令を習ひ知りて沙汰して行ふ家也◆水火に穢を忌む事　神事に火を忌む事などあるは水火に穢あるに非ず、其を入るゝ器物の穢あるなりとの意

【第二百六段】

◆德大寺右大臣　從一位藤原公孝也、後太政大臣となる太政大臣實基の子也◆檢非違使別當　別當は長官也、今の警視總監に當る◆使廳の評定　使廳は檢非違使廳也、評定は訴訟

陰陽師の許へ遣すべき由、各申しけるを、父の相國聞き給ひて、牛に分別なし、足あれば何處へか登らざらん、庇弱の官人、たま〳〵出仕の微牛を捕へらるべきやうなしとて、牛をば主に返して、臥したりける疊をば替へられにけり。あへて凶事なかりけるとなん。怪しみを見て怪しまざる時は、怪しみ却りて破るといへり。

（講譯）　德大寺右大臣がまだ檢非違使の別當をつとめて居られる時分のことであつたが中門にて檢非違使廳の會議をして居られたときに章兼と云ふ人の牛が車をはなれて役所の中へ入り込んで來て別當の席としてある濱床の上へあがつて反芻しながら寢そべつて居つたところの人々は皆驚いて『これは

事件の裁判をなす合議也◆大理　檢非違使別當の唐名也◆濱床　高欄付の椅子也◆齝うち嚙みて　和名抄に「獸呑レ芻噬反出而嚼牛曰レ齝」とあり、牛は胃四あり第一胃に入れる食物は濕潤されて第二胃に入り再び吐出咀嚼せられて第三胃に送らるゝ也◆父の相國　公孝の父、太政大臣實基を云ふ◆怪を見て怪まざる時は千金方に「黃帝雜忌云、見レ怪不レ怪其怪自壞」とあり

變な事である陰陽師の所へやつて占つて貰ふがよい』と口々に云ふ所が右大臣の父實基公がこれをお聞きになつて『牛には何にもわけはわからぬ上つて惡いなどゝは固より知るべき筈がない又足がある のである故に何處へだつて上る事であらうかういふやうなることで身分の低い所の役人が牛をとられてたまるものかと云つて牛は章兼に返してやり只そこの疊をかへられたるだけであつた併しその後別に何の凶事もなかつたとのことである古語にも『たとひ怪しい事を見てもそれがために惑はされず平氣で居れば却つて自然になくなつて仕舞ふものである』と云へることがあるこれは慥かに眞理である

〔第二百七段〕

龜山殿建てられんとて、地をひかれけるに、大なる蛇數も知らず凝り集りたる塚ありけり此所の神なりといひて、この由を申しければ、如何あるべきと勅問ありけるに、古くよりこの地を占めたる

〔第二百七段〕

◆龜山殿　龜山天皇の宮殿◆この地を占め　此土地を占領したる也◆左右無く　譯も無くムヤミニの意也◆この大臣　德大寺太政大臣實基公◆王土に居らん蟲　古歌に「草も木も我大君の國なればいづくか鬼のすみかなるべき」とあり、王土は天皇の領土の意也

ものならば、左右無く堀り捨てられ難しと、皆人申されけるに、この大臣一人、王土に居らん蟲、皇居を建てられんに何の祟をか爲すべき、鬼神は邪なし、咎むべからず、たゞ皆堀り捨つべしと申されたりければ、塚を崩して、蛇をば大井川に流してけり。更に祟なかりけり。

（講譯）　龜山殿を建築しやうと云へるので地ならしをやられたることがあつたがその中に大きなる蛇が無暗に多く集まつたところの塚があつたので役人もびつくりして大方こゝの所のぬしなんでせうとてその發見の次第を申し上げたるところが陛下におかせられても別にどうしたらばよからうとの御宸慮も定らぬので『どういたしたらよからうにや』と御下問があつた人々は皆『元から此の所に居れるものならば無暗と掘り棄てることは出來ますまい』と

申しあげたしかしこの實基公だけ一人は『苟くもこの王土に住んで居るところの蟲が皇居をお建てにならうと云ふのにどうして祟りなどを致しませうや鬼神には邪なしと申しますから構ふことは御座らぬ唯掘り棄てゝ仕舞へばよいことで御座らう』と申し上げたそこで實基公の申し上げられたる通りにその塚をくづして蛇をスツカリ大井川に流がして仕舞つたが少しも祟りなどはなかつた

〔第二百八段〕　經文などの紐を結ふに、上下より襷に引き出すちがへて、二筋の中より、輪索の頭を横様に引き出す事は常の事なり。左様にしたるをば、華嚴院の弘舜僧正解さて直させけり。これは此の項やうの事なり。いと見にくし。美はしくは、只くる〳〵と巻きて、上より下へ輪索の先を挿むべしと申されけり。古き人にて

【第二百八段】

◆弘舜僧正　和論語に「弘舜の字多源氏也、道德兼才人也、號二華嚴院僧正一」とあり◆これはこの頃やう　此は此の頃の結び方の意◆古き人　弘舜僧正の事也

斯様の事知れる人になん侍りける。

（講譯）　經文など凡べて巻物の紐を結ぶことをするのに最後の所を上と下とへ離らかしてそれを襷形に十文字にしてその二筋の中よりわなの頭を横に引き出だすのが普通であるのである所がかうしたのを見て華嚴院の僧正はわざ〳〵これを解いて結び直されたそして申されたのには『かういふ仕方は近頃のことである甚だよくない正しく唯クル〳〵と巻いて上から下へわなの先きをさしはさむのぢやと仰せられたこの僧正は老人にしてこんなことを知つたところの人であつた

〔第二百九段〕　人の田を論ずるもの、訴に負けて妬さに、その田を刈りて取れとて、人を遣はしけるに、先づ道すがらの田をさへ刈りもて行くを、これは論じ給ふ所にあらず、如何に斯くは、と云ひければ、刈る者

【第二百九段】

◆田を論ずる　田地の爭論をする也◆訴に負けて　敗訴の義也◆如何に斯くは　刈りつる

ぞと補うて其意を覚る可し◆其所とても刈るべき道理　論じ負けたる田も人の田なれば刈つてよい譯は無いのだがの意也

【第二百十段】

共、其所とても刈るべき道理なけれども、僻事せんとてまかる者なれば、何處をか刈らざらん、とぞいひける。道理いとをかしかりけり。

（講譯）田地のとりやこをなしてその訴訟に負けたるところの者が立腹まぎれにその田を刈り取りて來たれと云ひつけてふので行くのですから私共は何處だつてお構ひなく刈りちらすのです」と答えて云つたと云ふ無法ではあるけれどもその理屈が中々面白い

【第二百十段】　呼子鳥は春のものなりとばかり云ひて

◆呼子鳥　古今の三鳥とて呼子鳥・稻負せ鳥・百千鳥の三つを數ふ、古今集春の部に「遠近のたつきも知らぬ山中に覺束なくも呼子鳥かな」とあり◆鵺　一に鵼と書く、怪鳥也、源三位頼政が射落したりとの傳説あり◆萬葉集　二十巻あり、奈良朝頃勅命もて橘諸兄第一に之を撰し大伴家持之に附加せり◆霞立つ　萬葉集一に「霞立つ長き春日の晩にけるわつきも知らず村肝の心を痛みぬえこ鳥うらなき

如何なる鳥とも定かに記せるものなし。ある眞言書の中に、呼子鳥鳴く時、招魂の法をば行ふ次第あり。是は鵺なり。萬葉集の長歌に、霞たつ長き春日の、など續けたり。鵺鳥も喚子鳥の異樣に通ひて聞ゆ。

（講譯）昔より呼子鳥は春のものであゝと云つて居れることであるが唯それだけにてどんな鳥であるのだがそれについては何も書いたところのものがないのである我れの見たるものゝ中にて或眞言書に呼子鳥のなくときに招魂の法を行ふを云へることがあつたがこれは鵺である鵼のことは萬葉集の長歌にも『霞たつ長き春日の』などと續けて云つたるところがあるからこれも春の物であるとは違ひないのであるどうもこの鵼鳥と呼子鳥とはどうしてもその樣子が似て居れるものゝやうに思はれる

【第二百十一段】　萬の事は賴むべからず、愚なる人は

深く物を憑む故に、怨み怒る事あり。勢ありとて憑むべからず、剛き者先づ滅ぶ、財多しとて憑むべからず、時の間に失ひ易し。才ありとて憑むべからず、孔子も時に遇はず、徳ありとて憑むべからず、顔回も不幸なりき。君を寵をも憑むべからず、誅を受くる事速なり。奴従へりとて憑むべからず、背き走る事あり。人の志をも憑むべからず、必ず変ず、約をも憑むべかず、信ある事少し。身をも人をも憑まざれば。是なる時は喜び、非なる時は怨みず、左右廣ければ障らず、前後遠ければ塞がらず、狭き時は拉げ砕く。心を用ゐなれば云々」とあるを云ふ

【第二百十一段】

◆孔子も時に遇はず　孔子は大聖人なるも諸國を歴遊し遂に用ゐられざりしを云ふ也◆顔回　孔子の弟子也論語に「顔回不幸短命而死（ニシテ）（メ）」とあり◆君の寵も　衛の彌子瑕は寵を受くる時桃の食餘しを君に献じて愛せられ、寵衰ふるや、同じ故を以て誅せらる、其他例多し◆

欠

◆想夫戀といふ樂　樂名也、白氏文集、韻府等に相夫憐とあるを平家物語、盛衰記等に憐を戀に作れり、嵯峨野の奥にて小督局が想夫戀と云ふ樂を琴に彈けるは世に有名なる話也

◆相府　大臣の唐名也

◆晉の王儉　字を仲室と云ひ、齊の尚書令となる◆廻鶻國　唐書に其先は匈奴なりとあり長安を去る八千一百里の北に在りと、廻忽とは相府蓮、文字の通へるなり。

の名にはあらず。もとは相府蓮、文字の通へるなり。

晉の王儉、大臣として、家に蓮を植ゑて愛せし時の樂なり。これより大臣を蓮府といふ。廻忽も廻鶻なり。

廻鶻國とて夷の剛き國あり。その夷、漢に伏して後に來りて、己れが國の樂を奏せしなり。

（講譯）　想夫戀と云へる所の音樂があることであるが文字の通りにては夫を慕ふものゝやうであるけれども實際のところはそんな名ではないのである本は想府蓮と云つた所が文字の音が通ふために遂に想夫戀となつて仕舞つたのである卽ち晉の王儉が大臣であつたときに我が家に澤山蓮を植ゑてこれを見物するときに奏したるところの音樂である大臣のことを蓮府といふのもこれが爲に起つたところの故事であるこれに似たることでは廻忽と云へる所の音樂も實は廻鶻國と云つて强い夷狄の國があるその蠻人どもが漢の國

に降つて後に漢の都に來たつて自國の音樂を奏したるのが即ちこの音樂であるのだ

〔第二百十五段〕　平の宣時朝臣、老の後昔語に、最明寺入道或宵の間に呼ばる、事ありしに、頓てと申しながら、直垂などのさぶらはぬにや、夜なれば異樣なりとも、疾く、とありしかば、萎えたる直垂うち〳〵の儘にて罷りたりしに、銚子に土器取り添へて持て出で、、この酒を獨り喫べんが、寂々しければ申しつるなり、肴こそなけれ、人は靜まりぬらん、さりぬべきものやある、と何處までも求め給へ、とありしかば、紙燭さして隈

垂　着なれて萎れたるさまの直垂也◆その世最明寺殿の時代にはかくの如くに儉約にありきと也

隈を求めし程に、臺所の棚に、小土器に味噌の少し着きたるを見出で、、是れぞ求め得てさぶらふ、と申しかば、事足りなんとて、心よく數獻に及びて、興に入られ待りき。その世には斯くこそ侍りしか、と申されき。

（講釋）　平の宣時朝臣が年をとつてからの後の昔し語りに最明寺入道時賴から或る宵の間に呼ばれたることがあつたがすぐにと申しながら直垂がなかつたので兎や角と遲くなつて居るうちに又使が參つて直垂などがないのですか夜の事であるからどんな風にても早くお越し下さいと言ふことであつたから萎れたる直垂のふだんぎのまゝで參つたところが時賴には銚子に土器を添へて持つて出で此の酒を獨りで飲むのが淋しかつたからお呼び申したのです肴はないがもう人は寢しづまつたであらう何かしかるべき肴にする

ものがあるかと一つ何處までも探して下さいと云ふ事であつたから紙燭をさしともして隅々をさがし求めるうちに臺所の棚に小土器に味噌が少し付いたのを見つけだし『これをさがしだしました』と云つたるところが『それでも充分でせう』と仰せられ氣持よく何杯も飲んで興に入られたその時世にはこのやうな儉約であつたものを今はとてもそんなことではないがさうありたいものだと云はれた

〔第二百十六段〕　最明寺入道、鶴岡の社參の序に、足利左馬入道の許へ先づ使を遣して、立ち入られたりけるに、饗應けられたりけるやう、一獻に打鮑、二獻に蝦、三獻に搔餅にて止みぬ。その座には亭主夫婦、隆辨僧正、主方の人にて座せられけり。さて年毎に賜はる、足利の染物、心もとなく候ふと申されければ、用意してさぶらふとて、色々の染物三十、前にて女房どもに、小袖に調ぜさせて後に遣されけり。その時見たる人の近く迄侍りしが、語り侍りしなり。

〔講譯〕　最明寺時頼入道が鎌倉の鶴ヶ岡の八幡宮へ御參詣に相成つたるついでに足利左馬入道の所へ先づ使者をやつて置いて行かれたる所がその饗饗せられたる所の馳走がかうであつた一献にはのし鮑、二献には海老、三献には萩の餅といふ唯それだけのものであつたその座には亭主夫婦鶴が岡の祠の別當隆辨僧正が主人方の人として座られたそこで時頼が毎年頂戴する足利の染物は御用意下さつたか氣がゝりですと仰せられると用意いたしましたと云つて色々なる染物三十反を持ち出だして左馬入道の前にて女中だちに小袖を縫ひこしらへさせて時頼入道が皈へられてから送つてやられたこれはその時のことを見たるところの人にて近頃まで居つたのが話したることである

〔第二百十六段〕
◆鶴岡　鎌倉鶴岡八幡宮也、康平六年源頼義の勸請にかゝる、應神天皇を祭る國幣中社也
◆足利左馬入道　正四位下足利左馬頭源義氏法名正義法樂寺と號す
◆打鮑　熨斗鮑也
◆搔餅　俗に萩の花と云ふもの也
◆亭主夫婦　昔は君を饗應するに妻女も出でたる也
◆隆辨僧正　鶴岡八幡宮の別當也
◆さて年毎に云々　最明寺殿の詞也
◆心もとなく候ふ　今年給はるべきや用意の程覺束無しと也
◆用意してさぶらふ　左馬入道の詞也

【第二百十七段】

◆大福長者　財産家を云ふ、飜譯名義集に「長者西土之豪族也、富商大賈積レ財鉅萬　咸稱二長者一」とあり◆德をつくべきなり　此德は道德を云ふに非らず、利得の意也◆人間常住の思に住して　人間は死なざる物と思ひつめてとの意也◆君の如く　前の如く　晉の魯褒、錢神論に曰はく「親愛如レ兄字曰二孔方一失レ之則貧窮得レ之則富強、無レ翼而飛無レ足而走、解二人顏一開二雞顏一之口、錢多者處レ前錢少者居レ後」と◆火の乾けるに就き　易乳卦に「水流レ濕火就レ燥雲從レ龍風從レ虎」とあり◆宴飲聲色　音樂女色を聲色と云ふ◆抑、人は　之より兼好の評論に入る◆錢あれども用ゐざらん　後漢の馬伏波が守錢奴と云へる類に浮屠

〔第二百十七段〕　ある大福長者の曰く、人は萬をさし置きて、一向に德をつくべきなり。貧しくては生けるかひなし。富めるのみを人とす。德をつかんと思はゞ、須らく先づ其の心づかひを修行すべし。其の心と云ふは他の事にあらず。人間常住の思ひに住して、假にも無常を觀ずる事勿れ。是れ第一の用心なり。次に萬事の用を叶ふべからず。人の世にある自他につけて所願無量なり。欲に從ひて志を遂げんと思はゞ、百萬の錢ありといふとも、暫くも住すべからず。所願は止む時なし。財は盡くる期あり、限りある財をもちて、限りなき願に從ふ事得べからず。所願心に萌す事あらば我を滅すべき惡念來れりと、堅く愼み恐れて、小用を物と知らば、長く貧苦を免るべからず。君の如く、神の如く畏れ尊みて、次に錢を奴の如くして、使ひ用ゐるといふとも、怒り怨むる事なかれ。次に恥に臨むを堅くすべし。この義を守りて利を求めん人は、富の來る事火の乾けるに就き、水の下れるに從ふが如くなるべし。錢積りて盡きざる時は、宴飲聲色を事とせず、居所を飾らず、所願を成せざれども、心永へに安く

氏は之を有財餓鬼と云へり◆癰疽　共に悪性の腫物也◆理卽　天台宗に六卽あり、理卽、名字卽、觀行卽、相似卽、分身卽、究竟卽是也、理卽とは佛法の名字をもかれ薄地底下の凡夫より畜類に至る迄皆佛性を具するを云ふ

樂しと申しき。抑、人は、所願を成せんがために財を求む、錢を財とする事は、願を叶ふるが故なり。所願あれども叶へず、錢あれども用ゐざらんは　全く貧者と同じ。何をか樂とせん。この掟は只人間の望を絶ちて、貧を憂ふべからずと聞へたり。欲をなして樂とせんよりは、如かじ財なからんには、癰疽を病む者、水に洗ひて樂とせんよりは、病まざらんには如かじ。こゝに至りては貧富分く所なし。究竟は理卽に等し、大欲は無欲に似たり。

（講譯）　或豪富者がこんな話をなしたことがあつた『人は何はさて先づ一生懸命にして金持ちにはならぬ者である貧乏であつては生きて居ても生き甲斐はなからう金持ちだけが人であるところでどうすれば金持ちになれるかと云ふと先づ第一に心の使ひ方を練習せねばならぬ然らばその心とは何かと云ふと外ではない人間と云ふものはいつまで生きて居るものであると思ひ込んで假りにも無常などゝ云ふところの心を起してはならぬものであるこれが先づ第一の要愼であるそれから何にてもなして見たいと思ふところの事を思ふ通りにしてはならぬ人間の世に在る間には自分の事他人の事何歟につけてして見たいところの事といふものは無數無限なるものである故に若し欲せるがまゝしやうと思へば幾百萬金の錢があつても到底出來得る者ではないのである望みには限りなくも錢はどんな大き財産家でも素より限り有ものぢやその限りのあるところの錢を以て限りなきところの望みに滿たさうとするのは到底駄目であるで若し心の裡に何か望みの事が起ることがあればそれこそ自分を滅すところの惡念が來たのであると堅く愼み怖れてたとひ一寸したることでもせぬのがよい次に金錢は奴を使ふところのやうなものである

と思つて居ると到底貧苦は免れることは出來ぬ君の如く神の如く畏れ尊んで行かれはならぬものぢや次にたとひ恥かしい目に逢つても腹を立てたり恨んだりしてはならぬよ其のつぎには正直にして約束を堅く守るのがよい以上の事を堅く守つて利益を求めるところの人には富の來たることが恰も火の乾けるにつき水の低きに從ふがやうであるそして又金錢が出來たならば酒色に耽れず望みを果さなくても心の中は常に樂しいところのものである』と云つた一体人間が財産をほしがると云ふものは何の故であるのかと云ふとそれがあるとせば自分の望めるところが叶ふからの故であるその中特に錢を財とするのは之さへあれば望みが叶へるからの故だ併し錢があつても使はず望みも果さずに居るものとするとならばそれは全く貧者にして錢のないところのものと同じであらう錢があつたところが何んの樂しいところがあるして見ると前記の掟は只人間の慾をたつて貧を憂ふべからずと云ふことになるぢや然らば金持にならうなどいふところの慾を起して樂しみとするよりは寧ろ始より何も財がないとこ

【第二百十八段】

◆堀川殿　久我太政大臣基具公を云ふ◆舍人　牛車の牛飼也◆本寺の前　仁和寺の前也◆下法師　下賤な法師也

ろの方がよいであらう譬へば爰に癰疽と云ふ病を患ふところのものがあるとする患部を水に洗つて氣持がよいと云つて居る成程これはその氣持がよいかも知れんが始めからそんなものにかゝらぬやうにするがよいではないかこんな風に考えて見るとつまり貧も富も同じことになる究竟は理即も同一よ大慾は無慾に似たりである

【第二百十八段】　狐は人に食ひ付くものなり。堀川殿にて舍人が寢たる足を狐は食はる。仁和寺にて、夜本寺の前を通る下法師に、狐三つ飛び懸りて食付きければ、刀を抜きてこれを拒ぐ間、狐二疋を突く。一つは突き殺しぬ。二つは遁げぬ。法師はあまた所食はれながら、事故なかりけり。

（講譯）　狐が人をだましたと云ふところの話はよく我等の耳にし聞けるところのことではあるが又人をかむことがある譬

へば堀川殿で舎人が寝て居つてから足にかみつかれたり仁和寺で夜本寺の前を通りかゝつたところの下法師が三匹の狐にかみつかれたと云ふ話があるのであつてその中の一匹は死し残る二匹は逃げて仕舞つたとのことであるこの法師は随分澤山かまれたるさうであるしかし死ぬる程ではなかつたと云ふことだ

〔第二百十九段〕　四條黄門命ぜられて曰く、龍秋は道にとりてはやんごとなきものなり。先日來りて曰く、短慮の至り極めて荒涼の事なれども、横笛の五の穴は聊か訝しき所の侍るかと、私かにこれを存す、其の故は、于の穴は平調、五の穴は下無調なり。その間に勝絶調を隔てたり。上の穴雙調、次に鳧鐘調をおきて夕

◆黄門　中納言の唐名　四條黄門は其名不詳筆の吹人也◆命ぜられて　兼好に命ぜられて也◆龍秋　樂人なる豊原龍秋を云ふ◆道　音樂の道を指示す◆荒涼の事　過言の事也◆横笛

常の笛の事也、十二律の次第は十一月壹越調、十二月斷金調、正月平調、二月勝絶調、三月下無調（龍吟調）、四月双調、五月鳧鐘調、六月黄鐘調、七月鸞鏡調、八月磐渉調、九月神仙調、十月上無調（鳳音調）と云ふ也◆除く　口をのける也吹さまに口をもちなほす心もち也◆先達後生を恐る　先達は先に道に上達せし人を云ふ、後生とは

の穴黄鐘調なり。その次に鸞鏡調をおきて、中の穴盤渉調、中と六とのあはひに神仙調あり。かやうに間々に皆一律をぬすめるに、五の穴のみ上の間に調子を持たずして、しかも間を配ること等しき故に、その聲不快なりと。さればこの穴を吹く時は必ず除く、除けあへぬ時は物にあはず吹き得る人難しと申しき。料簡の至り誠に興あり。先達後生を恐るといふ事、この事なり、と侍りき。他日に景茂が申し侍りしは、笙は調べおはせてもちたれば、只吹くばかりなり。笛は吹きながら息のうちにて且つ調べもて行くものなれば、穴毎に口